
ふたつのピース

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたつのピース

【Nコード】

N4836E

【作者名】

三亜野 雪子

【あらすじ】

不良な少女とお茶目な教師のラブストーリー。多少ギャグあり

予告

「百合さんは、僕の憧れだったんです」

いつものように、

いつもの場所へ、

毎日行こうとしていた。

だけど、いつもいつも、うまくいなくて。

そんな私をその場所へ連れて来てくれたのは…。

「一匹狼を装い、実は友達が沢山いたりするんでしょう?」

「いるかつ! 頭沸いてんじゃないよ!」

いや、やっぱり勘違いかも。

私に、自由をくれた。

私に、勇気をくれた。

だから、もっと自分を変えてみたいと思った。

一つ、一つ、自分に合った色のピースを組み合わせて、

いつか、あなたの所にはまるように

頑張りたいから。

「二人の時も……時条なんて呼ばないで」

「じゃあ、僕のことにも名前で呼んでくれますか？」

心が動く。

特別な関係が、始まる。

でも、それは願ってはいけない関係で。

「私と彰の関係って………何？」

教師と生徒じゃなくて、何？

自分で願った関係。

けれど、その関係が何なのか、わからない。

「あのね、もう戻っていいよ」

だから、離れようとしたのに。

「戻れると思ったんだ。だけど、俺の方が元に戻れなくなった」

教師と

生徒の

特別な関係。

『ふたつのピース』

来週
スタート

予告（後書き）

毎週水曜日に一話ずつお届けしたいと思います。
ギャグ、最初しかない可能性大です（汗）

不良と教師

始まりはあの瞬間。

「死ね！ この野郎！」

彼女が十人目の不良をノしている時だった。

金色の少し痛んだ髪が衝撃で揺れ、黒い瞳が深く鈍い光を放つ。ロボロの制服についた埃を払い、一つ溜め息をつく。

ふと、視線を感じてそちらに顔を向ければ驚いた顔で男が彼女を凝視していた。

ち、見てんじゃねーよ。

思わず心の中で舌打ちして歩き出した。

多分あいつは嫌なものを見たと思っているんだろうな、と思いながらも彼女は彼の隣りを通り過ぎようとした。

「————いい」

「？」

「格好いい！ 女性なのにすごいですね！」

「はあ？」

突然男は彼女の手を取り、顔を輝かせた。思いがけない言葉と反応で困惑を隠せない。

「な、何だてめーはっ！ キモいんだっ——」

「悪を倒して制圧する！ これぞ憧れの青春時代！」

「おい……」

「一匹狼を装い、実は友達が沢山いたりするんでしょう？」

「いるかつ！ 頭沸いてんじゃねえよ！」

握られた手を払いのけ、彼女は歩き出す。今日は変な日だったと息を荒くしながら。

「格好いい………」

それでも彼は憧れの視線を外さなかった。

「一体昨日のあいつは何だったんだ」

未だに頭から離れないインパクトのある男を思い出して、彼女は歩く。少し着崩した制服姿で早足に。

ふと、目の前で一人の女性を脅す二人の男の姿があった。

「やめて下さい」

「え？ 何か言った？」

「聞こえない」

下品な笑い声を上げて更に女性を怯えさせる。

彼女はその何かにイラついたのか、スタスタと二人の前に歩いていき、蹴り上げた。

「人が変な奴考えてる時に不愉快なことしてんじゃねえよ！」

八つ当たりだああああ！！

二人がそう思うのも仕方なかった。助けられた女性は小声でお礼を述べて逃げていく。そして彼女も何ごともなかったかのように歩いていた。

「くっそ。イラつく」

「ちょ、待て！ てめえ！」

「覚悟しろ！」

完全無視をして歩く彼女に走り寄る二人だが、何故か追いつけない。

「な、何でそんなにはええんだよ！」

「ちょ、止まれよ！」

「うっせーな」

「はあ、今日は男性二人に追いかけて、モテるんですね！ 時^と
条百合^{きじようゆり}さんは」

「そんなんじゃ、ねー………って、てめえ何でこんなところにいんだ
よ！」

自然に話しかけてきたのは昨日の男。やはり憧れの眼差しを彼女に
向けて歩調を合わせている。

「僕もこっちが通勤場所なんですよ。でも、時条さん、あの二人待

って欲しいみたいですけど、いいんですか？」

「だから、あいつらは俺のファンじゃねえって！　つか、てめー何で名前知ってんだよ！」

「昨日生徒手帳拝借させていただいたんです！」

「ちゃっかり盗んでんじゃねえ！」

すっかり二人の世界に浸っていつの間にか走り出している。
不良の男達はもう追いつけず、その背中を見送ることしかできなかった。

「はあ、はあ」

振りほどけなかった。

これでもかなり足が早い百合にきっちりついて行った男は彼女とは対照的に息一つ乱れていなかった。

「あんた、学校まで、来て、どうすん、だよ！」

息も切れ切れで言った。ここは百合が通う高校。こんな所まで彼はついてきた。

「え？ いいんですよ、僕はここの先生ですから」

にっこりと彼は何とも簡単に言った。

「嘘だろお！」

これが二人の出会い。

不良と教師（後書き）

一話目です。まずは出会いから。

不良と人質

「はい、というわけでここが………」

高校ののどかな授業風景に似合わない金色の髪が片隅で揺れる。

教室の前で円の方程式を教える教師はまさに今日の朝に騒動を起こしたあの男、財津彰だ。

まさか、担任だとは…。

そう、彼は百合の担任の教師だったのだ。

学年が上がってから学校に登校していなかった彼女は知るよしもなく、授業が始まる前にやっと知ったのだ。

「はい、ここを時条さん」

「無理です」

「それならちゃんと授業を聞こうね」

くそー、変な扱いしやがって…。

二年に上がって初めて行なう授業は普通で、だから…。

ちんぷんかんぷん…。

一番苦手な教科だけあって、やはりわからなくて、だから授業はつまらなかった。

でも、これが多分普通の生活。

「時条さん！」

「あんだよ？」

「さあ、張り切って生活指導室へ行きましょう」

がちちりと腕を掴んで彼は問答無用で彼女を連れて行く。

「さあ、時条さん」

ああ、やっぱりこいつも教師だよ。説教だよな。

「まずは自己紹介を！」

「ざけんなっ！ 死ね！ お前先生だろ！ もっと言うことねえのかよっ！」

「例えば？」

「その髪の色はなんだとか、服装をちゃんとしろとか、欠席するなとか、真面目にやれとか、あるだろ！」

「ほら、言わなくてもわかってる」

意外な言葉に百合は目を見開く。彰は淡く笑んで他の教師とは違う穏やかな声音で彼女に言った。

「僕はね、君のことがもっと知りたいんですよ」

「……………」

「駄目ですかね？」

「だ、駄目に決まってるだろ！ 気色悪いこと言ってるなっ！」

思わず生活指導室から彼女は飛び出して、走り出す。彰は多少ショックを受けながらも、出て行く瞬間の彼女の顔を思い出して、吹き出す。

耳まで真っ赤にした、純粹な彼女の表情を。

「くっそー、何なんだ。あいつ」

学校が終わり、下校している彼女は登校の時と同じように彰のことを考えながら歩いていた。忘れたくても忘れられないのが彼だ。そこまで印象が強い。

特に彼女の場合はいつも同じ言葉で怒鳴る教師しか印象にない。

あんな奴もいるんだな。

「時条百合!」

翌日の同時刻、同じ顔を見たことを彼女は深く後悔した。何故視界に入れてしまったのだろうと、どうしようもないことで自分を責める。

そう、昨日八つ当たりで蹴り上げた男二人が他の見知らぬ男達も連れて待ち伏せをしていたのだ。

「今日は逃げ切れないぞ! 覚悟しろ!」

「いや、覚悟も何も…」

面倒くさそうに頭を掻きまわす。やる気のなさそうな彼女に口を引きつらせて、彼は尚も声を張り上げる。

「ふ、そんなこと言っていられるのも今のうちだ。こいつを見ろ！」

男達の陰から姿を現したのは、何故か彰。へらへらとしまりのない顔をして、男達にあっけなく捕まっていた。

「さあ、こいつを助けたくば、大人し——」

「ああ、そいつならどうにでもしていいから、通してくれねえ？」

はっきりと述べられた予想外の言葉に一同は沈黙した。それもそうだ。彼女はあっさりと担任の教師を見捨てたのだから。しかも何も悩まずに。

「流石時条さん！ 感動です」

「おい、あんたあっさり捨てられてるんだけど、いいのか？」

「……………って、ええええええ！！ どうしてですか！？ 助けてくださいよっ！」

おっそー！！

「うっさい！ あんた教師ならしっかり自分の身くらい守れよっ！」

時条さん！ と、情けない声を出す彼に百合は深く溜め息をついた。

不良と人質（後書き）

この小説の特徴は、何か区切りなのかわからないところで止まるところかな？

戸惑いと逃亡

相手は六人。一応人質に彰。多分彼女は不利な状況。

彰を助けるという気まぐれが少しだけ起きた今、彼女は思案していた。

どうすればこの状況から脱出できるか。

「……………面倒だな。やっぱり見捨てるか」

「ええー！ それはしないでしょ！」

「うっせーな。大体てめーは何のこのこ捕まってるんだよ」

「それはほら、この人達が時条さんのマル秘写真を持ってるって言うから」

「変態野郎があ！」

みぞうち、一発。彰は即気絶した。

一発じゃ気が済まなかったのか、彼女はまだ息を荒くして周囲を見回す。

びくり、と彼等は肩を震わせて怯えた。

「いや、その……………」

「他に言葉が……………」

「見つかんなくて…」

言い訳を聞くこともせず、彼女はその場にいる彼等を殴り飛ばした。

「たく、どうしようもねえ」

殴ったことで幾分か気は晴れて、百合はスタスタとまた歩き出した。

「時条さん」

校門に入ってすぐに呼び止められる。そんなこと彼女にとっていつものことで、気にしたことなんてほとんどない。
自分はそういうものだ、といつも言い聞かせているから。

「何、その服装！もっとちゃんとしなさい」

ガミガミと生徒指導の教師が百合に怒鳴っている間に実際に彼女よりもだらしのない生徒通り過ぎて行く。

やっぱり……こんなもんだ。

先生なんて、一番気に入らない生徒を徹底して怒る。

それが普通で仕方ないことなんだ。と何かを諦めた瞬間だった。

「はあ、やあつと追いつきました」

「————っ！」

背後から聞こえたのはまぎれもなく彰の声。百合は瞬間的に振り返って目を瞠った。

それは声に驚いたわけじゃない。

「あ、おはようございます。坂本先生」

「財津先生、おはようございます。ちょっと遅いんじゃないですか？」

「いやあ、すみません。あ、時条さん、話があるのでこちらに」

彰は一言断りを入れて百合の手を引いた。

成すがままに従って、目を丸くする。

先生なんて、皆同じ。

「は、放せよっ！」

思わず手を振り払って百合は足を止めた。けれど、彰から視線を外せないのは、まだ戸惑いを隠せていないからだ。

「大丈夫ですか？あの先生長いですから、嘘でもいいから返事していた方がいいですよ」

優しい言葉を彼はかける。他の生徒と変わらない態度を彼女にもする。

例え悪ふざけでも、同情であっても、気にかけてもらえる。

それが、彼女にはどうしていいかわからなかった。

「なん、なんだよ。何で、こんな面倒な俺なんかに構うんだよ！」

「面倒じゃないからですよ」

きっぱりと返されて、間拔けな表情で思わず硬直した。

「時条さん？」

「…………——っ、いいから、俺に構うなっ！」

思わず駆け出してしまった彼女を遠目で見守って、彼は小さく呟く。

そんなの、無理に近いですよ。

一気に階段を駆け下りて、百合は廊下を走る。

教室に向かうわけでもなく、外に出るわけもなく、ただ走る。途中、彼女を呼び止める声が聞こえたが、止まることはできなかった。

「なあ、今度さあ」

「こ、困ります」

どん

お取り込み中の男女の間に突っ込んで彼女はやっと足を止めた。咄嗟に口を開こうとしたが、先に男が怒鳴った。

「いってーな！ 何すんだ！」

「……………うっせー！ 校内で堂々と女追い詰めてんなっ！」

瞬間的に判断して百合は男を蹴り飛ばした。

茫然とそれを見ていた女生徒はお礼を言うべきか悩んでいた。

「と、きじょう…さん」

百合が振り返り、彼女と目を合わせる。だが、すぐにまた走り出してしまった。

結局何とも言えなかった彼女はびっくりして言葉を失ってしまった。

「すごい、顔赤かった…」

嘘と感動

またつまらない授業を聞いて、百合は目を細める。
黒板の音が静かなこの空間に響き、先生の声が抑揚なく聞こえてくる。

ねみー。

そのどちらも彼女を眠気に誘う。うとうとと、少しずつ自分の意識を手放していく彼女。
しかし、安らかな眠りは訪れなかった。

「時条さん！」

「――っ!？」

「寝たら襲いますよー！」

いつの間にか近付いていた先生、つまり彰は目の高さを合わせて百合を見ていた。

彼女は無意識に彼の顔を掴んで、突っ込んだ。

「おお！ 襲ってみやがれ、変態が！」

「ぎ、ギブギブ！」

握力でKOする大人はおそらくそうはいないだろう。
顎をさすりながら、彼は苦笑して立ち上がる。

「もう、ちゃんと授業受けて下さいね」

百合はしかめっ面をしながらも、意識を授業に戻した。
見慣れない公式がずらっと並んでいる。

わっかんねー。

結局ただノートを書いただけだった。

少し長い金髪が風に揺れて光を放つ。それは日の光が彼女の髪に反射して。

「やっぱり一人なんですネ」

何故かどんな場所においても彼はやってくる。

購買で買ったパンを片手に百合は屋上にいた。

「悪かったな」

「いえ、何となく…」

何故か彰は淋しそうに笑う。その表情に彼女は何故か何も言えなかった。

「時条さん、僕は……………」

がしゃーん。

「……………！」

ガラスの割れる音に二人は反応し、下を覗いた。見ればそこには他校生の男子が数人群がっていた。見るからにガラの悪そうな彼等に百合は嫌な予感を覚えて眉間にシワを寄せる。

「……………はあ」

「え？ あ、時条さん！」

吐き出して彼女は走り出した。一拍遅れて彼も後を追う。
いつもとは違い、かなり本気で走っているためか、なかなか追いつけぬまま、靴も履き替えずに飛び出した。

「おい、時条百合は何処にいる？」

彼等は彼女の名前を叫びながら女生徒に詰め寄っていた。
百合は怯むことなく彼女達の前に入り込んだ。

「やめろ！」

彼等はじつと百合を見つめて詰め寄る。

「ああ？ 何だおめーは！ 俺達は時条百合に用があんだよ！ 邪魔すんな」

「……………」

顔知らねーのかよっ！

思わず心の中で叫び、彼女は後ろの女生徒に視線を送った。彼女は

何かを察して少しずつその場から離れて行く。

「いいからおめー、早くあいつ出せよ！」

「だぁ！ だからそれはこのお……」

「駄目ですよ！ その人に何を言っても！」

名乗ろうとした彼女の前に更に今度は彰が割り込み、言葉を発した。

「この人は、成長ホルモンが少ないという生まれつきの病気を持つ」

「は？」

「そのために幼い頃に両親に捨てられ、親戚を回り」

「ちょ、おま」

「愛を知らぬまま…心身共に成長できぬまま、ここまで来てしまったのです！」

「てめー、何言ってるん——」

殴り付けようと上げた手はそのまま止まり、彼女は信じられない光景に顔を引きつらせた。

「そうだったのか……くう、泣けるなあ」

「そうか……だから自分を傷つきたいんだな」

よくわからないが、何故かそれで納得してしまったらしい。

全員殴りてえ。

「彼女の心は今ズタボロに傷付いて、今やつとの状態なんです！
だから、そつとしといてあげて下さい」

「そうだな、それが一番だな……。よし、てめーら！ 帰るぞ」

「「へえい」「」」

ふざけたお芝居を聞き、彼女はついにキレた。

「いいのかよ！ おめーら時条百合に用があったんじゃないのかよ
！」

思わず叫んだその名に彼等は案の定動きを見せた。

「それは俺なんだよっ！」

嘘と感動（後書き）

まだ、ギャグですね。大丈夫ですよ？
そろそろシリアスになってくるかも…です。

憧れと嘘

「あー！ 何で言っちゃうんですか！」

「うるさい！ お前の助けなんか…いらないっ！」

睨み付ける彼女の顔を淋しそうに見つめて、彰は思わず口を閉じた。

「お前が、時条百合か…」

不良の男達は顔にシワを寄せて百合の元へ歩いてくる。
彼女は怯えることなく彼等を見返す。

「お前……………」

すっと手が上げられる。反射的に百合は身構えて、身体に力を入れた。

「苦勞してたんだなあ」

上げられた手は彼女の肩に置かれ、男の顔は哀しそうだった。
百合は目を点にして、何も言えないでいる。

「時条百合がそんな奴なんて知らなかったぜ」

「悪かったな」

「俺達はてっきりただでかい面した女かと」

「これからは気をつけるから、じゃあな」

彼等は自ら妙な納得をして、帰っていく。もう、何を言っても意味がないと悟り、百合は止めもしなかった。

「いやあ、よかったですね！」

「おい……何で俺を助けた？」

胸倉を掴もうと手を延ばした。しかし、彰は彼女の手をあっさりと受け止めて、いつものひょうひょうとした顔を向けている。

「そんなの、わかりきったことですよ」

「先生だからか？」

「それも、あります」

彰は少し視線を外す。いつもよりも重い雰囲気醸し出す彼に百合は手を下ろした。

「憧れだから。百合さんは、僕の憧れだったんです」

「？」

「学校が嫌いでも、両親が側にいなくても、学校に行こうと頑張る…百合さんがすごいと思ったんです」

予想にもしなかった言葉に百合は目を見開く。

憧れ…？

すごい…？

何が？

「知らないでしょう？　僕が昔は貴方以上に荒れた不良だったなんて」

「えっ!？」

彰は苦笑して、百合にちゃんと視線を合わせた。

今までにないとても真剣な瞳。まっすぐに彼女を捕らえて、否定できない空気。

「なあんて、嘘でえす！」

「……………っ！」

「本気にしました？」

いつものふざけた表情に戻して、彰は笑いながら校舎の中に帰っていく。

その瞬間、学校中に四時間目の五分前を知らせるチャイムが鳴り響いた。

「あんのくそ教師い！」

そう叫ぶのも仕方ない。

翌日。

なあんか、今日早く着いた。

いつもかなりギリギリに着く百合は珍しく教室に一番乗りで入った。違和感を覚えて教室から出ようとしたら、その前に二番手が教室に入ってきた。

「あ、時条さん」

見覚えのない女生徒。同じクラスなのだから知られていてもおかしくはないが、いかにも用事があるような表情をしていたため、百合は眉を寄せた。女生徒が百合に近づくことはほとんどないのだ。

「あの、昨日助けてくれて…ありがとう」

「ああ」

昨日、百合を探していた不良達に絡まれていた女生徒だった。丸く、目元がパッチリとし、丸い輪郭に小柄な身体が印象的で、髪には少しばかり茶がかかっていた。本当に大人しく生きてきた女の子のイメージそのものだ。

「悪いな、俺のせいだ…。怪我とかしなかった？」

やわらかく声をかけられて、彼女は顔を赤くして頷いた。

「よかった」

「あ、時条さん。最近よく学校に来るけど、もしかして財津先生のせい？」

「ち、ちが……！」

否定しようとした言葉は途中で止まり、百合は思案した。
今日、早く学校に着いた訳は…。

そうだ、不良が絡んで来なかった。

思わぬことで本当に彰に感謝しなければならなかった。
それに、彼は…。

「時条さん？」

「……………なあ、先生が喜ぶことって、何だと思う？」

意味深な問いに彼女は頬を赤らめた。百合は勘違いされた内容をす
ぐに読み取って声を荒げる。

「違うからな！　そういったイヤらしいものじゃなくて…」

「……………あ、そうだね。時条さんの場合はやっぱり、勉強じゃないかな？」

にっこりと彼女が述べた内容はかなり百合にとってキツイ内容だった。

憧れと嘘（後書き）

すこおしずつ進展Ⅱシリアス
この方程式でこの話は成り立っています（汗）

戸惑いと友達

今日も彼女は学校に向かう。いつもと違う、スムーズ過ぎる登校。何も絡まねず、清々しい朝。

登校している生徒はまるっきり見当たらない。見えるとすれば小さい小学生くらいだ。

「あ、おはよう。百合ちゃん」

「！」

突然声を掛けられて、百合は肩を震わせた。振り返ればそこには昨日、いろいろと話を聞いてくれた彼女。

「おは、よ。みいちゃん」

彼女の名前は天上みり。みいがあだ名で、そう呼んでと昨日百合は押し切られた。

ぎこちない挨拶を交わして、二人は一緒に学校へ向かう。

「百合ちゃん意外と早く登校するんだね。昨日はびっくりしちゃった」

「あー、いつもなら不良に絡まれて遅れるから…」

いつもこの時間に出ていた。だから、同じ時間に着くはずなのに。みりは少し目を細めて、笑った。

「大変だったね」

軽い一言。だけど、何か心に残るものが取れた気がした。友達とはこういうものだろうか、と百合は微笑んだ。

「あ、みい！ おはよ」

「しお！ 何今日早いじゃん」

突然人が増える。知らない顔に百合は口を閉じた。しおと呼ばれた彼女は隣りにいた百合に視線を移して目を丸くする。

「あ、時条さん！ この前はありがとね」

につこりと笑われて百合は瞬きする。記憶を辿れば確かに彼女の顔には見覚えがあった。

真っ黒な長い髪を高い位置で一つに括って、少し細いが、綺麗な輪郭をした彼女。少し大人っぽく見えるが、話してみるとかなり子供っぽい性格だ。

「私だよ、この前廊下で助けてくれたでしょ？」

「あ！」

「何、あんたも助けてもらったの？」

みりは驚愕して声を上げた。

彼女は同じ学校の生徒に追い詰められているところを百合が助けた相手だ。

あの時ほとんど顔を見ずに通り過ぎただけだったため、思い出せなかったのだ。

「私、のほらしおり野原紫央里。しおって呼んで。百合ちゃん」

彼女達の環境の合わせ方に百合は目まいを起こす。今までこんなに女子と話すことがなかった彼女はこういう時どうしていいのかわからないのだ。

「あー、うん。よろしく」

「やっぱり、百合ちゃんて思ったよりも普通だよね！　びっくりしちゃった」

「しお、あんた何気に失礼。あ、早くしないと時間なくなっちゃう

ね」

いつの間にか三人で登校することになり、簡単な話をしながら学校に着いた。

「こんなに早くから何かするの？」

「それが……あ、しお！ ついでにあんたも手伝いな！」

「へっ？」

みりは無理やりに紫央里の腕を引いて、自分達の教室に引きずり込んだ。

職員室では、テストに向けて少し重苦しい雰囲気醸し出していた。彰は茶をすすりながら、周りの者の声に耳を傾けた。

「今回どこも範囲が広いから皆必死ですね」

「あ、特にあの子、時条はキツイでしょう」

「一年の時はかなり優秀だったんですけどね」

こんな会話で名前が上がってしまうくらい問題な生徒。けれど、彼等はそこまで彼女を怖がってはいない。

……元がいいからかな？

思わず笑んで彰は作業を再開する。

「みい！　そこ違う！」

「え、嘘！　ってか、しおも違う」

「マジ？」

いつの間にか三人でやり始めたが、何故か二人の方が必死になっているため、百合は瞬きをする。

「大丈夫？」

「「だめえ！」」

見事なハモりに顔を緩ませる。
静かに笑っている彼女に二人は目を丸くして見た。

「笑った!」

「可愛いよ、百合ちゃん!」

「へ、な、何?」

突然の反応に百合は身構える。が、そんな行動は無意味で。

「今度からそうやって笑えば先生も少しは振り向いてくれるよ!」

「————っ、だから違うんだってばあ!」

周囲のことはお構いなしの百合の絶叫が教室に木霊した。

戸惑いと友達（後書き）

私にしてはかなり珍しく女友達がこの作品は出ました！しかも、結構重要キャラです。

本音と憧れ

そして月日は流れ。

「終わったあ！」

「よし、遊び行こうぜ！」

彼等の地獄と思えるテスト期間は終わりを告げ、この日は午前で学校は終了した。

「百合ちゃん、三人でご飯食べに行かない？」

「へ、あ、うん！ 別にいいけど……」

未だに女子（友達）とのノリになれない彼女はぎこちなく返事をする。

あまり時間がたたないうちに紫央里も顔を出して、三人は学校を後にした。

向かった場所は近くのファミリーレストラン。同じような考えをもった生徒達が席を埋めている。

「やっぱりお昼時は混んでるね」

「まあ、待ってないからまだいい方じゃない？ あ、そういやあしお、テストどうだった？」

「聞かないでえ！ 数学ズタボロだよお」

情けない声を出して伏せる。

紫央里は文系、みりは理数系と見事にわかれている二人はいつも互いに教え合ってテストを乗り越えているらしい。

「百合ちゃんは？」

「あー、多分それなりに書けた気がする」

曖昧に答えて苦笑する。合っている自信はないため、断言はできない。

「そっか、よかったね！」

「先生の度肝抜いてあげないと」

軽く笑い合える。そんな存在に彼女は目を細めて思った。いいな、と。

陽が暮れかけた時間、彰はまだ職員室にこもっていた。

「財津先生まだやってたんですか？」

「ええ、明日授業があるからその時にもう返したくて」

「そうですか。あ、今回は多分先生にとって嬉しい結果があると思いますよ」

「？」

国語の先生の意味深な言葉に彼は首を傾げる。疑問に感じながらも、少しずつ回答用紙に赤ペンをつけていった。

「58点……さぼったな、古田。えーと、…78点。まあまあだな。………お、こいつは頑張ったな、んーと………」

動かしていた手は突如止まり、目を丸くする。
見慣れた名前。けれど、予想していなかった名前。

「え………？」

疑問と共にその場にノック音が響いた。彰以外誰もいない職員室。当然彼が返事をする。

「やっぱりいた」

「百合さん！」

まだ制服姿の彼女は何も言わずに部屋に入る。髪が軽く揺れて、一定のリズムの足取りで目の前を通り過ぎる。

「なあ、どうだった？」

「あ………すごいですよ、百合さん！ 85点です！ 頑張りましたね。 はっ、まさか…カンニングじゃあ」

「するかっ！」

いつも通りの空気に百合は息をついて窓を開ける。少し蒸し暑い風が部屋の中に入る。

「百合さん？」

「なあ、本当は…どうなんだ？」

「…何ですか？」

ゆっくりと身体の向きを変えて、彰と視線を合わせた。

「俺が、懂れって…話し」

「……………」

「本当はどうなんだ？」

いつもふざけた口調の彼が、唯一真剣に語った。だから、ずっと気になっていた。本当は、それは冗談ではないんじゃないかと。

「それは……………」

「まあ、どうでもいいけどな。そんなこと。俺は、見ていてくれたことだけが…嬉しかったからさ」

誰も、気付いてくれなかった。

「わかって、くれてたんだな。俺が学校行こうとしてたこと」

「当たり前ですよ」

彰は立ち上がって百合の顔を覗いた。
にっこりと穏やかに笑って頭を撫でる。

「だって、僕の憧れですから」

頭から伝わる体温が、妙に心地よい。久し振りに感じる温かさに百合は目を細めた。
不意に出た涙に彰が驚く。

「えっ、あっ！ 何かしましたか？！」

「な、何でもねえよ！ ちょっとゴミが入っただけだ！」

くそ、不覚だ。

涙を乱暴に拭って、百合は彰を見る。蒸し暑い風のせいかな、少しだけ顔が熱く感じた。

本音と憧れ（後書き）

はい、今日から八月に入りました。

あらすじにも書いた通り、今日からしばらく月、水、金曜日で小説を投稿したいと思います。

統治と憧れ？

「あの野郎……いつかぜってえ殺す！」

テスト期間が終わった初めての朝。彼女が言った言葉はこれだった。丁度よく声を掛けようとしたみりは思わず動きを止めてしまった。

「ちょっとちょっと！ 何があったの？」

「うわ、びびったあ！ いや、何でもない」

慌てて笑顔を取り繕って笑う。

言えない。

「当時僕は親に変な反抗をして、学校は行かず、変な仲間を作って周辺一帯を統治してました」

「とう、ちゅ?！」

驚愕して百合はすっ頓狂な声を上げた。

「はは、だけど途中からすぐく学校に行きたくなって……」

儂く笑う彼に思わず百合は目を細める。

「だけど、行けなかった。素直になれなくて、意地を張って……だから、百合さんはすごいです」

「……そんなこと、ない。私は……ただ……」

そんな意地を張るような人間がいなかっただけ。

言おうとしていた言葉は何故か飲み込んでしまい、俯いた。

「今……」

「え？」

気付けば彼の顔は緩んでいた。何故笑っているのか百合は理解できず、眉を寄せた。

「にしても、僕のためにこんだけ頑張ってくれたことは感激です」

「な、ちが！ 何でてめーはそう都合のいい思考ができるんだよ！」

「百合さんは……可愛いですよね？」

瞬時に彼女の顔は赤く染まる。自分でも予想できないそれに彼女は走り出した。

「くそ、だから嫌いだお前なんかあ！」

捨て台詞と共に彼女は消えていった。

言えない……そんな恥ずかしいこと。

大きく溜め息をついて百合はみりと学校に向かったのだった。
順調に授業は進み、テストも順調に返ってくる。それを興味なく見ながら百合は昨日のことを思い出していた。

いつかあいつの正体もあばいてやる！

熱く、新たな目標を立てた。

「よく頑張りましたね、時条さん」

同じく数学のテストも配られ、手渡された。85と赤ペンで書かれた紙に薄く笑って席につく。
授業が終わり、帰ろうと鞆を持った時、彰と目線が合った。にっこりと先生の笑顔を向けて教室を出て行く。

「？」

何故かその笑顔に違和感を感じる。何か、いつもと違う。

気のせいかな？

しかし、それは気のせいではなくなってしまう。

「最近百合ちゃん財津先生と話してないね」

「何かあったの？」

やはり一番最初に気付いたのはこの二人だった。百合は首を横に振り、頬杖をつく。

「知らない。何かあっちから避けてるみたいだし」

「あ、だから百合ちゃん不機嫌なんだね！」

紫央里は軽く確信して笑顔で言った。咄嗟に否定する前にみりはああ、と納得してしまう。

「違う！」

「でも、好きなんじゃないの？」

「違うっ！ 何でそうなる！ 俺は……別に」

「じゃあ、憧れとか？」

憧れ……か。

もしかして……やっぱり俺はあいつの憧れにはなれなかったのかな？

もやもやと、すっきりしない日々が続く。

平和な学校生活。それが既に当たり前になりつつある。
そんな時。

「よお、久し振りだな」

「…………誰だっけ？」

「いつかは先公共々世話になったなあ！」

ガラの悪い連中は下校途中の彼女の前に立ちほだかり、そこらに置かれたゴミ箱を蹴り飛ばした。

「今日は…そうはいかねえよ！」

「お前ごときに俺はやられない」

ガンを飛ばして百合は鞆を投げた。
身軽さを武器にした素早さで彼等の間をくぐり抜け、蹴り飛ばす。

「さあ、やってみろよ」

「調子に乗るなっ！」

反射的に彼は百合の足を掴む。バランスを崩してタイミングを逃し

た彼女はそのまま彼に捕まった。

「さあ、どうする？」

統治と憧れ？（後書き）

少し今日が投稿の日だということを忘れるところでした（汗）
もうそろそろ第一部が終了致します。

百合と彰

力が強い。

苦しい。

やっぱりさ……

女なんてこんなもんなのかな？

襟を締め付けられて百合は苦しそうに顔をしかめる。

敵わない、そう確信した。どうしようもないこの状況の中、彼女は笑う。

「何がおかしいんだよ！ 頭狂ってんじゃないのか？」

「ああ、そうかもな。俺…やっぱり何もできない」

諦めた。

結局不良は変わらない。誰にも、大切な存在にはなれない。

「……………」

助けて。

先生…。

「よい子は帰る時間ですよ」

圧迫していた力は消え去り、百合は解放される。
咳き込みながら百合はその後ろ姿を見やる。
それは心の中で願った人。

「さあ、俺の可愛い生徒をいじめる奴はだあれだ？」

暗いため彼の表情は細かく読み取れない。それが手伝い恐ろしさを
倍増している。

「な、何だ？」

「おい！話がちげーよ！男の方は弱いって……………ひっ」

鋭い睨みで不良を黙らせる。口元が笑んでいても、それは逆に恐怖を煽っていた。

「今度俺の生徒に手え出したら…」

脇にある電柱を殴る。そこから無数に広がるヒビ。

「こうなるぜ？」

「「う、うわああああ！」」

情けなく逃げていく彼等を百合は見つめることしかできない。

ゆっくりと彼は百合の方へ振り返る。真剣な瞳がまっすぐに向けられ、息を飲んだ。

「大丈夫か？」

「……せん、せ？」

恐怖や苦しきなど既に忘れて、百合は目の前に彰がいることが嬉しかった。

「……………」

触れようと延ばした手は寸前で避けられて、彰は綺麗に笑った。

「よかった。無事ですね。じゃあ、今日は家まで送って行きますよ」

愕然とした。自然に、しかし明らかに彼が避けていることが、理解できたから。

百合は身体に力を入れて立ち上がる。

「時条さんもう少し早い時間に帰宅するように……………って」

注意をする彰の脇を無言ですり抜けて百合は走る。

何も言わずに駆けて行く彼女に彼も思わず追いかけた。

「ちょ、時条さん！」

「来るな！」

強く一喝して更に速度を早めた。

けれど、距離は離せず、縮まる一方で。

最後には…。

「……………きゃあ！」

思い切り手を掴まれてその場にうずくまる。しばらく互いに息を乱しながら無言が続いた。

痺れを切らしたのか、彰が先に口を開いた。

「何で……逃げるんですか？」

「それは……こっちの台詞だろ？」

顔を上げた彼女の目からは大粒の涙が零れていた。
予想外の状況に彰はかなり焦った。

「え、あ、何で？」

「何で……避けたよ！何かした？ 私…何かした？」

震える声音。震える身体。零れる涙。哀しそうな表情で必死に彰の腕を掴み、百合は訴える。

「直すから、謝るから…避けないでよ。お願いだから、二人の時も……時条なんて呼ばないで」

いきなり変わった。
いきなり離れた。
理由がわからない。
ただ、哀しくて。

どうしてこんなにツライのかわからない。

「じゃあ、僕のこと名前でも呼んでくれますか？」

「……………っ、あ…：きら。彰」

胸の鼓動が早くなる。

ゆっくりと彰は百合に近付いて彼女を抱き締めた。

「———！ え？」

「知らないからな。そんな風に言われたら、俺止められねえよ」

いつもと違う、いつもよりも近い。

何を言われたのか、それがどういう意味なのか、百合は未だに理解できない。

「彰？」

「百合でいいんだろ？」

ど、くん。

「後で後悔しても知らないからな」

その時の彰の笑顔は、見たこともないほど子供っぽいものだった。

百合と彰（後書き）

ふい、第一部終了ですかね。ちなみに三部構成です。
二部は恋愛進行編です。

っというわけで、ちょっとした予告。

特別な関係になった、夏。

普通なら先生となんて会えない、はずなのに。
毎週金曜日は彰の家に訪問日。

「ゲームしよう！」

結果、三戦三敗。そして何故か行くことになった夏祭り。

内緒の関係、内緒の行動。

それで、充分だったのに。

気付いたから、私ということで、彼が迷惑することに。

「あのね、もう戻っていいよ」

意を決して離れた。

求めていたはずの関係を否定して。

その時の、彰の表情が忘れられなかった。

「私……やっぱり先生のこと、好きなんだ」

そして、やっと気付く気持ち。

初めての恋…。

夏が終わった。始まるのは文化祭。
お化け屋敷、投げ輪、占い屋。
カラオケ喫茶が私達の出し物で。
忘れていた私の性質。

「時条さんて…」

あれから言われるのは名前じゃなくて。
それを聞く度に胸が苦しくなる。

「せ、先生！ 何笑ってっ……」

近付いて、あの時のように話をする。
恐れているあの状況。

元には戻れた。

だけど、元に戻りたかった。
だって、知っちゃったから。

「戻りたいんだ」

彼が紡ぐ。

私の願いを。

「私、彰が好きなの」

そして、ついに言った私の想い。

高校二年生の、片想い編。
第二部全十九話。今週金曜からスタート。

夏休みと訪問

二年に上がって、初めて迎える夏休み。

「なのはどうしてそんなに不満そうなの？」

みりに不思議そうに聞かれて百合は困った。何が嫌なのか、理由ははっきりしているがそれを言葉にしてはいけないのだ。

「馬鹿、百合ちゃんは淋しいんだよ！ 財津先生に会えないのが」

「あ、なるほど」

何も肯定していないはずなのに、それは既に公認され、納得された。

確かに、それはあるけど。
問題はそれじゃなくて…。

ちらりと教卓にいる彰を盗み見る。すると彼はその視線に気付いてウインクを投げてきた。

さむっ！

額を押さえて溜め息をついた。

「じゃあ、夏休みも遊ぼうね！」

「百合ちゃんもメールちょうだいよ！」

「うん、またね」

学校から出て、二人と別れる。終業式のため、まだ時間は昼前。明るいこの時間に帰るのは少しもつたいなくて、百合は一人喫茶店へと入って行った。

「ランチを」

「ランチを一つですね。少々お待ち下さい」

喫茶店であってもやはり昼時は混む。角の席で外の何気ない風景を眺めて、この前のことを思い出した。

「にしても、百合って結構可愛い性格してるんだね」

思いがけない言葉を言われて百合は目を丸くした。

首を傾げると幾分か意地悪な笑みを彰は浮かべて小声で言った。

「素直になると私って言うんだな」

「——っ！」

瞬時に顔を赤くした。

その顔が面白いのか彰は笑みを深める。

「あれは、ちが……その」

「そうだなあ、百合が俺と二人っきりの時ではその喋り方なら避けないであげるよ」

「えっ！　ちょ、無理」

「無理とは言わせない」

直すと言ってしまった以上、彼女には拒否権はない。
泣く泣く了承し、家に向かう。

大丈夫。もうすぐ夏休みだから会うことも少ないし。

その間に練習を……………。

「あ、これ持ってた」

「？」

家の前まで来た時彰はポケットから何かを取り出して百合に渡す。
街灯で照らされたそれは見るからに家の鍵。

「週に一度は俺の家に顔出してね」

「な、何で！」

「会いたいから」

「……………」

すっかり彰のペースに飲まれ、百合は仕方なくその鍵を握り締めた。

そうだよ！
行かなきゃじゃん！

「しかも初日は今日だし」

がつくりと肩を落として悩む。週に一度は彰の前で話さなければならぬ。

それはかなり緊張することで、失敗もできない。

「お待たせしました。ランチになります」

前に置かれたご飯をとりあえずは食べようとフォークを握る。

もうこの際どうにでもなれだ！

諦めが早かった。

ピンポン

合鍵を渡されたとしても勝手に入る訳にはいかない。一応インターフォンを押して待つ。

しかし、誰も出て来る気配はない。おそらくまだ学校から戻って

ないのだろう。

仕方なく鍵を取り出して恐る恐る中に入った。

一人暮らしのアパートにしては広く、おそらく2LDKもあるだろう。

入っていくと十帖ほどあるリビングに出た。

「思ったよりも片付いてる」

でも、これは。

見る限りそこまで汚くはない部屋だが、棚や部屋の隅には適当に小物が積み重なっている。

おそらく、彼なりの片付けなのだろう。

「……………」

勝手にやっても、怒んないよな…。

彼女は声を出して気合いを入れて、腕まくりをした。

夏休みと訪問（後書き）

第二部、ついに始まりました。やっと恋愛重視で行けます！

約束とお仕置

彰は今急いでいた。

飲み会の話を必死に断り、走って自分の家に向かう。

多分待ってるよな？

次第に見えてくる自分のアパートに目を凝らすとやはり電気がついていた。

来てくれていることに安心して少しだけ速さを緩める。

「考えてみれば、何でこいつの家に来なきゃいけないんだ？」

いや、あいつに教師と生徒の関係より上になりたいって言ったのは俺だけだ。

そんなことを悶々と考えて百合はソファに腰掛ける。瞬間、ある香りが広がる。時に、感じたあの香り。今は傍にいないある人と同じ。自分の部屋とは違う、安心するというより、逆に落ち着かないその香り。

百合は無意識に鼻をソファに押し付ける。

……抱き締められてるみたい。

がちや

「ごめん！ 遅れたね！」

突然戻ってきた彰に驚いて顔をソファから離す。悪いことはしていないが、知られると恥ずかしい。

気付かれていないかすごく不安だったが、彰はそんなことよりも他の異変に気付いて首を傾げた。

「ってあれ？」

リビングに入った途端足を止める。朝この部屋を出た時と明らかに部屋の状態が違うからだ。

「もしかして、片付けた？」

「うん。暇だったから」

よく見てみれば片付いてるだけではなく、テーブルに料理まで用意

されている。

「えっ！　もしかして…」

彰は他の部屋も見回る。どこも同じように綺麗にされていた。ベットのの上にはちよこんと今日の洗濯物が綺麗にたたまれていた。

「……ま、まさかたんだ？」

「当たり前じゃん」

「きゃあ！　えっちい！」

ふざける彰を容赦なく一発パンチを入れて黙らせた。倒れた彰を引きずり、リビングに戻る。

「合鍵を渡したってことはいつでも家に入ってどこにいてもいいってことだろ？　なら、ぐだぐだ言うな！」

椅子に座らせて百合は自分も向かいに座る。彰が帰る少し前にできた料理はかろうじてまだ温かい。

「食べよ？」

「あ、はい。いただきます」

あまり食材がなかったのに。

残っていた食材で作られたとは思えない美味しそうな料理に彰は口をつけた。時間が遅かったため、お腹は既に空の状態。そのため、この料理は本当に嬉しかった。

「うん、美味しいよ。何て言うか…平凡な味」

「黙って食え！」

顔を少し赤く染めて、百合は食べる。確かに工夫のない平凡な味付けだ。

「なあ、どうしてここに来なきゃいけないんだ？」

「だから、言ったでしょ？ 俺が会いたいからって」

「だけど、生徒が教師の家行ったら問題だろ」

もごもごと小さく呟く。彰は心配していることに微笑んで箸を置いた。

「だから百合は私服で来たんだ。偉い偉い」

「な、何か馬鹿してねえか？」

「してないよ。それにこういったことを望んだのは、百合でしょ？」

いつの間にか百合のすぐ横に歩いてきた彼に彼女は何も言い返せない。

「俺は……別に」

「はい、お仕置き」

反論しようとした彼女を抱き締めて、彰は耳に息を吹き掛ける。
案の定、彼女は甲高い悲鳴を上げて身をよじる。

「ちょ、な、」

「俺って言ったから罰ゲーム。あと言葉遣いも可愛くない」

「はあ？　ば…、や…」

耳以外にも脇腹をくすぐられ、百合はジタバタともがく。

力の限り彰を押し返すが、微動だにしない。

「はい、自分のことは？」

「わ、わたし！」

叫べばやっとな彰は彼女を解放した。もがいたせいか、百合の顔は真っ赤だ。

「ば、ばか！」

「約束やぶるからいけないんだよ。それとも俺が約束やぶっていいの？」

「だめ！」

間髪入れずに百合は言う。情けなく彰を見つめると彼は笑った。

「冗談だよ。可愛いなあ百合は」

「……………もう」

咄嗟に身体を後ろに寄せて彰から距離を取ろうとする百合。だけど、未だに彼は手だけは離さない。

どうして？

触れている場所が…熱い。

プールと偶然

友達ができた。

学校に通える。

そして、大切な人ができた。

「彰？」

ずっと見つめてくる彼の目を逸らさずに見つめる。何故か心臓が破裂しそうに大きく鳴って、呼吸を苦しくする。普通ならこんなに近くに来ることのない、彼。触れることもできない存在。だからなのか、それとも別の理由か、彼女は今、すごく緊張していた。

「……………ま、いや。今はまだ」

意味不明な台詞に百合は首を傾げる。

一体何がしたかったのか、彼女が知ることはなく時間が過ぎた。

「じゃ、また来週」

「同じ曜日でいいんだよね？」

「うん」

家まで送ってもらい、彼女は彰と別れる。

その瞬間どっと疲れを感じた。普通の疲れとは違い、極度の緊張からでる疲れだ。

顔……熱い。

彰に感じる感情が未だに理解できずに、彼女はそのまま眠りについた。

「百合ちゃん！」

「おそおい！しお！」

「おはよ、しおちゃん」

夏休み。

早速三人は遊びに出ていた。暑い日にはぴったりの屋外プール。水着持参で向かった。有料プールのため、広さも遊具も十二分にそろっている。

「よっしゃ！遊ぶぞお！」

「はりきりすぎ」

「なあによ、ノリ悪いなあ！みいは！」

百合は二人の会話を聞きながら笑う。

「とりあえず早く水着に着替えよ？」

「「そーだね」」

流石に家族連れや恋人同士、友達などでかなりの人が賑やかにしているが、それでもこのプールは大きい。

三人とも水着に着替えて一番ノーマルな所から入り始めた。

「きゃあ！冷たい！」

「百合ちゃんの水着可愛い！何処で買ったの？」

「えっと、去年の秋くらいに…デパートで安くなってたから」

照れる百合は淡いピンク色の水着を着こなしていた。元々色白の彼女はかなり違和感がなく、みりが可愛いと言うのも頷けるくらいだ。

「残念！その姿財津先生に見せれば悩殺だったのに」

「ああ、イケるねえ」

未だにそのネタで茶化す二人にうんざりするどころか、百合は顔を赤くして否定した。

「だ、だから違うって」

「またまたあ、顔が赤いよ？」

にまにまと紫央里は更に問い詰める。

「もう、は、早く泳ぐよ！」

慌てながら百合はプールに潜る。そのまま勢いに任せて突き進んだ。プロポーションのよい女性の身体が横を通り過ぎる。それを横目で無意識に追った。

いいなあ、あの胸。

変態臭い考えを持った瞬間、人にぶつかった。

「っ、はあ、ごめんなさい！」

「いえ、こちらこそ」

水の中から顔を出して謝ると、相手も一緒に頭を下げた。
そして、互いの見覚えのある顔に硬直する。

「「……………」」

愛想笑いのまま見つめ合う二人。
それをやっと追いついたみりと紫央里が見つけた。

「あれ？財津先生！」

「あー！他の先生もいる！」

そう、ぶつかった相手は彰だった。

な、何でこんな所にいるのお！

「教師の親睦会？」

「それでプールなの？珍しいね」

事情を説明されて二人は突っ込む。

「まあ、でも若手だけの親睦会だからな」

「青木先生が言う？それえ」

「あはは！」

確かにここにいる先生は全て二十代の教師だ。

体育教師の青木先生や国語教師の栗田先生、美術教師の福井先生、そして数学教師の財津先生。

「お前等は三人だけか？」

「うん、そうだよ」

「そうですよ、でしょう？」

「あはは、すみません」

賑やかな会話を百合は遠目に眺める。同じように彰もあまり話には入っていなかった。

「じゃあ、先生」

「また会うかもだけど」

やっと話は終わり、互いに擦れ違う。
結局二人は何も話すことはなく、別れた。

不安と照れ

流れのあるプールの方に移動すると二人は同時に百合の両腕を引っ張った。

危うく足を滑らしそうになったが、上手く態勢を保つ。

「どうして財津先生と話さなかったのよ？」

「そうだよ！ もったいないじゃん！」

すぐく真剣な表情に百合は瞬きを繰り返す。

次第に込み上げるものは堪えきれず、顔を崩していった。

「……………っ、ふ、ふ」

「ちょっと」

「何で笑ってるの！」

声を殺しながら笑う百合。もちろん、これには二人共無表情で怒りを表す。

百合はしばらく話すこともできずにただ笑う。

「だ、だって……………。二人の顔、面白い」

「あー！ 人がせっかく心配してるのに！」

「それはひどいでしょ！」

必死に謝りながらも未だに笑いが止まらない。

「ごめん、ありがとう」

彼女のすっきりした笑顔に二人は何も言えなくなった。

話したかった。

それは本当だけど。

不安になる気持ちは尽きなくて、何も言えなかった。
だけど、心配してくれる人がいる。だから、不安は和らぐ。

「大丈夫、また話す機会あるしょ」

「そうだね！ とりあえず遊ぼう！」

三人は気を取り直して遊びに出た。

「波のプールだ！」

「よし、行くぞ！」

とにかく二人は同じテンションで走り出す。体育会系でもあるのだろうか、身体をよく動かしていた。

「ごめん、ちょっと休んでから行くよ」

「「うん」」

百合は脇に設置されている椅子に腰を掛ける。
遠くで二人がはしゃいでいる様を微笑しながら見つめる。

「ねえ、財津先生！ 波のプールですよ！ 行きましょ！」

「い、いえ。僕はここで休んでから行くんで先に行行って下さい」

微かに聞こえたその声に思わず反応する。
けれど、顔は向けずに耳だけに神経を集中させた。

「じゃあ、後で来て下さいね」

明らかに甘い声に百合は口を引きつらせた。

おそらく栗田先生は彰を狙っているのだろう。

見え見え。

そう思った瞬間、脇からあのナイスバディが通り、他の先生方も百合には気付かず歩いて言った。

苦い表情でそれを見つめていると隣りに誰か座った。

「不細工だぞ、それ」

「！」

隣りから発せられた声は明らかに彰のもので、にまにまと笑いながら彼女を見ていた。

「な、何よ？」

「別に。ただ話がしたかっただけ」

純粹で直球過ぎる言葉に百合は顔を赤くした。最近わかったことだが、どうやら彼は正直者らしい。それが逆に居たたまれなくて、百合は彼に振り回されてばかりだった。

「別に私は：話したいわけじゃないし」

ふいと視線を外す。その反応が面白くなかったのか、彰は百合との距離をわざと縮める。

「ち、近い！」

「何怒ってるの？」

言葉など無視で更に彼は百合に近付く。百合の視界には友達と先生達が見える。と、いうことはあちら側もここは容易に見える位置なのだ。

こんな所を見られたらと考えると、百合は焦って叫ぶ。

「や、離れて」

「言ってくれなきゃ離れない」

じっと瞬きもしないで見つめられ、百合の体温は更に上昇する。こんな状況なのに心の奥底では嬉しがっている自分がいた。先ほど話

せなかったのも関係しているが、百合は次第に自分の気持ちを把握しつつある。

「そ、そういうことは栗田先生とやって！」

必死になって出した言葉はそれで、これでは本心を言ったのと同じだ。しまったと思った時にはもう遅く、彰は身を引いて、抑揚ない声で言った。

「ふーん、栗田先生に迫っていいの？」

「ダメに決まってるんだろ！」

「なら、最初からそう言おうね」

結局最後はハメられて、百合は苦い表情を再び作る。
にこにこことご機嫌な彼に百合はムツとしてその顔をつねった。

「いててて」

「天罰！」

怒って立ち上がり、彼女は皆がいる方に歩き出した。早くこの場から離れたかったのだ。近くで話をしたいと思ったにも関わらず、いざ

その場面になると、不安と照れで思うように顔が見れない。

「その水着似合ってるよ」

百合をわざわざ追い越していく彰。その擦れ違い様に呟かれた。その背中を思わず見つめながらゆっくりと速度を落として二人の所に歩いた。百合の姿に気付いた二人はすぐ驚いたように彼女の顔を覗いた。

「百合ちゃん？」

「顔赤いよ？」

いつも、狂わされる。

不安と照れ（後書き）

えっと、完全にギャグが姿を消していますね（笑）

すみません。とうぶんこんな調子で、もう一度復活するときはあります。すぐにまた姿を消してしまいます。いきなりギャグは照れ屋に変身してしまったのです。

なあってね。

ゲームと夏祭り

百合は悩んでいた。

彼女が今いるのは彰の家の前。中は既に明かりがついてあるのだが、だからこそ彼女は悩んでいた。

この前はいなかったから入れたけど。

中にいるとわかると躊躇してしまう。

インターフォンを押すか押さないかで止まって百合は扉を睨んでいた。

いざ！

押そうとした瞬間、扉が突然開き、角が見事額にぶつかる。

「わー！ 大丈夫？」

「大丈夫なわけねーだろ！ こんちくしょう！」

入るのを迷っていた自分が恥ずかしくなり、親父も既に言わない言葉をごまかしとして吐き捨てて百合は上がった。

「何してたの？あんなところで」

「べべべべ、別に」

時刻は夕方の五時。夏だからまだ昼のように明るい。

けれど、日当たりの問題からか、室内は少し暗く、照明がついていた。

「ねえ、百合」

「何だよ？」

「ゲームしよう！」

突然に提案され、更に文句を言う前にテレビの前に座らせられ、コントローラーを握らされた。

「な、何勝手に！ しかもWiiだし！ ハンドルだし！」

「さあ、やるよ！ マリオカート！」

「マリオかよっ！」

何だかんだと流れでゲームをすることになり、あまりゲームなどし

たことない百合は意外な面白さにいつの間にか真剣に勝負し始める。

「あー！」

「やめっ！」

「ほわあー！」

かなりうるさい。

そして…。

「わあい！ 三戦三勝」

「くそ、手加減しろよ」

やはり持ち主には勝てないのか、彰に全敗し地味にショックを受けている百合に思わずクスクスと笑った。

「じゃあ、百合。来週の夏祭り、一緒に行こうね！」

「わかったよ……………」

投げやりに返事をして、百合は溜め息をついた。
しばらくの間、その後。

「はぁ?! な、何いきなり言ってんだよ!」

「だって百合負けたでしょ?」

「でしょ?」じゃねえ! そんな賭けした覚えはない! 大体教師と生徒が二人で行ける行事じゃないだろ!」

可愛らしく言われた無茶な相談にノリで可愛らしくを真似して突っ込みを入れ、最後は叫んでいた。

「だあいじょうぶ! 百合が変装すれば!」

「はぁぁぁ?」

そして月日は流れて。

「なぁ、本当に行くのか?」

「違うでしょ? 言葉遣いが!」

「…………、本当に行くの?」

「はい、行きますよ」

軽く答える彼に少しだけ殺意が芽生えたことは、仕方ないことだろう。

「でも、ばれ」

「ばらせないよ」

彼女の言葉を遮って彰は微笑む。それがとても意地悪く、企んだ表情だったから、百合は何も言えなかった。

「じゃあ、行こうか」

「え、でもまだ祭りの時間じゃ……………」

彰に連れてかれて百合は共にその場を後にした。

「百合ちゃん来れなくて残念だよね」

「うん、まあ仕方ないよ。それより、早く行こう!」

みりと紫央里は二人で浴衣を着て祭りに向かう。

既にその場所は警備が入り、車の通行を止めていた。暗い夜の中、そこだけ異様に明るく祭り独特の臭いと賑やかさを醸し出していた。

「うわあ、本当賑やか! さあ、楽しもう!」

「しお、あんまり飛ばし過ぎないでね」

いつも紫央里の制止役はみりで、時には二人共にはっちゃける。それこそが高校生。

「いいじゃん、こんな時くらい」

「あ」

「あ?」

みりのすっ頓狂な声に紫央里も振り返る。その視線の先には見覚えのある人物。

「財津先生!」

「こんにちは！」

知り合いがいたら話し掛ける。それが祭りの常識のように躊躇うことなく二人は彼に駆け寄った。

「あ、こんにちは」

「あれ、その人は？」

隣りには黒髪の浴衣美人。落ち着いた表情に大人の空気を漂わせている。見覚えのない彼女に二人は首を傾げた。
祭、浴衣、男女一組。この組み合わせで想像することは一つしか考えられない。

「ああ、ちょっとした友達ですよ」

「今晚は、二人共可愛いね」

につこりと綺麗な笑顔に思わず二人は顔を赤くした。

「じゃあ、またね」

「「は、はい」」

人込みの中に消えていく様子を茫然と見つめて、みりと紫央里は小さく呟いた。

「ヤバイよ…百合ちゃん」

「強敵だ」

花火と疑問

焦った

百合は冷や汗をばれないように拭い、呼吸を落ち着かせる。未だに治まらない動悸に眩暈がしてくる。

「ほら、言ったでしょ？」

「うへ！」

「ばれないって」

自信満々の彰に百合は何とも言えない表情をする。

先程みりと紫央里が見た浴衣美人は、そう正真正銘百合本人。

「~~~~でも！」

声を上げる彼女を視線で制止する。隠し続けるにはどんな時でも百合の面影を出してはいけないのだ。

俺、何でこんなことしてんだろ。

ばれないように小さく溜め息をついて、百合は下を向く。

「…………別に無理して来なくてもよかったんだよ」

「へ？」

そんな彼女を見兼ねて彰は言う。夏祭りを一緒に行く提案したのは彼のわがままで、彼女が応える義理は本当はない。

「そんなことしたら、彰はまた離れるだろ？」

だけど、彼女はちゃんと気付いている。自ら彼から離れれば、自分に関わることはしなくなることに。

特別を要求した彼女が、特別な行動を拒む訳にはいかないこと。

「よく、わかってる」

「当たり前。ほら、早く」

人込みの中彼女は話題を変えたくて彰を引っ張る。けれど、上手く進めず、逆に人の流れに押された。

「こっち」

彼女の肩を自分の方へ寄せて彰は店とは違う方へ歩き出した。近過ぎるその体制に今度は違う意味で心臓が早鐘を打つ。次第に人が消えて、明りも少くなる。

「いいものが見えるよ」

につこりと自分よりも子供らしい笑みを向ける彼に百合はつられて笑う。

川原の方へ行くと見なくなった人影がまた増える。土手に座り込むカップルを不思議そうに見ているとぼそりと耳打ちをした。

「今まで百合は夏祭りというものに縁がなさそうだから」

「わ、悪かったな！　だけど、私だって——」

言い返そうと口を開いた瞬間、空が明るくなる。刹那、周囲から歓喜の声が上がり、賑やかに。
赤、緑、青、黄…色とりどりの光とずれて聞こえる音。幻想的な空模様。百合は目をみはった。

「花火……」

「久しぶりでしょ？」

「うん」

火で起きる奇跡に見取れながら、百合は目を細めて考える。

昔は……見てたのに。

肩を震わせる彼女に彰は苦笑して頭を撫でてやる。

「百合はもっとわがままに生きるべきだよ」

静かに呟いた彼の言葉が頭に響いた。

でも、彰？

私は、最大のわがままを彰に言ったんだよ…。

透明な麦茶を見つめながら百合は悩む。氷が入っていたはずのそれは今はもう無くなり、冷たくもない。

「聞ってる？　百合ちゃん！」

「へ?!」

「だからあーライバル登場だよ！　浴衣美人！」

ぎゃーぎゃー彼女の目の前で騒ぐみりと紫央里の言葉に思わず苦笑する。百合のライバルは百合。そんな話をされたら誰だってそうなるだろう。

しかし、そんなことを知る由もない二人はかなり焦っていた。

「あれ、あいつの従兄弟らし………」

「従兄弟でも結婚できるんだよ！」

「安心してちゃ駄目だって！」

そう啖呵を切りながら目の前にあるお菓子を口に頬張る。勢いに押されて百合は何も言えない。

「百合ちゃんも先生の家を押し入るくらいしないと見込みないよ！」

ごめん、もうしてる。

「そうそう！ 料理を作ってあげるとか！」

それでした。

「更に一緒にゲーム」

経験済み。

「「まあ、そこまで言ったら恋人同然だけどね」」

同じタイミングで笑い出す二人につられて笑う。しかし、言葉の意味をすぐに理解して硬直。

あれ？

そういえば、彰との関係って………何？

今更ながらの疑問が浮かぶ。

お菓子とプレゼント

八月上旬。いつものように彼女は彰の元へ。毎週何をすべきか悩むところだが、ゲームや映画など毎回彰が何かしらのものを用意している。

「今日は宿題でもしようか？」

「へ？ 宿題なんてとっくに終わったけど」

彰の言葉に彼女は目を点にした。不良、と言っても一年の時はかなり真面目の方に入る彼女は宿題などではできるうちに終わらせてしまっていた。

だが、そんな予想をしていなかった彰は同じく目を点にする。

「え！ 本当？ じゃあ、どうしようかあ…」

「じゃあ、一緒に料理しない？」

百合は大きな袋を掲げて彰に見せる。中には小麦粉やバター等の材料とお菓子の道具がいくつか入っていた。

わざわざここまでそれを持って来たことに感心する。もちろん、彰は異論等なく、すぐに了承した。

「何を作るの？」

「シュークリーム」

牛乳、生クリーム、バター、小麦粉…、様々な材料を並べて百合は明るく言った。本もなしに慣れた手つきで材料を量る様子から、おそらく何度もこれは作ってきたのだろう。

もしかして、百合のストレス発散って料理だったのかな？

いつもより顔を輝かせる彼女にふと思った。

毎日不良に絡まれながらも学校に登校することは、やはりストレスとなって溜まっていたはず。それを料理という趣味で何とかしていたのだと、読んだのだ。

彰は百合に言われ通りの手順で一緒にシューを作っていく。

オーブンに生地を入れてセットすると今度はクリーム作り。そんなこんなで片付けを入れたらかなりの時間がたった。

「ふう、もう二時半か」

「そろそろシューが焼けるから丁度三時過ぎに食べれるかもな」

につこりと笑う。その姿がとても微笑ましくて、彰は知らぬうちに口元を緩めてしまう。

シューにクリームを入れて、しばらく冷やしている間、百合はケト

ルでお湯を沸かす。

ポットに買っておいれた茶葉をいれ、沸いてから一分ほど置いたお湯を注ぐ。三分間蒸らしてカップに注ぐとテーブルに置いた。やっていることが妙に本格的で少しだけ堅苦しさを感じたが、優しく香る紅茶の香りがそれを和らげる。

冷蔵庫から冷えたシュークリームを取り出し三時半にやっと椅子に落ち着いた。

「できたね!」

「うん、上手く膨らんだ!」

ふっくらとしたシュークリームはとても美味しそうで彰は感嘆した。ここまで膨らむことは珍しい。そう百合が言うほど今回のシュークリームは上出来だった。

「じゃあ、さっそくいただくか。紅茶も冷めちゃうし」

「うん」

二人は甘く、やわらかいお菓子に感動しながらじつくりとその時を味わった。

「じゃあ、また来週」

「うん、あ……来週は俺の誕生日なんだ。ついでに祝ってよ」

「え!？」

初めて聞く新事実には百合は驚きを隠せない。彰は普通の態度で更に話を続ける。

「プレゼントとかはいいから、一緒にその日を過ごしてくれるだけで」

「……………と言ってもなあ」

「ん？ 何が？」

別の日、百合はまたみりと紫央里の三人で遊んでいた。今回は自宅にご招待。あらかじめ作っておいたケーキを二人に出して他愛ない話をしていた。

「あのさ、男の人に何あげれば喜ぶ？」

「あ、もしかして財津先生？」

凶星を指されて内心焦るが、顔には出さない。すると、今度はみりが口を開いた。

「うーん、無難なところならハンカチとか手帳とかだけど、もし親しい人なら百合ちゃんならケーキを作ってあげるの？」

「あ、それいい！」

ケーキを頬張って美味しいもんと力説する紫央里。誕生日というイベントにはぴったりだし、あまりお金もかからないことから、あっさりと二人の意見を受け入れることにした。

誕生日とパズル

「よし、完成……………」

生クリームで汚れた手を咄嗟に拭い、百合は微笑む。夏なのでクリームが柔らかくなってしまわないようにすぐに冷蔵庫へ移す。余った生地で作ったまた違う小さなケーキも一緒に入れた。

「よかった、上手くできて…」

一息ついて彼女は洗い物を片付けた。

彰の誕生日の前日。彼女はお祝いの準備に午前を費やし、午後はまたみり達と街へと遊びへ出掛けた。

「ねえ、こういう服は？」

「え、ヒラヒラ過ぎない？」

流石に遊びのネタに尽きたためか、百合がよく着ている服がジーンズばかりなのに気付いた二人は、スカートもコーディネートしてあげると無理やりに試着させていた。

乗る気じゃない百合にいいからと服を押し付ける。渋々彼女はそれを受け取る。

「ど、どう？」

「うん、すごい可愛いよ！」

「きゃー！ 似合う百合ちゃん！」

急にテンションが上がる二人に百合は少しだけ自信を持った。
今着たのは淡いピンクのワンピース。ノースリーブのその上にレースの上着を羽織っている。
色がもともと白い彼女にはかなり似合っている。

「これで財津先生を悩殺だ！」

「うんうん！」

そんな二人の勢いに押されて彼女はその服を購入することにした。
何軒も回り、様々な服を見たため、歩き疲れた三人は流れるままカフェに行く。

「はあ、疲れたねー」

「うん！ でもやっぱり街は物多いよね」

他愛ない話をして、気持ちを落ち着かせる。ふと百合は自分が持つ

て来ていたケーキを二人に出す。

「わぁ、ありがとう」

「本当百合ちゃんってお菓子上手いよね！」

美味しそうに食べる二人に百合は微笑んで見つめる。いつも一人で作り、一人で食べるしかなかったものが、他人に喜んで食べてもらっている。それは本当に嬉しいことだった。

そんな時、ふと紫央里はこんなことを呟いた。

「もし、本当に百合ちゃんが財津先生と付き合ったらどうなるんだろうね」

「え？」

「あー、ちょっと大変だろうね。生徒と先生が二人だけで休日仲良さそうにしているだけでも、危ないんじゃない」

本当にはならない、そういうことを前提とした二人の会話。けれど、二人は付き合っているわけではないが、生徒と教師の関係ではなく、他の人とは違う関係であることは事実で、その会話が百合に重くのしかかる。

「特に財津先生だね。生徒に手を出すなんて…最悪学校辞めさせ

られるかな？」

「あー、あるかも」

この言葉は更に彼女をどん底へと突き落とす。

一緒に…いるだけで？

家に帰った百合は部屋に入った瞬間、その場に座り込んだ。窓から入るのは紅い光。それは彼女の白い肌を紅く染める。焦点を何処にも合わせることもなく、百合は瞳を揺らした。

「考えても、みなかった」

そうだよな、先生が生徒と特別な関係を持つちゃいけないよな……。

百合は静かに沈んでいく夕日に目を向けて、ただ座っている。

「明日……聞かなきゃ」

せめて、これだけは…知りたいから。

一つだけあることを決意して彼女は立ち上がった。

そして翌日。約束の時間に百合は彰の家へ訪れた。

「上がって」

「うん」

ケーキを片手に百合は彰の家へ上がる。中はあらかじめ冷房を入れておいたのか、ひんやりと涼しかった。ふと、彰は何か違和感を感じて口に出す。

「百合が珍しくスカートだ」

「……………っ！」

そう、今日は二人が選んでくれたあのワンピースを着ていた。まさか、反応してくれるとは思わなくて思わず顔を赤らめる。こういった服を着て、誰かに褒めてもらうなどという経験等なかったので、どう答えていいかわからない。

「へえ、似合うじゃん！」

「そ、そんなことより今日は何する？」

慌てて話題を変えて、冷蔵庫を勝手に開けてケーキを突っ込む。見え見えの反応に喉の奥で笑いながら、彰はB4くらいの箱を奥から持ってきた。

「そうだなあ、じゃあ、パズルでもやろうか」

「じ、地味な趣味だな……」

床の上に大きな厚い布を敷いて、1000ピースのパズルを一気に広げる。足元に転がってきたピースを拾いながら、百合もその場所に座った。

「ちよ、これ今日で終わるのか？」

「さあ？」

不安に思いながらも二人は色分けからやり始めた。

ピースと関係

色を見て、形を見て、一つ一つ繋ぎ合わせていく。

地道な作業。

地味な時間。

ふとそれをやりながら百合は思った。

人生も同じなのかな？

一つ一つ、自分にあった道を探して、探して、探して。少しずつ合わせていく。

本当、地道だなあ。

「百合？ それ、そこにはまんない？」

「え！ あ、本当だ」

言われた場所に綺麗にはまるピース。少しだけ満たされる欲望。

「半分くらいできたね！ 流石に疲れたや」

「あ、ケーキ……食べるか？」

持って来たものをずっと冷蔵庫に入れたままのことを思い出して百合は立ち上がる。
出されたのは少し甘さを控えたレアチーズケーキ。綺麗に形取られたそれに彰は感動する。

「作ったの？」

「うん」

紅茶を用意しながら百合は照れ臭そうに頷いた。
その姿に隠れて笑んで、彼女の肩に手を延ばす。しかし、触れる寸前のところで抑える。

「ありがとう。嬉しいよ」

「あんなこと言われたら用意しない訳にはいかないだろ！」

不細工な顔で紅茶を入れてケーキを切り分ける。綺麗に六等分にしておいて、それを小皿に移した。

「誕生日、おめでとう」

「ありがとう」

しっかりと冷やしたケーキは口の中で味が広がって、程よい甘味を与える。下のピスケットのサクツとした歯ごたえとマッチしてとても美味しい。

これを普通に作れるのだからかなり菓子作りに長けているのだろう。

「美味しいよ、本当お菓子は得意だなあ」

「何か、言い方むかつかない。残り全部食べていいからな」

「…………あー、もう一切れ百合が食べてよ」

ワンホールはとても食べれない。それは百合も理解しているため、仕方なくもう一切れ皿に移した。

彰はまだ残るケーキにラップを掛けて冷蔵庫に戻した。

「じゃあ、一気にやるか！」

「うん、終わらせなきゃ」

途中だったバズルに向き合い、また睨めっこが始まった。

そして、二時間後。

「できたあ」

「よっし！」

互いに達成感と感動で身を震わせた。1000ピースのパズルは綺麗に箱と同じ風景を描いている。色鮮やかな色彩が醸し出す暖かな情景に百合は感嘆した。

「じゃあ、これ早速飾っとくよ」

「うん」

奥の部屋から額を取り出してパズルをはめる。そして、光が当たる北側の壁の真ん中に上手い具合に飾られた。

「本当に今日中に終わるもんだね」

「まあ、一日やってればね」

この言葉には苦笑。
気付けば時刻は既に六時。時間の早さに目をみはる。

「……………なあ」

「ん？」

外のまだ明るい空を眺めながら百合は小さく呟いた。彰はコップにアイスコーヒーを注いでいる。

「一つだけ聞いていい？」

「何？」

軽く目を細める。彰が近付いても顔を向けることはない。差し出されたコップをあえて無視して口を開いた。

「私と彰の関係って……………何？」

普通の生徒と教師の関係を拒んだ。

だから、こうして百合はこの部屋にいる。
だから、本当の関係が分からない。

「教師と生徒じゃなくて、何？」

「……………」

突然の問いに言葉を失う。軽く伏せられた彼女の顔をじっと見つめながら、彰は自分でも血の気が引いていくのがわかった。

「えっと……………」

「……………わかんないよな。いや、もう。気にしないで」

にっこりと百合は微笑んで彰の方を向いた。そしてコーヒーマシンはもろ
わずに玄關に向かう。

彰は慌ててその後を追った。

「あのね、もう戻っていいよ」

靴を履いて、振り返った彼女はとても儂げな表情をしてきっぱりと
その言葉を紡いだ。

「もう、特別じゃなくていい。教師と生徒に戻っていいよ」

苦悶と答え

最後の彰の表情が、忘れられない。

暑い、暑い夏の日。あれから百合は彰に会っていない。

今日はみりと紫央里の三人で無意味に海に来ていた。別に泳ぐわけではないので、全員私服だ。

快晴の空。青い海。一面が青に彩られたこの風景に二人ははしゃぐ。

「やっぱり夏は海だね！」

「まあ、あまり意味ないけど……」

裸足で海に入る二人の姿を百合は眺めていた。潮風が彼女の髪を揺らす。

日差しの下にいるせいか、だるさが増して、あまり気分はよくなかった。

「やっぱり海っていいーねー！」

「しお！ そっち、岩が多いから危ない！」

言われて足元を見るとそこには貝殻がびっしりついた岩があった。青い顔をしてすぐさま後退りする。あんなのに足をひっかけたらお

そらく肉はぱっくりと切られてしまっただろう。その姿を想像したのか、紫央里は顔を青くした。

「やっぱり海は危険だ！」

「はあ………」

どんなに騒いでも、百合は黙って二人を見守っていた。何も、やる気にならない。ただ、目を細めて遠くを見るように眺める。

「百合ちゃん！ 冷たくて気持ちいいよ！」

「一緒に入らない？」

気を遣われている、そう思った百合は慌てて表情を作った。その行動もすごく疲れたが、ここで二人に心配されるのは嫌だった。迷惑を掛けたくはなかった。

「ううん、二人で遊んでて！」

「そう？ 気持ちいいのに………って、きゃあ！」

いきなりきた高い波が紫央里の足で跳ねて、彼女の服が濡れる。しよっぱい水が顔に掛かり、不細工な顔を作った。

「うへえー」

「あーあ、やつちゃった!」

思わず二人は元気よく笑う。それにつられて百合も笑った。必死に、気付かれないように。けれど、その顔も、声も、やはり心が籠もっていない分不完全で。

「百合ちゃん、どうしたの?」

みりにばれて、百合は笑顔を無くした。実際、何がいけないのか、彼女にはわからなかった。一体何がしたいいのか、わからなかった。

どうして、こんなに気持ち悪いんだろう? 教師と生徒に戻ったからって、彰が私を理解してくれることは変わらないのに……。私を気にかけてくれるのは変わらないのに。

「百合ちゃん?」

顔を覗き込む紫央里に百合は抱き付いた。少し服がべたついていた

が、気にしない。予想外の展開に二人は顔を見合わせる。
いつも百合は必要以上に二人には抱きついたりしない。逆ならある
が、百合からは決してなかった。

「百合ちゃん？」

「かな、しいの？」

かなしい？
なんで？

百合は咄嗟に首を振って、否定する。
二人は思わず顔を見合わせて、百合が何か話してくれるのを待った。

「わからない。でも、何か…」

「苦しいの？」

くるしい…？
どうして？

だって、特別じゃなくなっただけ。ただ、元に戻っただけ。
あの時に。
あの瞬間に。
それだけなのに。

『憧れなんです』

あの言葉が、頭から離れない。

あの顔が、頭から離れない。

何故だろう。私の気持ちのピースが、彰の所ではまる気がする。色も、形も、全部そこに合っている気がする。

「私………淋しいのかな？」

「…………百合ちゃん」

声が震えている百合に心が揺れる。二人は彼女をきつく抱き締めた。優しい温もりが百合を包んでいく。

あったかい。

ぽた、と砂浜に水が滴る。それはいくつもの後をつけて、消えて行

く。

ばやけた視界でそれを見つめながら百合は更に後をつけていく。
一つ、二つと。

やっと、わかった。

哀しいのも、

苦しいのも、

淋しいのも、

「私………やっぱり先生のこと、好きなんだ」

いつの間にか自分の中で特別になっていた。

だから、特別なあの関係が大事だった。

「百合ちゃん………。大丈夫、私達がいるよ」

「絶対、一人にはしないから」

ギュッと力強く百合を抱く二人に微笑んで、彼女は思う。
自分に友達ができたのも彰のお陰なんだと。

新学期と文化祭

そして、夏は過ぎて。
始業式。

「おはよー百合ちゃん」

「おはよーみいちゃん」

いつものように二人は早めに学校に着く。休みボケからか、みりは百合の横で眠たそうに欠伸を繰り返した。

「寝不足？」

「うん、余ってた宿題一気にやったから。やっぱり百合ちゃんみたいに早めに終わらせるべきだなあ」

溜め息一つ。そんな彼女を微笑して見つめながらも、けれど百合は今他のことで頭がいっぱいだった。

二週間ぶりに会う……。
どうすればいいんだ？

こういったことの経験がない百合は、どう対応していいのか、わからない。しかも、彰とはあんな別れ方をしたのだ、平気な訳がない。思わず小さく溜め息をつく。

そのまま時間は無情に過ぎて行き、始業式が終わり、大掃除が始まる。こういった時に限って担任が仕切る教室の掃除になる百合。

「ほら、時条さん！ 手が止まっていますよ！」

当たり前だが、彰はいつも通りだ。自分だけ意識していることが馬鹿らしくなった百合も次第にどうでもよくなっていく。

「時条さん！ 男子が逃げました！」

「てめーで追い掛ける！ 馬鹿教師！」

「ああ！ ここに紙くずが！」

「そう思ったら手で拾えよっ！」

こうして他生徒に笑われながら二人のコントが繰り出される。こうしてやっている間に無事(?)に一日は過ぎて、百合は家に帰った。

「先生さようならー」

「さようなら」

まだ日が高いうちに生徒は消えて行く。誰もいない廊下で彰は壁に体重を預けた。今日一日を思い浮かべて、自嘲する。

「戻る……よな」

その呟きは確信というよりも、願い事のような微かなものだった。

「そうだなあ、百合ちゃんみたいのは先生の前だけ女の子になるとか？」

「あ、“私”とか“でしょ”とか使って？」

「そうそう！」

お昼と一緒にしているみりと紫央里は真剣に百合のアプローチ方法を考えていた。実際、離れたのは彼女の意味なのでここまで本気に考えてもらうと心苦しい。

「あの、別にそこまでしなくてもいいよ？ 私……先生を困らせ

たくないし」

次第に小さくなる声音に二人は黙る。何故かその顔は驚きのものだった。

「ゆ、百合ちゃんが……………」

「私って……………」

その驚きように百合は苦笑した。

「考えてみればあの海の時も私って言ってたよ！」

「あー！ そうだ！」

新発見して二人はかなり嬉しそうだ。

確かに彰意外の前では俺を心掛けていた彼女。二年に上がってから彰以外にこの言葉を言ったのはあの時が初めてだった。

「にしても大人だなあ、迷惑かけたくないなんて」

感心して紫央里は呟く。けれど、みりは少し浮かない顔で呟いた。

「でも、恋はわがままになった方がいいと思うよ?」

心配しているのか、すごく強く念を押される。百合はしかし、俯いて首を振る。

わがままなら、言った。

だけど、それは彰が優しいから。

だから…。

「百合ちゃん」

辛そうな表情をする百合を二人は見てることしかできなかった。彼女が何も言わないことには、二人には何かを言う資格はない。ただ、見守ることしかできないのだ。

それから二週間があつという間に過ぎて、時期は文化祭ムードへ突入した。

「じゃあ、意見を出して下さい！」

「あ、ちなみに僕が出れるものなら大歓迎！」

冗談混じりに彰が言う。生徒は軽く笑ってそれを流す。次々と上がる出し物。

喫茶店、屋台物、お化け屋敷…、平凡で普通の考え。

「うーん、イマイチだなあ」

「他に意見はないですか？」

一向に誰も手を上げない。

……、文化祭、出し物、彰が…出れるもの、非凡なもの……。

あまりこういったものの知識はない彼女だが、百合なりに悩んで、考えを膨らませていく。ふと、百合が何かを考えて手をあげる。それに気付いた委員長はすぐさま指名した。

「時条さん」

「できるかはわからないけど、カラオケ喫茶ってのはどうかな？」

聞き慣れないその出し物に、何となく生徒は決定してしまった。

新学期と文化祭（後書き）

ものすごく時期があつた投稿になりました。この際だからこれからも時期を合わせて投稿してみようかな？つと、検討中です。文化祭です。その行事が過ぎる頃が第二部終了になります。

準備とだっこ

時は過ぎて、十月。準備は次第に本格的になっていく。企画や、用意する物などをクラスごと徐々に固めていき、活気付いていく。

「文化祭かぁ」

「楽しみだね！」

二人で準備しながら会話をする。百合は提案者として店の様子を紙に書いていた。シャープペンの動きをふと止めて、百合は思う。

「何か、思い出ないんだよねー」

さらりと淋しい発言。結局彼女が道を外れてしまったのは家庭環境もそうだが、友達がいなかったことも大きな原因だろう。

「だ、大丈夫だよ！ 今年はおが百合ちゃん一人にさせないから！」

「ありがとう」

こういったちょっとした言葉がとても落ち着く。そう、百合は思っ

た。

普通授業の合間にちよこちよこと書き足していただけたので、休み時間だけでは思うように進まない。

百合はみりを先に帰して居残りをすることにした。

「体育館、よく取れたなあ…」

カラオケを流石に教室で行うわけにはいかず、体育館を取った。一番競争率が高いはずのその場所をよく取れたな、と感心する。

「……………本当、生徒思い」

笑って、シャープペンを置く。書きかけの紙を放って置いて彼女は窓の方へ歩いた。

まだ夕陽が顔を覗いている。じわりとくる暑さに息苦しさを感じながら、彼女は息をついた。

すっかり遅くなって陽が沈んでから彼女は教室を出た。

「結構涼しくなったなあ…」

まだ暑さは残るもののまとわりつくほどのものではない。秋に近付いている証拠で、何故かそれが彼女には淋しかった。

「ゆ、時条さん。まだいたんですか？」

聞き覚えのある声に肩を震わせた。振り返るとそこには案の定彰がいる。

「…………ちよつと、文化祭の店を考えてたから」

「ああ、あまり根を詰め過ぎないようにね」

爽やかに笑う彰の顔に息が詰まった。これは、今まで彼女に向けてきた特別のものではない。誰にでも向ける、上辺の笑顔。込み上げてきたものを必死に抑えて、百合は必死に笑う。

「はい——っ、」

けれど、それは脆くて、百合は泣き出す直前で走り出した。

馬鹿！

ばかつ！

これじゃあ、困らせてることに変わらない！

一気に人気のない道まで走るとやっと足を止めて顔を上げる。頬に伝う涙は止まらなくて、そのまま首まで伝う。

「最低…」

想いが枷となって彼女を襲う。

季節は秋に近付き、次第にあの背中にジリジリ来る暑さは無くなった。準備は進み、店のレイアウトも必要な道具、材料のリスト、設備等が次々に揃って行く。

「百合ちゃん、顔色悪いよ」

「え？ あ、大丈夫。ちょっと眠いだけ」

今日も放課後残って準備が進められている。バイトも塾もない百合は毎日居残りをして中心となり用意を手伝っている。

「あ、みいちゃん、この布そっちにまとめといて」

「テーブルクロスだね！ わかった」

百合から布を受け取ってみりは材料等が置かれている場所にまとめ置いておく。

慌てて戻ろうと身体を切り返した瞬間だった。

「百合ちゃん！」

彼女の目の前で百合が倒れたのだ。

その場にいる全員が彼女の周りに集まる。

「百合ちゃん！ どうしよう！」

「誰か運んで」

「え、でも一人じゃ……」

どうしていいかわからず、ただ騒ぐだけ。その時タイミングよく体育館の扉が開いた。

「準備進んでますかあ？」

「あ、財津先生！ 百合ちゃんが！」

みりが叫ぶと同時に彰は咄嗟に身体を動かした。
真っ青な顔で倒れた彼女に駆け寄る。

「ち、無理しやがって」

誰にも聞こえないよう低く呟いて彰は彼女を持ち上げた。

「今日はもう終わりにしましょうか。丁度金曜日ですし、疲れを取って下さい」

百合を抱えて彼は保健室へと向かい、体育館から姿を消した。

「お姫様だっこだ…」

こんな時にそんなことでみりは顔を赤くしてしまった。

準備とだっこ（後書き）

次第に題名が適当に……………（汗）

ちくちくと文化祭

秋に入る独特の蒸し暑さはなく、だからといって寒いわけでもない。快適な湿度と温度を保っている空調の効いた部屋にいつの間にか寝ていた。

百合はぼんやりと白い天井を見つめる。

「……………だるい」

起き上がるのも気怠さを感じるほど彼女の身体は疲労を感じていた。そのため布団から出ることもなく辺りを見回す。その部屋は見覚えはなく、しかし全く知らないような場所でもない。そんな曖昧な記憶しかない部屋だった。

「いっ、どっ？」

疑問に思うが、今の彼女はその答えを知ることより、眠気の方が勝り、静かに瞼を落とした。

気付けば窓からは明るい陽が差していた。眩しくて目を開ければ、また硬直する。頭がすっきりすると今のこの状況が理解できていな

いことに気付く。

「あれ？」

そう呟いてしまうのも仕方ない。彼女はゆっくりと身を起こすと制服のまま布団に入っていることに気付く。

準備していた時からの記憶がない。見知らぬ部屋にパニックに陥る彼女。

そんな状態だが、身体は食べ物を求めて小さく鳴く。誰かに聞かれているわけではないが、多少恥ずかしい。タイミングよく隣りの部屋から柔らかな食事の香りがただよってきた。

「……………」

恐る恐る扉を開ける。そして再び硬直。

開け放って入ったその空間は何回も見たあの部屋。そしてキッチンに立つあの姿。

「……………」、何で？」

思わず呟く。同時に彼が振り返り、じっと彼女を見やった。びくりと、肩を震わせる。

無言で近付いてくる彰に自然と広がる緊張。

「ご飯食べれます?」

「へ?」

「時条さん、働き過ぎです。もっと自分を大事にして下さい! 昨日、倒れたんですよ」
昨

ああ、だからここにいるんだ。

やっと事情が飲み込めて思わず安堵した。そして素直に椅子につく。身体に優しいような薄味の料理を少しずつ口に運んでいく。

目の前に彰。

彰の部屋で。

一緒に食事。

もう、できないと思ってたのに。

「時条さん、食べ終わったら家まで送りますよ」

「いえ、一人で大丈夫です」

結局私は迷惑をかけてる。

それなのに、この状況を喜んでる。

最低だ……
さいてい。

ドロドロとした感情が渦を巻く。気持ち悪くて、辛くて、息もできない。
ただ、一緒にいるだけで、後ろめたい気持ちが満ちていく。

「本当に大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

「……………あまり無茶はしないようにね。時条さん」

ちく、

ちく、

次第に増えていく。

「ありがとうございます。せん、せ」

ちく、

ちく、

無情に時は過ぎていく。

何もしなくても、やったことは過去となり、思い出となる。
嘘の自分が出せないことが悔しい。

せめて、先生に迷惑をかけない程度の嘘を、つきたいのに。

「…………やっぱり、わがままなんてなれねえよ」

大切な存在を作るのは、

辛い。

そして、時は過ぎて。

文化祭当日。

やきそば、たこ焼き、クレープ、チョコバナナ。沢山の模擬店が並び、朝から盛り上がる。

「百合ちゃん、予想以上に客の入りがいいからさ、ケーキ多めに作っというて」

「了解」

コック担当の百合はあらかじめ作ってあるスポンジに生クリームを塗り、デコレートしていく。

「流石、手際いい」

「へへ、後で私達も食べよ」

二時まで働いて、後は遊べる分担なので、楽しみが残って百合にとっては嬉しいシフトだった。
みりも一つ頷いてホールに戻る。騒がしい誰かの歌声を聞きながら、百合はフルーツを散らばせた。

カラオケと音痴

お化け屋敷、投げ輪、占い屋、ライブ、衣装店。飲食店以外でもかなりの店があり、三人はどこから行くか悩んでいた。パンフレットと睨み合いながら廊下を歩く。

「と、とりあえず近くから行こう！」

「うん」

結局行き当たりばったりで行くことを決意し、パンフレットをポケットに突っ込んだ。

「百合ちゃん！ たこ焼き！」

「あ、クレープ！」

「ああ！ あれ、あれ！ 焼きそば」

「わたあめあるよ！」

「ジュースう」

「アイスだ！」

「……………食べ物ばっか」

二人が行くところに付き合う百合はその行き先が飲食店しかないこと
にかなり驚く。アトラクション系ははつきり言って楽しめるものが
少ないため、それは仕方ないのだが。

次第に重くなる胃に苦い表情を作り、百合は慌てて提案する。

「私達の店行こう？」

「よっし！ ケーキだ！」

既に食べることにしか考えていない二人は別に反論しない。百合はと
りあえずそこでお腹を落ち着かせようと考えた。

夕方に差し掛かったためか、客の入りはほとんど生徒しかいなく、
あまり混んではいなかった。四人テーブルの席に三人はついて、メ
ニューを見る。

「えーと、ショートケーキ、チョコレートケーキ、ガトーショコラ、
フルーツたっぷりのロールケーキ、紅茶のシフォンケーキ、チーズ
ケーキ、シュークリーム、クッキー……はわあ、よく作ったね！」

「うん、ケーキはスポンジとか、もちそうなものだけ作っておいて、
デコレートとかはその日に準備したんだ」

「よし、皆で違う種類頼んで食べよ」

「うん」

それぞれ好きなケーキとクッキー、紅茶を頼んで、三人はステージの上で歌う人を見やる。

「やっぱり上手い人多いよねー！」

「ねえ、百合ちゃん！ 次歌ってよ！」

「えっ！ やだよ」

ケーキが来て、まさに食べようとした時に言われたため、思わず百合はその一口を皿に落とした。
にやあっと妖しい笑みを浮かべる二人は互いに顔を見合わせて、リモコンを手を取った。

「よし、これじゃない？」

「あー、そんな感じ」

勝手に何かを選曲して、送信してしまった。止める間もなく入れられた曲は誰もが知っているものだ。

「さあ、行け！」

「だから、行かないって！」

「まあまあ、うちらも歌うからさ」

みりがなだめて百合の背中を押して、ステージに上がる。いくら人が少ないと言ってもそれでも十数人の客がこちらを向いている。悩んで困っている間にあの綺麗な曲が流れ始めた。

「ささ！」

マイクを渡されて握り締める。

覚悟を決めて口を開いた。

「—————！！」

そして、ワンフレーズ歌った瞬間彼女は思い出した。
自分が音痴なことを。

沈黙が続く百合にみりと紫央里は申し訳なさそうな表情でずっと視線を向けている。

「ごめん、百合ちゃん……」

「まさか、おん……ちとは知らなくて」

「うん、そうだね。私もすっかり忘れてたから、大丈夫だよ」

ふふふと乾いた笑いに更に二人は顔を青くした。

文化祭は無事に終了して、それぞれ片付けに入る。紫央里は自分のクラスへと戻って行き、百合とみりは自分の担当の場所を片付けていた。

「はぁ………」

疲れからか重い溜め息。片付けはほとんど終わり、他の人達は違う場所へ駆り出された。

百合は一人、椅子に腰掛けてぼーっとする。

「百合ちゃん終わった？　これから打ち上げだって！　グランド行こう？」

「あ、ごめんみいちゃん先に行ってて」

「あー、うん。わかった」

深く突っ込まず、みりは先にグラウンドに向かう。しばらくその場で何度か溜め息をついていると誰もいないはずの体育館に足音が響く。

「あれ？ 打ち上げ行かないんですか？ 時条さん」

それは、いつものように微笑む、彰だった。

立場と望み

避けてきたはずのこの状況に、喜んでいる自分がいる。

「先生こそ、出ないんですか？」

素っ気無い言葉を言って、百合は視線を逸らす。何か危険なものが自分の中から溢れるのを防ぐ為に。それに知ってか、知らずか、彰は彼女に近付き、側にある椅子に腰掛けた。

「僕はちょっと疲れちゃいまして。あ、食べましたよ！ ケーキ。
流石時条さんは料理上手ですね」

「……ありがとう、ございます」

込み上げてくるもの。それを素直に出せないのが、もどかしい。百合は横目で彰の顔を覗く。あまり明かりがないせいか、彼の表情まで窺えなかった。

「あ、あと………時条さんて」

言いかけて何故か彼は言葉を切った。首を傾げて思わず顔を向けると彰の肩が小刻みに震えていることが理解できた。

「先生？」

「時条さんて、意外と歌下手だったんですね」

震えている理由を理解して百合は顔を赤くした。その様子で我慢が
きかなくなっただのか、思い切り彼は吹き出して笑い出した。

「せ、先生！ 何笑ってっ……」

「あはは！ ごめん、だって」

笑いが尽きそうにない彰に百合は思い切り睨む。その目は少し潤ん
でもいる。

流石に罪悪感を覚えた彰は慌てて謝った。

「わー！ すみません！ もう、笑いませんから、泣かないで下さ
い！」

「な、泣いてなんかない！ 馬鹿！」

「百合さあん、機嫌直して下さい」

「ふんだ、彰なんかしら——」

はっと、百合は口を閉じて立ち上がる。目を見開いて彰を見れば、彼も同じような表情をしていた。

恐れていた、この状況…。

「――っ、ごめん…なさい。私、ちょっと皆の所に行きますね」

戻らなくてはいけない。

だから、喜んではいけない。

望んではいけない。

引きつった笑みを彰に向けて百合は走り出した。

恐れていた、この状況。

だけど、私が最も望む。

だから、二人つきりになんてなっちゃいけないかったのに。

皆の所へと言いながらも彼女が行く方向は誰もいない校舎。

彼女の足音が哀しく響き、だけど心臓の音をかき消してもくれない。息が苦しくなって百合は足を止める。がくがくと膝は笑っていた。

「情けない…」

その場に座り込んで百合はスカートをきつく握り締めた。
冷たい床は彼女の心まで冷たくしていく。遠くで聞こえる生徒の声
は彼女を笑っているようにも思えて来る。

「もう、嫌」

戻りたくない。

それよりも、あの日に…。

「百合！」

聞こえてきた声に百合は顔を上げる。喉が凍り付いて声が出せない。

「嫌なら、無理しなくていいんだ！」

その言葉に首だけ振った。状況が理解できない。わからない。

「何で、追い掛けてくんだよ！ 何でそんなこと言うんだよ！ 一
緒にいただけで……彰の立場、悪くなるのに」

消え入るような訴え。聞いてはいけない気がした。この先を、聞いちゃいけないと。けれど、耳を塞ぐ勇気も無くて。

「……………そうだな、確かに一緒にいることで立場が悪くなる」

ずきん。

一瞬呼吸を忘れるくらい、胸が痛んだ。けれど、本当に最悪な事態にはこれではならない。

だから、安心した。

「うん。だから、戻ろうとした。実際、本当に元に戻った。だけど、戻ったところで、私の願いは変わらない」

変わらないから、苦しいんだ。

「関係が戻っても、願いは変わらない。願いを叶えるために必要なもの、それがわかったから、もっと苦しい」

戻りたい。

元にじゃなくて……………

肩を震わせる。堪えていたものが一気に溢れて、床に落ちる。

「……俺も戻ろうとした。百合の立場が悪くなったら、困るから」

「——っ!？」

「だから、戻ろうとした」

思いがけない言葉に耳を疑う。襲撃で身を固くすると後ろから温もりが彼女を包んだ。

「戻れると思ったんだ。だけど、俺の方が元に戻れなくなった」

戻りたいと再び

暖かい温もり。

優しい香り。

力強い腕。

すべてが、なつかしい。

「や、」

ぞくぞくするそれに身をよじる。触れてはいけない、近付いてはいけない、そう警告してくる。

けれど、彼は一向に放してはくれない。

「戻りたいんだ」

耳元で懇願する。その言葉は、何よりも切ない響きで彼女に入る。

「元じゃなくて、特別だったあの頃に」

生徒でも、教師でもない。
本当なら有り得ない、特別な関係。

もどりたい

それは、彰だけじゃなく、彼女も。

「何で、我慢してたこと…言うんだよ」

放すのは諦めたのか、涙を溜めた目を彰に向ける。

本当に最悪な事態が予想外にも起きてしまった。もう、彼女には止められない。

「そんなの、私も一緒だ」

はまり始めた、彼女の人生。それは、いくつかあるピースの中から一つだけ選んで…。

そして、姿を決めていく。

「私だって、離れたくない！ 元に、戻りたかった」

絶対と言わないと決めたその言葉。紡いでしまった瞬間、彼女の目

から止めどなく溢れて行く。

「ばか、彰のせいだ。言うつもり、なんて………なかったのに」

力無く言う。掠れた声には微かだが安堵の色が帯びていた。

「………百合、戻ろう。その関係に」

きつく、強く引き寄せられて、百合は小さく頷いてしまった。

そして、もう元には戻れない。

ひんやりとした風を頬に受けて、百合は帰路を歩く。綺麗に瞬く小さな光に目を奪われながら。

ほわほわと覚束ない足取りでゆっくりと歩き、帰宅した。

柔らかい冷たさを感じる床を踏み締めて、そのままその場に座る。

「………嘘、みたい」

まだ実感がわかなかった。本当に元に戻ったのか理解できなかった。けれど、身体に残る切なさも、温もりも、香りも、全て現実で。百合は顔を真っ赤に染めた。咄嗟とはいえ思いがけない行動を取ってしまったからだ。

「は、恥ずい…」

でも、戻れた。

戻れて…よかった。

諦めていた存在が、また戻ってきた。だから、百合は気付かなかった。

彼女にとって一番重要な、二人の関係について。

「百合ちゃん！ ちょっと待って」

「あれ？ 今日は早いねしおちゃん」

「うん！ ちょっとね。あれ？ みいは？」

いつもなら一緒に登校して来る彼女の姿が見えない。百合も少し気にかけていたが、首を振るしかできなかった。

「珍しい。寝坊かな？」

「さあ？　よくわかんない」

とりあえず学校に向かいながら二人は昨日の文化祭のことや今度のテストのこと等他愛ない会話をした。

「でね、今度服を買に行きたいんだけど、一緒に行かない？」

「うん、いいけ……」

何か、感じたことのあるものを察して百合は紫央里の腕を引いて横にそれた。すると目の前で木刀が通り過ぎる。

「くそっ！　勘がいい奴め！」

「ごめん、こういう不意打ち慣れてるから。ってか、あんた誰？」

見覚えのない男に百合は眉を寄せた。最近はめっきり減ったと思っていたが、久し振りに百合に喧嘩を売りにきた不良が訪れたようだ。

「ふん、お前とお前の男に倒された奴の兄さ。可愛い弟の為に仕方なくお前をボコしにきた」

そう言われて見れば、二人のうち一人に髪型や目元が似ていた気がした。

百合は大きく溜め息をついて紫央里を後ろに追いやる。

「百合ちゃん男なんていたの!？」

「ちょ、しおちゃん、今それを突っ込むの何か間違ってるから!」

っと言っている間に男は襲いにかかる。それを反射で避けて難を逃れるが、どう見ても見逃してはくれなそうだった。

戻りたいと再び（後書き）

サブタイトルが……何かいいの浮かばないです（汗）

強さと怪我

いつからだろうか。

こうして不良に絡まれるようになったのは。

大振りされた拳を難なく避けながら、百合はふと思った。こういった時、どのように動けばいいのか、身体が感覚で覚えている。ちなみに紫央里は後ろできゃーきゃーと喜んでいる。

「くそ！　ちょこまかと！」

「本当、二人そろって弱いよ」

避けたついでに蹴る。

避けたついでに殴る。

けれど、やはりあまりダメージはなさそうだ。それも百合が女だからというのもあるのだろうが、人並み以上にこの男がうたれ強いのも原因だろう。

「はっ、所詮は女って、あいつ等が言ってたわけだ！」

「……………」

ムカツときた。百合は避けることをやめていきなり男に突進する。

意外な行動に男も目を瞠るが、突然のことで対処できない。

「うっさい！ 人がそれなりに気にしてることを言うな！」

「いででででで」

しかし、彼女が繰り出した技は拳でも足でもなく、彼の頬を思い切りつねる行為だった。普通に闘うより、地味に痛い。

「百合ちゃん！　すごいけど、まぬけ…」

「気にしないで！」

容赦なくつねり続けるが、男がいきなり抱き付いてきたことにより手を放してしまう。身動きが取れないのもそうだが、何より知らない男に抱きつかれるのはあまりいい気分ではない。

「な、ちょ、」

「捕まえた。これで避けられねーだろ」

腰や肩に手を回されて悪寒が走る。もがいてもやはり力では勝てず、泣きそうになった。

ここで泣いたら、終わりだ！

「放せ！」

「あ、そうだ！ お前の男は何処にいる？」

「…………知らない。俺に男なんかいないよ！」

睨みで反撃して虚勢を張る。これは彰に迷惑をかけたくないためでもあるが、事実でもある。

しかし、そんなものが通用するわけもなく、男は彼女の腕を取り、軽く殴る。

体重が軽いため、それだけで後ろに飛ばされた。

「百合ちゃん!!！」

「早く吐け！ 俺はそいつも倒さなきゃいけないんだ」

「…………、倒せないよ。お前なんかが、あいつを倒すなんて無理だ！」

口元についた血を拭いながら言った。目頭が熱くなる。けれど、必死に涙は抑える。

「あいつは、俺より強い」

「当たり前だ」

突然現れた声に三人共に驚愕する。理解する前に男の背後から彰が現れ、容赦なく蹴り倒した。

「……………あ!」

「財津先生!」

二人の声など聞こえないかのように彰は男を足蹴にして、睨む。

「僕の生徒に手を出さないでもらえますか? できれば平和な日常を送りたいでしょう?」

「な、何言って……」

「俺は、昔ここで陣張ってた彰、なんだがな」

最後の言葉は小声で男に呟いた。

彰、という名前に聞き覚えがあったのか、男は面白いくらい顔を真っ青にして腰を抜かした。

もう、暴れないと判断した彰は元の教師の顔に戻って百合の方へ歩み寄った。

「大丈夫ですか？ 時条さん」

「あ、はい」

「かっこいいー！ 先生！ 結構強かったですね」

「それでも、昔は族に入ってたんですよ」

「?!」

「あはははは！ そんなん、誰も信じないよ。ね、百合ちゃん」

「あ、うん」

シヤレにならない彰の言葉に何故か百合がはらはらする。笑う紫央里にバレぬよう彰を軽く睨んだ。
しかし、彼はそれをスルーして、にっこりとあの笑顔を向けた。

「それよりも時条さん、顔が…」

「……………！ あ、先生ついでに手当てしてあげて下さい！ 私今日当番なんで早く行かないとだし！」

「え！ しおちゃん！」

百合が止めるのも聞かず勝手に紫央里は学校の方へ走って行く。
行き場のない手を降ろして、小さく息をついた。

「あの、」

口を開こうとした瞬間、勢いよく彼が百合の顎に手をかけて、顔を持ってくれた。教師の時とは違い、強く、くつきりとした瞳が彼女を見つめていた。

「あ、彰？」

「腫れてる。早く冷やした方がいいよ」

そう言って彰は彼女の腕を掴み、歩き出した。

熱とパニック

大きな背中。

大きな手。

力強いそれ。

甘えたくなりそう……。

「あき、ら？」

無言で彼女の怪我を処置する彰に百合はおずおずと口を開いた。シンとした空気が少し苦しくて、辛かったからだ。

「怒ってる？」

「……馬鹿、ああいう時は逃げろよ」

テープでカーゼを貼り付けて、無事に終了した。彰は冷凍庫の中から氷を取り出し、氷のうを作る。それを差し出したので百合は受け取ろうと手を延ばした。

が、その手は違う手で掴まれて、引き寄せられる。

「な！」

「じっとしてろ。冷やしてやるから」

怪我した場所に優しくそれが当てられる。ひんやりと優しい冷たさが徐々に伝わってきた。
何もされないと思って気を抜いたのも束の間、首筋に異様な感覚が走り、肩を竦ませた。

「――っ」

顔の隣りに彼の顔がある。
必要以上に近い身体。
首筋にかかる息。

これじゃあ、逆に身体が熱を帯びる…。

「次からは逃げろよ」

「でも…」

「逃げろよ」

「……………はい」

妙に迫力ある声に逆らえる訳もなく、力なく頷いた。それに笑んで、彰は彼女の首筋に唇をつけた。電撃が背筋を走る。小さく身体が跳ねる彼女を最後にきつく抱き締めて放した。冷やしているはずの顔は真っ赤に染まり、今にも爆発しそうなほど熱そうだった。

「ほら、早く教室戻れよ」

「~~~~、ばか、やろー」

上目で彰を睨み付けて百合はフラフラと保健室を後にした。

「で、どうだった？」

「どう、て。別に、普通」

お昼休みにご飯を食べようと訪れた紫央里が放った第一声はこれだった。何となく予想はしていたが、実際に聞かれると結構困る。努めて冷静に言葉を返す。

「なあんだ、つまんない。あれ？　みいは？」

「今日休みみたい」

「うっそ！　珍しい！　今まで皆勤だったのに」

そう言いながらも二人は弁当を広げる。紫央里は自分の鞆を探り、ある物を取り出した。

「百合ちゃんも読まない？　面白いよ！」

「何？　漫画？」

「うん！　禁断愛なんだけどね、面白いよ！　だけどまだ一巻しか出てないんだ」

はい、と渡されて思わず読む。内容はお金持ちのお嬢様とそこに働く執事とのラブストーリーらしい。

互いに惹かれ合う二人だが、立場からして一緒になるわけにはいかず、けれど最後には結局互いに気持ちをぶつけて特別な存在になる。そんな話だった。

「読んだ？　面白かった？」

「うん！　絵も可愛いし！」

「でしょ？ でも、はつきりしないで終わったんだよねー。互いに結局特別だとは言ったけど付き合っていないから、すごい先が気になるんだよ！」

ふと、百合の動きが止まる。

特別な関係になった。

だけど、付き合っていない。

あれ？ 結局私と彰の関係って、何？

やっと気付く、また関係の名前が出ないことに。特別な関係に戻っても、その関係が何なのか、やはりわかっていないことに。

彰は、私のことどう思ってるのか、わかってない。

足元から何かががらと崩れていく。

翌日。百合は家のチャイムで目が覚める。寝ぼけた頭で扉を開けるとそこには意外な人物が立っていた。

「うっわ！ 不細工な顔だな」

「あ、あ、彰！ 何で！」

「いや、時には俺から遊びに行こうかと」

当然のように言って、当然のように上がる。呆然とその様子を見ていた百合ははっと今の服装に気付いて自分の部屋に入った。

「そこに適当に座ってて！ 着替えるから！」

「ああ」

びっくりしたあ。何で、しかもこんな早くに？
ってか、何着ればいい？

軽く（いやかなり）パニック状態だ。

熱とパニック（後書き）

次で第二部終了です。長かった…。

好きと…………

自分の部屋を男に見られるなんて、思いもしなかった。

慌てて選んで着た服はいつもなら絶対着ないミニスカートで、何故この服を選んでしまったのか、百合にもわからなかった。少しそわそわしながら彰を見ると興味深そうに彼女の部屋を見渡していた。

「何でいきなり？ 来るなら来るって言って欲しかったんだけど」

「ごめん、ちょーっただけ百合の部屋着姿が気になって」

恥ずかしいことを言われ、百合は思わず彰の胸倉を掴む。

「お、お、お前は変態かつ！」

「ちょ、ギブギブ！」

自分でやったことなのに、百合は近付き過ぎた顔を認めて、硬直した。急激に心臓が運動を始める。従って身体が熱くなる。目を逸らそうとも逸らせない雰囲気吞まれて、百合はただ彰を見てるしかなかった。

「…………百合」

低く、教師とは違う声音に肩が震える。

イケない雰囲気百合は身体を離れた。本当は、望んでいた状況。だから、今はそんなことをしたくなかった。

「…………、彰。また聞いていい？」

「何を？」

「私と彰の関係って、何？」

気付いてしまった。

教師と生徒の関係ではない。それは互いに望んだ関係。だけど、望んだ関係に名詞がないことを。また、気付いてしまった。

「私、言ってなかった。多分、言うのが怖くて」

「百合？」

「……………、私、す…き、だよ。私、彰が好きなの」

教師である、彰が。

特別な人。

教師だからこそ、他人よりも近い人だからこそ、やっぱり言うのが不安で。だけど、”付き合う”という関係が欲しかった。

「好き。だから、私と付き合って」

小さな、か細い声。けれど、真剣さも切実さも感じられるはつきりとした言葉。

彰は無表情で百合を見やる。その顔が彼女の中の不安を増幅している。揺れる瞳はそれでも逸らすことなく、まっすぐに彰を捕らえている。

彰はそんな彼女の身体を引き寄せて、抱き締めた。

「――！」

「じゃあ、聞くけど。俺がどうしても百合をここまで欲していると思う？」

「ほっ………！ 変な言い方しないで！」

「どうしてここまで気にしてると思う？」

そんなこと聞かれても困る。
わからないから不安なのに。

百合が戸惑っていると彰は 一つ小さく溜め息をついて、百合の顎に手を当てる。

自然に顔を上げる態勢になり、百合は思わず顔を赤く染めた。

「彰…」

目が合う。息がかかる。こんなにも近い場所にいる。

それでも、幸せのはずなのに。

はまっていく。病んでいく。どうしようもできない、やめることができない、苦しくて、切なくて、贅沢になるこの気持ちから、逃れられない。

吸い込まれていく。次第に近付いて、触れる。どっちからなのか、わからないまま。

「ん……」

身体が熱くなる。恥ずかしいはずのその行為に夢中で、自分が一体何をしているのか百合には理解できてなかった。

次第に呼吸が苦しくなって、離れる。けれど、すぐに彰に押さえ付けられて口を塞がれる。慣れない行為に目眩が起きる。

「ん、ふっ」

息苦しさから小さく息を吐くごとに声が漏れる。いつしか身体は痺

れて、咄嗟に出してしまう抵抗も無くなる。

「はぁ……………」

長い、長い行為がやっと終わる。とろんとした目を力なく彰に向ける百合はまだ思考が停止しているのか、何も言ってこない。

彰はそのまま彼女を抱き寄せて、肩に顔を乗せた。襟から覗く彼女の首筋にわざと音を立てて口付け、更に羞恥を煽る。

「や」

「駄目、動くな。俺はいつも、こういうことする関係になりたかったんだから」

よじる彼女の身体をしっかりと捕まえて、更に口付ける。ぞくぞくとした感覚に百合は身体を震わせる。

「…じゃあ、付き合ってくれるの？」

「今さら聞くことじゃないだろ？」

にっと意地悪い笑みを向けて、彰はまた彼女の唇を塞いだのだった。

好きと……………（後書き）

第二部終了しました。一部終了時に三部構成と言ってしまったんですが、すみません。四部に変更されました（汗）

では、予告。

願いが叶って、幸せだった日々。

そんな時にまた気付く…。

彰がいて、みいちゃんがいて、しおちゃんがいて…

それだけで幸せだと思ってた。

「援交だっけ？」

流れる噂。

注がれる視線。

この状況を、私は知っている。

助けたいと思った。

だから必死になった。

だけど、それが間違いなんて…。

「そうだよ、同情で近付いた」

崩れる関係。

いや、最初からそれは見せかけだった。

「友達も関係も何もいらない！」

突き放された。

だけど、もう…戻れない。

彰の時と同じで、

知らなかった頃には。

「もう、わかってるんだよね？ 気持ちには、知らぬ間に咲いてるんだ

よ
」

ふたつのピース、第三部。

友情編…全十七話。

今週金曜日からスタート。

わかんないと恋人？

季節は冬に近付き、気温は下がっていく。すっかり制服の下にカーディガンを着込むように、寒がりの人はマフラーまでもしている。百合は教室に入って席につく。いつものように登校は早めで、そこまで生徒がいるわけではない。

ふと、窓の外に目をやると丁度彰が出勤してきた時だった。一瞬目が合う。にっこりと教師とは違う笑顔を向けてきたので百合は顔を逸らした。

し、死ぬ。

いや、あの顔反則だって！

付き合い始めて三日目。彼女はやはりこの状況はキツいらしい。彼の顔を見たことでこの前のキスを思い出したのか、顔はかなり赤い。しかし、すぐに違和感を覚えて彰から意識を放した。

「あれ？」

「うっそ！ 今日もみい休みなの？」

「うん。どうしたんだろう」

お昼休み、いつものように一緒にご飯を取る二人はまだ来ないみりを心配していた。
いつもかかさず出席し、時には熱があっても来た彼女が二日も学校を休むのは珍しい。

「どうしたんだろう？」

「今日見舞いに行く？」

「そうだね」

そして、学校終了後二人はみりの家へ向かうことになった。

「こっちだよ」

流石にそこまで知らない百合は紫央里の案内で行く。気付くとそこらは結構大きな住宅が並ぶ場所だった。そして、紫央里が止まって見ている家も結構な家だった。

「すごい！ みいちゃんちって大きいんだね！」

「うん。そうだね」

あまり興味なさそうに紫央里は頷く。百合もだからといって何かあるわけでもないのに、彼女がインターフォンを押すのを見ていた。しばらくして無愛想な声が戻ってきた。

「あの、みりちゃんは？」

「まだ戻っておりません」

「え！　だって今日――」

何かを口走りそうになった紫央里を慌てて押さえて、百合はでは、また伺いに来ますと通信を切った。

「何すんの？」

「今のでみいちゃんがズル休みしてるのがわかったから、無暗に変なこと言うべきじゃないよ！」

学校に来ていないはずのみりが家にもいない。これは完全にズル休みだろう。理由もわからないまま彼女のその行動を家に知らせるのはあまりよくない。

百合は紫央里を連れて近くのマックに足を運んだ。飲み物を片手にテーブルにつく。

「どうということなんだろう？」

「わかんないけど、何かあったんだと思う。私もこういう経験ないから、わかんない」

「みいが……」

シンとした瞬間紫央里がいきなり立ち上がった。驚いて彼女を見やるが、窓の外をじっと見ていることに気付く。その方向に顔を向けると、そこには探していたみりの姿があった。

同じく百合も立ち上がり、飲みかけたジュースなど気にせず店を後にした。

近付くと彼女はやはりみりだった。しかし、一人ではなく、見覚えのない男性と一緒にだ。

「誰、あれ」

「わかんない」

思わず物陰に隠れてしまい、二人の様子を見つめる。

みりはしばらくその男性と話をしていた。しかし、男の方が首を振って背中を向けて歩き出す。みりはそれを必死に止めようとした。

「待って！」

緊迫したみりの声が届いた。瞬間、彼女は男の前に回り、キスをする。みりの行動は彼にも予想はできなかったらしく、辺りを見回した。

「え、え！　もしかして」

「恋人？」

これには二人も驚きを隠せない。百合はふと、ある時のみりの言葉を思い出した。

『でも、恋はわがままになった方がいいと思うよ？』

あの言葉の力はもしかしたら自分のことと重ねていたのかもしれない。

みりは男に引き離されて置いてかれる。小刻みに肩を震わせて立ち尽くしている彼女に百合は思わず走り出した。

「え！　百合ちゃん」

紫央里の言葉など聞かず、百合はそのままみりの身体を抱き締めた。

「百合……………ちゃん？」

彼女の掠れた声が百合の耳元で聞こえる。

秘密と脅し

先程は入れなかったみりの家に今二人はお邪魔していた。
一人の子供部屋にしては大きい八畳間の部屋に入り、可愛いガラス
テーブルの周りに腰を落ち着かせた。

「お見舞い、来てくれたんだ。ごめん、変なところ見せて」

みりはお茶を二人に差し出しながら謝った。流石に質問攻めにはで
きず、二人は黙ってそのお茶をすすった。
あまりきつくないハーブティーだった。

「……………もしかして、話も聞いた？」

「ううん、様子だけしか見てない。ごめん、覗き見なんてして」

「あのさ、あの人みいの恋人？」

思い切って紫央里は問う。これには百合が少し驚いたが、紫央里の
性格をよく理解していたみりは諦めたように頷いた。

「随分、年上だね？」

「……………うん、今二十六歳だから、十歳差かな」

彰と私より差がある…。
みいちゃんすごい。

別な理由で感心した百合を余所に紫央里は更に大胆な質問をする。

「上手くいってないの？」

「……………」

これには彼女も答えられず、俯いた。しかし、それは逆に肯定しているようなもので、百合と紫央里は問い詰めることはしなかった。しばらくしてみりは無理やりに作った笑みを二人に向ける。

「ごめんね、心配かけて。明日から学校行くから。この件も何とかするからさ、心配しないで！　ね！」

その痛々しい姿に二人は頷くことしかできなかった。

「結局、みいは私達に知られたくなかったんだね」

「……………」

少し淋しそうに紫央里は呟く。百合はその言葉に少しだけ胸を痛めた。言えない関係があることを彼女は理解できるから。

「ごめんね、しおちゃん」

「え？」

「あ、ううん。それより、どういう人なんだろうね。男の人」

彼の職業などは見た目では理解できない。少し気弱そうなイメージが強かったくらいだ。

「……………恋って、私には理解できないからな。百合ちゃん、力になってあげて」

「……………うん」

百合と紫央里は途中で別れて一人で家に向かう。

既に空は真っ暗で人通りの少ないこの道は静かな空間を作り出している。

暗い、孤独な道。そんなのはいつものことで、そんなのを気にしたことなどなかった。百合はみりのことを考えながらゆっくりと家に向かう。

じやり…………

微かに、彼女に届いた足音。一瞬ドキリとして肩を震わせた。妙に自分の鼓動が大きくなっていく中、彼女は次第に足の速度を早めた。しかし、早くしても微かに聞こえる足音は消えない。逆に大きくなり、百合の恐怖を煽った。

「————っ」

すぐ後ろに追いつかれたと思った瞬間、彼女は口を開く。しかし、それは声にはならず、逃げる直前に手首を掴まれた。ぞぞと、背筋に悪寒が走る。腕を振りほどこうと力を入れてもどうにもできない。

「はい、暴れないの」

「?!?!」

聞き覚えのある声に百合は目を瞠る。ゆっくりと振り返ればそこには彰の顔があった。

チカンではなかったことにほっとして、更には彰だったことで、堪えていたものを零してしまった。意外にも彼女が泣いてしまったことに彰はギョツとして、百合の手を放した。

「び、くり……した」

「ごめん、そんなに怖がるとは……。百合のことだから俺を蹴り飛ばすくらいすると思ってた」

「ばか！ だからって質悪いことすんなよ！」

「百合がこんな時間まで出歩いているのも悪い！」

普通なら彰が謝るはずなのだが、何故か力強く否定されたため、百合は思わず謝ってしまった。何だか納得できないが、対抗する気力もなく溜め息をついた。

「でさ、さっき誰を呼んだの？」

問われている内容はおそらく襲われたと思った時に叫んだこと。百合はじっと彰を見やり、答える前に顔を逸らした。

「隣りの家に住んでる犬のロッキー」

「素直じゃねーの」

このぐらいの罰は当たり前だと百合は心の中で呟いた。

違和感と勘違い

それからみりは二人に約束した通り、毎日学校に来るようになった。休んだのはたった二日なので、他の人達は何も気にしていない。普段は変わらないが、影で携帯をずっと睨んでいるのをよく見かける。おそらくメールで彼とやり取りをしているのだろう。

「あ、ごめんね。気にしないで」

聞いても言うのはこれだけで、他に何かを言おうとはしなかった。百合はそれに淋しさを覚えながらも、突っ込んで聞くこともできず、そんな違和感を覚える毎日を送っていた。

夕方、二人と別れて一人百合は帰路を歩く。何もできないもどかさからくる疲れに溜め息をついた。既に陽は沈みかけ、道は暗くなり始めた。周りには誰もいなく、けれど自分とは異なる足音が耳に届いた。次第に近付いてくる。百合は少し顔をしかめて、鞆を持つ手に力を入れた。

「あの……………」

「何度も同じ手を食うかあ!!!」

振り回してから気付いた。今、自分に声をかけたことを。今度は彰ではないことを。

回した鞆の角は見事に直撃して、その人はそのまま卒倒してしまった。

やっちまったああああ!

「う……」

「あ、気付いた？」

彼が目を覚ましたのは百合が自分の家まで運んだ後だった。見慣れない部屋に一時思考が停止したのか、しばらく瞬きを繰り返して、百合を見ていた。

黒い短い髪、黒い瞳、更にはビジネススーツを着たとても誠実そうな男性だった。

「あれ？」

「ごめんなさい、ちょっと…痴漢かと思って」

実際は彰だと思ったのだが、流石にそれは言えなかった。男はやつと状況を理解したらしく、顔を真っ赤にして座り直す。

「いや、こちらもお恥ずかしい所を……。すみません」

「いえ。ところで、何か私に話し掛けようとしてませんでした？」

お茶を差し出して、百合は聞いた。男は一口だけ飲んで俯く。少し話にくいことなのか、中々口を開かない。

「ご飯食べていきます？」

「え？」

「お腹すいてるでしょう？」

百合は有無も言わずに食事の支度を始めた。既に出すつもりだったらしく、食事はほとんどできていたようだ。

皿に盛り付けて、小さなテーブルに二人分の食事を並べる。

「さ、どうぞ」

「あ、いただきます」

しばらく無言で互いに食事を取る。知らない男性と共に食事をして
いるというのに百合は気にする様子はない。
男は半分くらい食べて、一度はしを置いた。

「……………僕の名前は神谷真司といいます。突然話し掛けてすみませ
ん。貴方が、みりと友達に見えたから……………」

そこまで聞いて百合はやっと気付く。彼がこの前見たみりの彼氏だ
ということに。

思わずはしを落としてまじまじと彼を見つめた。誠実そうだが、少
しだけ気が弱そうな人。

「みいちゃんの彼氏?! え! でも…何で」

「……………いや、見ての通り僕はみりと年が離れています。だから、
みりに近い歳の人と話がしたくて」

「私に…相談ですか?」

こくん、と頷く。百合は苦笑してちゃんと身体を彼の方に向けた。

「神谷さんは一体何の職業なんですか?」

「医者をしています。だから、忙しくて…みりとはあまり会えないんです」

少し淋しそうに呟くその様は本当にみりのことを大事にしていることだけは伺えた。

百合は内心でほっとした。あの状況だとみりの一方通行にも見えなかったからだ。

「神谷さんは、何を悩んでいるんですか？」

率直な質問に思わず口を結んだ。真司は少し迷いながら、お茶を飲んで少しでも気持ちを落ち着かせようとした。そして、小さくそれを紡ぐ。

「みりと、別れるべきかです」

協力と幸せ

かなり事は深刻なのだと、やっと百合は理解した。別れる、という言葉に背筋を冷やす。じっと見ることにしかできない百合に真司は苦笑した。

「別れたくはないんです」

「じゃあ、どうして？」

「時に感じるんですよ。歳の差の、壁が」

淋しそうに呟いて彼は深く溜め息をついた。歳の差の壁、それは百合にもいつか感じるかもしれない試練。

みりと彼の関係は他人ごとではない。みりと友達だということも含めて、二人の関係が今後の百合と彰の関係にも関わりがあるかもしれないからだ。

「でも、神谷さん」

「はい？」

「私の所に来たってことは、別れないために努力したいってことですよね？」

にっこりと優しく微笑んで、彼女は問う。それに真司は少し戸惑いながらも頷いた。

「あ、でも！」

「何ですか？」

「私、現代っ子とは言えない環境下にいたんで、あまり参考にならないかもしれません」

流石にこの言葉には真司も少し困った顔をしたが、すぐに百合は言葉付け足した。

「みいちゃんが思ってること、二人で一緒に考えましょう？　ね？」

「……………はい、よろしく願います。とりあえず今日はもう遅いので、ご飯だけいただいたら帰りますね」

そうして二人は次に会う約束だけをして、今日は別れた。

翌日、百合はみりの顔を見ると申し訳ない気持ちでいっぱいになりながらも、いつも通りの日常を送っていた。

いつものように三人でお昼を取っているとふと紫央里が微妙な表情をみりに向けていることに気付いた。

「何？ 何かついてる？」

「ううん、みい、少し気をつけた方がいいよ」

「何が？」

紫央里は少し歯切れ悪く呟いて、次の言葉を考えている。

「よくない噂、流れてるから」

「……………？」

結局紫央里はそれ以上何か言うことはなかった。噂がどういうものなのか、百合もみりもよく理解できなかったが、耳に挟まなかったので、あまり気にはしなかった。

学校は無事に終わり、百合は家に向かう。真司と約束したのは明日の放課後で、今日は前々からの約束で彰の家でご飯を作る予定だった。制服のままでは目立つので、一度家に帰ってから彼の家に向かう。

合鍵を使って中に入ると部屋の中は前よりもかなり片付いていて、百合は掃除はしなくていいことだけはわかった。とりあえず干してある洗濯物だけをたたんで、百合は食事の準備を始める。

「よし、完成」

二人分の料理を並べてふと考える。何かが足りない。何か本当に大事なもの忘れてる。じっと作った料理を見つめて悩むこと一分。

「ただいま。ごめん、待った？」

「ああああああ！」

彰が帰ってくると同時に思い出した。突然の絶叫に彼は目を丸くして百合を見る。

「ご飯炊いてない」

沈黙。

「は、ははははは！ 流石、腹いてー！」

爆笑。

今までやったことのない大失敗に百合は顔を真っ赤にして彰を見る。

少し涙目だ。笑ってもいられなくなり、彰は百合の頭を撫でる。

「確かパンならあったよ」

「うう、煮物とかにパンって……」

仕方なくバターロールで主食は我慢して、二人は食事を取ることにした。違和感のある組み合わせの食事に百合は苦い表情だ。

「ごめん、なさい」

「別にいいって。俺は食事作ってくれるだけで充分だよ」

にっこりと安堵したような彼の笑みに百合は一瞬ドキリとした。まだ、こういった表情は慣れない。落ち着かなくて、少し苦手だけど、いつかもっと見れたらいいのに。そう、心の中で静かに思った。

こういう時、幸せって言うんだろうなあ。

慣れない感情にくすぐったくて、百合はぎこちなく笑った。

戸惑いと噂

そして、事件は起こる。

百合が家を出る直前に携帯が鳴る。見ればみりからのメールだった。寝坊したからいつもよりも遅くなるという内容だった。わざわざメールしなくてもと微笑しながら返事を送る。

「おっはよ！ 百合ちゃん」

「あ、おはよ。今日は早いね」

「うん、何となく」

いつもよりも早い紫央里ともう見え始めた学校に向かう。紫央里はキヨロキヨロと周りの様子を窺ってやっと百合に顔を戻した。不思議そうな顔をしている百合に小さな声で聞いた。

「今日みいは？」

「寝坊だからギリギリだって」

「そっか……あのね、百合ちゃん。最近流れてる噂知ってる？」

顔を悪くしながら彼女は問う。噂などには常に疎い百合は何も知らない。それが顔に出ていたのだろう。紫央里は更に顔を悪くして口を開いた。

「あのさ、その噂ってのが」

「時条さん、おはよう。あ、野原さんも」

いきなり後ろから声をかけられて百合は驚いた。今まで二人以外に挨拶をされたことなんてなかったからだ。声をかけてきたのは百合と同じクラスの女子だ。

「お、はよう」

「おはよ」

「二人共はっやいねー！ いつもこんなん？」

「うん、私は」

「私はたまたまだよ」

ぎこちなくその人に答える紫央里が珍しくて百合は内心首を捻らせ

た。

紫央里はみりよりも友達が多く、よく違う人と話をしている所を見掛ける。活発で元気な彼女らしいといつも思ってたが、今日は話し掛けてきた彼女をとて迷惑そうな顔で見ている。

「そうなんだ！ そうだよ、野原さんはいつも私と変わらないくらいだもんね。時条さんはいつも早かったけど」

「私も一学期の途中からだよ」

「だけど、一年の時は同じくらいだったしょ？」

「うん、まあ。よく知ってるね」

「だっていつも話したいと思ってたんだ。だけど、時条さんいつも一人だったからさ、ちよつと話す機会なくて」

そう言ってもらえて百合は少しだけ嬉しく思った。そんな彼女を見て紫央里が少し眉を寄せたことも知らずに。

「あの、百合ちゃ……………」

「あ、もう教室だ。じゃあ、またね、野原さん」

何かを言おうとした紫央里を明らかに遮って彼女は百合を連れて教室に入ってしまった。百合は視線だけ紫央里に向けたが、彼女は心配

そうに見てきただけですぐに自分の教室に向かって歩き出した。

何を、言おうとしたんだろ。

それだけが気掛かりで不安だった。あの紫央里が人目を気にして深刻な表情で言おうとしたことが。

今すぐにでも追い掛けて聞きたいが…。

「時条さん、ついでだからもっと話そ！」

「あ、うん」

彼女から逃れられそうになかった。

他愛ない会話をして何分たったか、次第に二人の周りに他の人達が集まり始める。今まで違う世界と思っていた女生徒の中心にいる違和感を味わいながら、百合はぎこちなく対応した。

「にしても時条さんって結構話しやすい人だったんだね！」

「今度からこっちのグループ入りなよ」

何気なく言われた言葉に百合は一瞬動揺した。グループに入れ、それはつまり二人よりこちらを選べということだ。

「いや、でも…」

「あ、時条さんは知ってる？ 天上さんの噂」

「え？」

噂という単語で思い出したのは紫央里が言っていたこと。困惑している彼女にお構いなく皆は次々にそれを口にした。

「あー！ あれしょ？ 援交だっけ？」

「そうそう、年上のお金持ちそうな男とホテル入ったって」

「その様子じゃ時条さんも知らなかったんだね。まあ、友達にも言えないよねそんなこと」

聞き慣れない単語に百合は思考が停止する。援交というものより、ホテルというのがショックだった。激しく鳴る心臓に苦しさを覚えて百合は顔をしかめた。

そんな時、廊下の方で足音が響く。咄嗟に見ればそこにはタイミン
グ悪く出くわしたみりがいた。

警告と助け

みりの表情が固かった。青くなり始めている彼女に百合は思わず立ち上がって駆け寄った。この様子は明らかに今の会話を聞いていたのだろう。

「噂をすれば、だねえ。ねえ、聞いてもいい？ 援交ってどうやったらできるもんなの？」

「あ、電話とか出会い系？」

「一日何人相手にすんの？」

下品な言葉に百合は耳を疑った。何故、そんなことが言えるのか。何故、こんな所で辱めるような行為をするのか。彼女には理解できなかった。肩を震わせるみに手を延ばした。

「時条さん、そんな尻軽ほっというて私達と話そうよ」

延ばされた手は止まる。目も手も足も硬直して、百合は表情を歪ませた。

知ってる。

これは、警告だ。

今、みりに手を貸せば彼女達は百合にも何らかの仕打ちをしてくるに違いない。直感でそれを理解して口を結んだ。

顔を青くして足元をじっと見やるみりは百合に顔を向けようとはしなかった。じっとこの時間が終わってくれるのを待つようにただ突っ立っている。

知ってる。

これはサインだ。

百合は止めていた手を動かしてみりの手を握る。弾かれたように顔を上げたみりは不安で瞳を大きく揺らしていた。百合はそっと安心できるよう微笑んだ。

「大丈夫、みいちゃんは悪くない」

これは、サイン。

孤独になる不安で助けを求めている。

知ってる。

私はこれを知ってる。

だから、一人になんてしない。

「顔色悪いよ、保健室行こうか」

みりは泣きそうになりながら頷いた。女生徒達の冷たい視線に気付かないふりをして百合は彼女を連れて教室を出る。

噂ってこのことだったんだ。

紫央里が言おうとしたことをやっと理解して、百合は内心で彼女に謝った。

保健室には先生がいなかった。都合がいいと思って百合はみりをベツドに座らせる。堰を切ったように流れ出した涙が止まるまで百合はただ彼女の背中をさすった。次第に嗚咽が消えて落ち着きを取り戻した彼女はやっと口を開いた。

「ありがとう」

「落ち着いた？　大丈夫？」

まだ話すには早いらしく首を縦に振った。安堵して百合は彼女の前に膝立ちになって視線を合わせる。赤く腫れた彼女の目をじっと見つめた。

「聞いてもいい？　ホテルって？」

「……………、やましいことなんて、ないよ。真司は、そういうこと、もっと待ってからって。——あの時は、喧嘩が始まった時だから話し合いたくて入っただけ」

彼は医者で、そういったことにはおそらくこれ以上ないほど律義なのだろう。それを聞いて百合は納得し、安心した。別にやってしまっていたからと言ってどうというわけではないが、まだ早いという考えが彼女の中ではあったのだ。

「そっか、ごめんね。こんなこと聞くものじゃないよね」

「ううん、ありがとう。心配してくれて」

目元を緩ませて笑うみに思わず抱き付いて、また背中をさする。するとみりも彼女を抱き返し、しばらくその状態を保った。

「私は、ずっと一緒だから」

少しクサイ言葉だな、と自分で思いながら百合は言う。けれど、みりは素直に喜んで小さく頷いた。

彼女のために、私は何ができる？

みりを思う気持ち。

みりを守る気持ち。

それらを決意に変えて、百合は考える。彼女の不安を取り除く方法を。

あれから今日は彼女達が百合やみりを構うことはなかった。時々白い目で見えるくらいだ。それをさして気にすることなく百合はみりに必要以上に話し掛けた。

まだ不安は帰りになっても無くならなかったらしく、ぎこちない笑顔で別れた。

安心させてあげることができない自分を悔やみながら、百合は街中へと足を向けた。

今日はもう一度会う約束の日。指定された聞いたことのない喫茶店へと足を運ぶと既に彼は椅子に座って待っていた。

「お待たせしました」

「いえ、こちらこそわざわざ来て頂いて」

百合は軽く一礼して椅子につく。そして彼、真司の顔を見つめたのだった。

事情と誤解

「僕は病院で、みりは学校。休みも上手い具合に合わず、周囲の目もあって、あまり会えないのが事実です。会えても何処かへ連れて行くこともできず、ただ外で話をするだけでした」

話し始めたのは彼女と彼の事情。本当はみりを通して聞きたかった内容だ。百合は静かにそれを聞いて頷く。

「だけどもりはそれだけでいいいつも笑ってくれてました。そんな彼女がまた愛しくて、僕もできるだけ必死に休みを取りました。だけど、技術や知識を身につけていくうちに僕の休みは次第になくなり、疲れも溜まって……そんな苛々をみりにぶつけてしまうことも時にはありました」

人は万能ではない。疲れも溜まるし感情もある。こんな時それを改めて感じる。百合もそうだった。自分のふがいなさに悩み、物に当たることもあった。以前は絡んできた不良に八つ当たりをしてたが、あれは正当防衛だと相手を気にしたことは一度もない。しかし、彼の場合は大切な人。それに八つ当たりをした時、彼はおそらく自分に嫌気をさしただろう。

「それでも彼女は必死に笑って僕を慰めてくれた。だから、休みが減った分仕事をできるだけ早く切り上げて彼女に一時間だけでも会いに行くようになりました」

「ほとんど、毎日ですか？」

「はい」

この言葉には彼女も驚く。そこまでして彼女に時間を当てるのは珍しいケースだと、経験のない百合にも理解できたからだ。しかも彼は社会人。仕事が忙しければ会う時間が減ってしまうのは仕方ないことだ。だけど、彼は。

「だけど、逆に彼女は不機嫌になるばかりで、次第には来ないで……と」

「え！ でも、私が見た時はみいちゃんが神谷さんを引き止めてましたよね？」

「はい。僕も彼女が何を望んでいるのかわからなくなって。そんなに僕が嫌なら別れようって思ったんです。けど、それも彼女は拒んだ」

訳のわからない彼女の言動に真司は振り回されているのだ。重く溜め息をついた彼を見ると少し顔色が悪かった。

「大丈夫ですか？ 今日休んだ方が」

「そうですね、最近寝不足で」

とりあえず今日は状況説明だけということで解散することになった。
会計を済ませて外に出る。

「では、また次の機会に」

「はい。身体、大事にして下さい。みいちゃんが哀しみます」

「あ、は……………」

突然真司は目眩を起こして身体を崩した。百合は咄嗟に手を出して支える。

顔を覗けばやはり彼の顔は真っ青で、今にも気絶しそうだった。

「だ、大丈夫ですか？」

「だい、じょうぶ。ちょっと立ち暗みがきただけです。時条さんは先に帰ってて下さい…」

「でも！」

帰れと言われて放って帰れるほど大丈夫には見えない。百合は心配そうに真司見ているとものすごい殺気を感じて振り返った。
今まで不良に絡まれてきた経験だろう。彼女の視線の先には今一番会いたくなかった人物が佇んでいた。

「……………みい、ちゃん」

「え?!」

百合が呟いた名前に真司は異常な反応をする。そう、二人のやり取りを茫然と見ているのはみり。信じられないというように大きく瞳を見開いている。

「な、んで…二人が？」

驚愕している内容に百合はやっと気付いて慌てて立ち上がる。しかし、みりは既に走り出していた。すぐに追い掛けようとしたが、未だうずくまったままの真司を置いて行くこともできない。

「いいです、行って下さい」

「できません！ みいちゃんなら、わかってくれます」

そう、自分に言い聞かせて百合は真司の自宅まで付き添うと言い、彼の身体を支えた。

「すみません」

「無理、しないでください」

にっこりと弱々しく微笑む。もう、そのくらいの余裕しか百合には
なかったから。

後悔と訪問

初めて、学校に行きたくないと思った。

百合は制服を着て重い足取りで学校に向かう。いつもの時間に、いつもの道で。しかし、やはりみにに会うことはなく、教室に着いてしまった。

ずっと椅子について彼女が来るのを待つ。けれど、予鈴が鳴っても彼女は来なく、本鈴がなったと同時にみりは慌てて教室に入ってきた。

一瞬、目線が合う。けれど不快そうに眉を寄せて彼女はまっすぐに自分の席についてしまった。

やっぱり、誤解してるんだ。

怒らせてしまったことに酷く後悔した。喧嘩している最中に彼が他の女と、しかも自分の友達と一緒にいればどんな人でもショックに決まっている。

しかも、今彼女は他の女生徒からも疎まれている。

馬鹿だ私。

自分から、一人になるように行動した。

ちくちくと胸が痛む。懸命に涙だけは堪えて百合はとりあえず話を

しようと決意した。

けれど、そう上手く事は運ばず、みりは休み時間に入ると彼女に声をかける暇を与えず、どこかに行ってしまう。昼休みもだ。百合は仕方なく紫央里と二人で食べることにする。

「みいと何かあったの？」

「私が、怒らせちゃった」

「もしかして、噂で？」

昨日お昼を一緒にした時には百合もみりも変わらない態度で話をしていたため、紫央里はあのことは知らない。

百合は昨日の出来事を全て話すことは躊躇い、とりあえず教室で起きたことを話し、その後に彼女が誤解してしまったとだけ言った。

「そっか、よかった。百合ちゃんがみいを選んでくれて」

「え？」

「ううん、何でもない」

にっこりと笑って紫央里は他には何も聞かず弁当をつついた。それにほっと胸を撫で下ろして、百合も食事を再開した。

結局その日は一度もみりを捕まえることはできなかったため、百合は朝よりも更に重い足取りで帰った。今日は彰との約束の日。制服

で彼の家に行くのは危ない。できる限り大人に見えるような服を選んで、鏡を覗いた。

「……………あ、そうだ！」

彼女は慌ててポーチを探り、思い付いたことを実行した。

「やっぱりまだ来てないよな」

珍しく仕事が早く終わった彰は既に自宅にたどり着いていた。せっかくだからと自ら食事の用意をする。学生の頃から一人暮らしをしていることだけあり、慣れた手つきで野菜を切る。

そんな時、チャイムが響いた。百合が来たのだと思い、確認もせず慌てて扉を開ける。

「よ！　元気か？」

そこにいたのは百合ではなく彰よりも少し背が高い男だった。軽い茶色をした髪と整った顔を持つ彼は軽く笑っている。しかし、それに対照的に彰の顔は見る見る青くなっていく。

「な、何で！」

「まあまあ、そんなことより上がるぞ」

勝手に来て勝手に上がり込む彼に彰は慌てる。

「何いきなり来てんだよ！」

「いいじゃん、別に。何？見られたくないもんでもあるの？」

百合と鉢合わせすることを恐れているのだが、他にもあまりこの人物といたくないという理由もあり、彰はきっぱりと言った。

「お前に上がってほしくない！」

「つれないなあ、まったく。じゃあ、外で話でもするか？」

肩を竦めて彼はまた靴を履いた。しかし、彰は話す気は全くないらしく、玄関で彼が出て行くのをじっと見ていた。

息をついて仕方なく扉を開ける。すると睨んでいた彰は突然目を見開いてその先を見つめた。

つられて彼もそちらに目を向けるとそこには二十歳くらいの女性が戸惑いながら二人を交互に見つめていた。

「え！ 何？ もしかして彰の彼女？」

思わぬ収獲にテンションが上がる彼に彼女は微笑して口を開いた。

「はい、私は彰の彼女の時ゆりえです」

後悔と訪問（後書き）

申し訳ございません。

昨日……すっかり忘れてました（汗）遅れながらも投稿しました！

兄と秘密

年齢は二十歳前後、綺麗にされた化粧と淡く浮かべる笑みは高校生等では出せない大人の空気を醸し出している。茫然とする彰に気付かず、彼は妙にテンションを上げて彼女に詰め寄る。

「へえ、美人。時ちゃんかあ、今何してんの？」

「あ、まだ大学で…、私も教師の免許が取りたくて。彰さんとは研修の時お世話になったんです。あの、貴方は？」

「あ、悪い悪い。俺、彰の兄の章。よろしくな」

にっこりと笑う彼には邪気もなく、疑いもかけられてもいないようなので、彼女は素直に笑い返して握手した。ふと、未だに惚けている彰に視線を送る。

淡い茶色の髪を肩に垂らし、膝まであるスカートを上手く着こなす大人の女性。大学生とは思えないくらい落ち着いた彼女。彰には何も覚えがない。

なくて、当たり前なのだ。彼女は大学生でもなく、大人でもない。まだ、高校も卒業していない少女なのだから。

「百合……………」

「何そんな顔してるの？ 彰。今日約束してたじゃん」

「あ、だから焦ったのか。しょうがねーな、今日は本当に帰ってやるよ。じゃあ、時さん。こいつのことよろしくな」

「はい」

章の姿を最後まで見送り、百合はゆっくりと扉を閉めた。そしてちゃんと鍵をかけて上がり込む。まだぼかんとしている彰を放って置き、窓のカーテンを閉めて安堵の溜め息をついた。

「な、何その格好」

「何って、変装。大体、毎回毎回私服だったとしても素顔で行ったらバレるのは時間の問題だろ？ だから、カラスプレーで髪の色変えて、わざわざ大人っぽい格好で来たんじゃないか」

そう、わざわざ自ら自分の姿を変えて彰の家に訪れた。そして、それが早速役にたったわけだ。いくら学校の者でなくても、彰が高校生に手を出しているなどとバレたらどうなるかわからない。念には念を入れなくては。

「は、はは！ すげーなお前。よくそこまでできるよな」

「できるよ。だって、どんなことしても、彰と一緒にいたいんだもん」

穏やかな笑み。けれど心臓は驚くほど早く動いていて、それが彼女のその表情に艶をつける。

見た目だけではなく、少しずつ百合は大人の女になっている。その度に胸が苦しくなる。我慢、できなくなる。

彰は思わず彼女を抱き締めた。強く、強く。胸がいっぱいで、感情を言葉にできない代わりに。長く、口付ける。

「……………っ、ん——」

きつく目をつむり、百合はそれを受け入れる。

薄目を開けて間近にある彼女の顔を見つめる彰は、ふるふると震える彼女のまつげに頬を緩ませた。

ファンデーションの白さや唇の艶、軽くついたマスカラ、彼女らしい控え目のピンクのアイシャドー。どれも今までの百合とは思えない大人の魅力。けれど、慣れないこのキスですぐに年相応の反応をする。

「ありがとう」

「……………キス、長いよ」

すっかり顔を赤くして百合は彰を睨んだ。それに苦笑を返して、途中だった食事の用意をするために台所に向かう。百合もその後についていき、手伝うために鍋を出した。

「えっと、さっきの章さんで何でここに来てたの？」

「さあな、知らない。何で？」

「いや、だって」

彰の家族の話なんて、聞いたことないから……。

意外にも冷たい返答にこの会話はタブーなのだと気付いた。けれど、彰のことは少しでも知りたい百合は聞きたくて仕方ない。

……やめよ。私も聞かれたくないことあるし。

今、みりとのことは彰に言う訳にはいかないと、百合は自分に言い聞かせている。これは、人に容易に話していいものではないと。話せば、本当にみりのことを裏切ることになってしまう。

みりちゃんにも、私秘密ある。
何だか、心苦しいな。

何もできなく、何も話せない自分が情けなくて、百合は一つ溜め息をついた。

気遣いと行動

「え?」

「だから、クリスマス。どうしたい?」

予想もしなかった言葉に百合はドキドキだった。教師と生徒。その関係である以上出かけることは容易ではない。しかし、こう聞ってくる以上、それを願ってもいいのだろうか。

「あ、でも……」

「大丈夫、変装しなくてもいいような場所に行けばいいんだから」

心配していたことを答えてくれて、百合は一気に笑顔になる。考えてみれば百合とは外に出かけたことがほとんどない。夏祭りくらいだ。しかもそれも変装をして。

少しは甘えさせてやらないとな。

「何処行きたい?」

「えっと……ゆ、」

「ゆ？」

「遊園地」

顔を真っ赤にして彼女は言った。素直になることが少し恥ずかしいのだろう。彰も百合がそのような場所に行きたがるとは思わず、しばらくまじまじと彼女を見つめてしまった。

「わかった。じゃあ、少し遠い場所に行こうか。車で」

「あ、うん！　楽しみ」

本当に嬉しそうに笑う彼女に彰はやっと素直に喜んだ。先ほどまでは微かだがまだ章へのわだかまりが残っていたのだ。

百合は食器を片付けてテーブルを拭く。その時片隅に普段は使わないパソコンが置かれていることに気付く。

「あ、でも彰。丁度忙しい時期が過ぎたばかりの時期なのに大丈夫？」

「そのくらい平気。それに、いい休暇になるよ」

「…………何ならその日まで来るのやめようか？」

彼の身体の心配をして言った言葉は逆に彰の表情を曇らせる。それ

に気付いていない百合は既にそうするき満々で内心溜め息をついていた。

「あいな、百合」

「ん？」

「気を遣ってくるのは非常に嬉しいけど、それでも今会えるの日が少ないのにこれ以上減らすと逆に辛い」

率直な感想に百合は目を見開く。喜んでいいシーンだったが、驚きの方が勝ったためぽかんとした表情をしている。

「だって、俺だって百合と同じように思ってるんだから、会いたい
に決まってる」

「そうなの？」

そう、なんだ。

あれ……そうだ、じゃあ。

「そっか！ そうだよね！ ありがとう、彰」

「何か妙な喜び方だな……。そろそろ送るよ」

彰に促されて百合は車に乗る。家はあまり遠くないが、最近をよく家まで送ってくれるようになったのだ。暗い道を見つめながら百合は小さく呟いた。

「ねえ、彰。お願いがあるんだ」

「ん？」

「あのね…」

静かに、その願いを紡ぐ。そして、家の前に着いて百合はじつと彰を見つめる。

「ごめんね、ありがとう」

百合の願いを快く受け入れてくれた彰に感謝して、ゆっくりと顔を近付ける。ほんの一瞬、口付けを交わして慌てて車から降りた。

「ゆっくり寝ろよ」

「うん。ちゃんと、ケリがついたら全部話すから。それまで何も聞かないでいて。あと、あらかじめ言っとくね。ごめん！」

「何か、変なこと考えてないか？」

「…………変なことではないけど、あまり頭のいい行動ではないことは確かかな？」

苦笑して百合は肩を竦めた。しかし、その顔はすっきりとしていて、少し不安を感じるものの、彼女にとって一番確実な方法なのだろう。彰はそれ以上何も聞くことはなく、ただ頑張れよ、と軽く呟いた。

「じゃあ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

消えていく車を最後まで見送り、百合はすぐに携帯を取り出してボタンを押し始めた。

「何だ。まだ来てないじゃん」

土曜日のお昼。彼女は呼ばれてある公園に来ていた。がらんとしたその場所に溜め息をついてブランコに座る。

「こんにちわ」

聞き慣れない声に顔を上げるとそこには微かに見覚えがある女性が
佇んでいた。

過去と真実

私はこの人を知っている。

優しく微笑むその顔。落ち着いた服。綺麗な声。どれもが大人の女性をまとう彼女。その人をみりは会った覚えがある。

「浴衣……美人の、えっと先生の従兄弟さん！」

「そう、覚えててくれたの」

「こんなとこで何してるんですか？」

あまり人が来るような場所ではない。みりは人と待ち合わせしていたから来たが、夕方にこんな場所を用もないのに来るのは珍しい。彼女はにっこりと優しい笑みを浮かべる。

「ちょっと、みいちゃんに話を聞いてもらいたくて」

「え、な……んで、私の名前」

驚愕で声が上手く出てこなかった。その顔に彼女は苦笑して、目を伏せる。とても苦しそうに眉を寄せた。

「ずっと隠しててごめんなさい。でも、もう隠さないから」

「…………ゆ、りちゃん？」

決意した百合は、もう迷いない顔でみりを見据えていた。

「私は、もう…………彰と付き合ってるの」

誰にも知られてはいけない秘密の関係。それが、百合にとって最後の切り札だった。

冷たい風が首を通る。緊張で指が上手く動かなかった。

「何を、今更。それで、何？ 話すから信じろって？ ふざけないでよ！」

「信じてなんて言わない。ただ、聞いてほしいだけ」

「…………っ」

みりにとってはそれは意外な言葉だったのか、大きく目を見開いて口を閉ざした。百合はまっすぐに彼女を見つめたまま独り言のように話し始める。

「これはね、彰にも言っていない。私の本音」

静かに、本に書かれていることを読み上げるかのように話し始めた。

一年の時。私はそれでも優等生を演じてきた。教師を敵に回すのも面倒だし、下手に同学年の人が近付いてくるのを防ぎたかったものもある。

面倒なことが嫌いだった。だけど、面倒なことに何故か不良はよく私をターゲットにした。最初は何とか逃げ切ってた。

だけど……。

「日直なんて、面倒だな」

順番に回ってきた当番。何も思い付かない言葉。窓の外を見ると楽しそうに遊ぶ人達。それを羨ましながら思わなかった。

それが、どんなものなのかわからなかったから。

何とか日誌を書き終えて職員室に向かった私は扉を開ける時、先生達の会話を聞いてしまった。

「時条さんは確かに成績は優秀ですね」

「だけど、あれは何を考えているかわからないからなあ」

ただ、それだけ。わかってる。それは、自分が招いたこと。自分が
そう見られるよう徹してきた。

だけど、何か苦しくて、何かムカついて、私は日誌を忘れたふりを
して学校を出た。

一人になりたかった。無意味に走って、空気がなくなるまで走って、
何も考えなくてもいい時間が欲しかった。

だけど、不良はそれかれらをさせてくれなかった。

「金、くれない？」

どろどろした世界。

きたない。

きたない、自分の心。

苦しくて、ムカついて、見たくなくて、何もかも面倒で。

気がついたら逃げることもしないで彼等を殴り倒してた。空虚な自
分に涙も出なかった。

「時条。お前昨日日誌出すの忘れただろ……って、何だその傷は
！」

「もしかして誰かに襲われたの？」

「…………喧嘩しただけです。これ、日誌…………」

「なっ！ 何を考えてるの！」

ウザい。うるさい。近寄るなよ。

何を考えてる？ 何を望んでる？ 何が大切？

そんなこと、あの時の私にはわからなかった。ただ、もう教師の言いなりになるのも面倒で、私は口だけは反抗するようになった。それらは少しずつエスカレートして、髪は金になり、服は次第に崩れた。

苦しくて、苛ついて、何をしたいかなんて一向にわからないから、更にムカついて。

だけど、どんなに嫌になっても、何故か学校には行こうとしていたんだ。

過去と真実（後書き）

また……。三連休とか曜日を忘れてしまいます。申し訳ありません（汗）

大事と狂い

「本格的に反抗したのは二年に上がってからだけどね。だから、彰のことも知らなかった。でも、二年に上がってから家が出る時間は変わらなかったんだよ」

じつと空に浮かぶ白い月を見上げながら百合は言葉を繋いでいく。あの時のことを大切な思い出かのように。みりはそれを止めることもなく静かに聞いていた。その表情は心なしか辛そうだ。

「だけど、髪の色とかを変えたせいとか、普通ならそんな時間にいはいはずの不良に絡まれるようになって、学校着くのは大体夕方。昼間に着く方が少なかった。もう、面倒になって家に帰っちゃう。すごく、意味ない日々……でもね、そんな時にあいつに会った」

ぱつと振り返って百合は笑う。何も苦勞がなさそうな、軽く、柔らかい笑み。眩しくて目を細めて、みりはすぐに彰のことだとわかる。

「彰は不思議だった。空虚な私の中、ずかずかと入って……居心地が悪い、と思いたかった。だって、あんなの知らなかったから。あんなに温かいもの、他人で触れたことなかった」

他人という単語にみりは反応する。一度だけわざとらしく視線を背

けたが、百合は気にする様子もなく口元を緩ませた。

「先生とか、他人とか、誰も信じられなかった。そのはずなのに……いつの間にか、あいつだけには心を開きかけてた。そして、あいつのおかげで大事なものが増えたんだ」

「大事な……もの？」

「みいちゃんとしおちゃんだよ」

はつきりとした口調と子供っぽい笑顔、そして細められた目はその言葉が偽りではないことがわかる。引き込まれるかのように、純粋な表情。

みりはその顔を素直に可愛いと思った。

「私ね、すごい嬉しかった。みいちゃんが私に話しかけてくれたこと。二年に上がってから、更に孤立した存在になっていたから、誰も私に話しかける人はいなかったの。私は、彰を許した後でも、それでいいとまだ思ってた。それが私、結局は誰も好きにはならない。彰は物好きだっただけって……」

一歩、みりの方に歩み寄る。

「みいちゃんは、私の人生を変えてくれた。近付いて、話しかけて、相談に乗ってくれて……私の存在を示してくれた。すごく嬉しかった」

た」

「そんなの、しおもやってることじゃん」

思わず出た否定の言葉に百合はやつくりと首を振った。

「みいちゃんが私に近寄らなかったら、しおちゃんも私の所には来なかった。それは、みいちゃんが一番わかってることでしょ？ しおちゃんのこと、理解してるから友達になった」

「何が、言いたいのか？」

次第に理解ができなくなり、みりは眉を寄せる。百合はもう一步、彼女に近付いて小さく息を吐いた。懸命に言葉を選んで、少しずつ言葉にしていく。それは思ったよりも疲れるものだった。

「気がついたのは最近。保健室に行った日、みいちゃんが助けも求めずにその場に立ち尽くしてたよね。私、あの状況知ってた。みいちゃんの行動は、もう一度仲間外れにされるのを恐れる人の顔だった。だから、反論もできないし、助けも求められない。私にはわかった。だから、はっきりああ言った。裏切らない、側にいるって気持ちを含めて」

「うそ……だって」

「その後気付いた。みいちゃんがしおちゃんと友達になった訳。し

おちゃんが、誰かと深く関わらない代わりにその人が望むことをしてくれるからでしょ？」

みりは大きく息を吸う。肩を上下させて何かを必死に堪えた。百合はそれをただ黙って見つめて更に言葉を繋ぐ。

「みいちゃんは一人だった。だから、一人である私に思わず声をかけた」

暗黙の関係

同情

どれもが、本物ではなくて、だから…。
歯車が狂い出す。

同情と親友

近付いてきた百合から逃れるようにみりは数歩後ろに下がる。明らかな拒絶と肯定。顔を伏せて肩を震わせて笑い出す。

「何だ、わかってたんだ。そうだよ、同情で近付いた。本当はしお以外に友達なんて作るつもりなかった！ 仲いい奴なんて作っていつかは裏切るだけだし！ それに友達面して踏み込んでほしくない所まですかずか入って来られるのも嫌だった！ だけど、あんたが嫌なくらい昔の私に似てたから思わず声かけちゃった」

堰を切ったようにみりはぺらぺらと話し出す。まるで今までの鬱憤を百合にぶつけるように、乱暴に。

「家が少しばかり金持ちだからって私をカモにする！ そんな奴等が嫌いだった。前はそんな奴等にすぎるしかなかった！ だから、しおを見つけた時嬉しかった。あいつは心からの友達にならない代わりに私の望む人間になってくれる。だから、クラスが違ってても私の所に来てくれる！ 一番近くて遠い存在だから、安心できた。それでよかったのにつ！」

いつの間にか彼女の目には涙が溜まっていた。音も立てずにそれは地面に染みを作っていく。更に甲高い声になってみりは百合を精一杯睨み付けた。

「あんたなんか声かけなきゃよかった！そしたら、またこんな気持ち持たなくて済んだのに！裏切られる気持ち、味合わなくて済んだのに！」

「私は裏切ってない！」

「嘘！だって一緒にいたじゃん！真司と、お茶してたじゃん！」

「――神谷さんはみいちゃんのこと知りたかったんだよ！」

負けないよう、彼女に届くよう、大きく叫んだその言葉はみりの口を止めさせた。その隙に百合は迷わず早口で訴える。

「神谷さんはみいちゃんのこと知りたくて…だから、私に相談に来た。それだけだよ！私もみいちゃんのために何かしたかった。だけど、やり方を間違ったよね………」

一歩近寄る。

一歩離れる。

百合は進んでみりは下がる。

「ありがとう」

「―――！」

「同情でもよかった。それで私は救われたから。それで私には大切なものが増えた。ねえ、みいちゃん……、私達ら皆不器用で、だからちゃんと自分の気持ちすら表すことができなかった」

また一步近寄る。

一步離れる。

繰り返して繰り返して、最後はみりは後ろにあったベンチに膝を捕らわれて座る。

「みいちゃんは一つだけ理解してないことがあるよ」

「え？」

「しおちゃんはもう、みいちゃんと一番の親友だってこと」

一步、二步、二人の距離は縮まって、同時に彼女の余裕もなくなる。百合の言葉は的確に彼女を追い詰めて、混乱させる。

「何、言ってるの？ 私とあいつはそういった関係にならないことを暗黙で……」

「大切な人を作るのが怖かったのに、どうして神谷さんと付き合ったの？」

「――っ」

「もう、わかってるんだよね？ 気持ちは、知らぬ間に咲いてるんだよ」

儂い笑みを作った百合の後ろから微かに気配を感じてみりは目を凝らした。力なく近寄ってくるのは紛れもなく紫央里の姿だった。

深く関わるはずのない彼女。だから、紫央里の連絡には安心して応じた。彼女ならみりの気持ちを汲んで百合関係の会話を持ち込まないと思っていたから。

みりはとっくに理解していたのだ。みりに呼ばれて来た場所に百合が来た時点で。

紫央里の気持ちにも、変化がきていると。

「みい………」

「な、んで。何で皆で私を追い詰めるの！ 何で！」

訳がわからずみりは叫び出す。一体何が本当に、何を信じていいのか。

偽りの友情。

信頼と裏切り。

だけど、本物の友情。

裏切りではなく誠意。

起こったこと、見たこと、聞いたこと。全てが信じていたことを覆して。

「もう、やめてよ！ もう、近寄らないで！ もう、いいよ！ 友

達も関係も何もいない！ 一人でいい！」

「みい！」

「これ以上関わるならあんたと先生の関係も学校にばらしてやる！」

泣きじゃくる彼女は既に自分が何を言っているのか理解できていなかった。

大好きと特別

不安そうに紫央里は百合を見つめている。みりは必死に警戒しながら彼女を見やる。

ばらす、それは百合にとって一番の恐怖で、一番の苦痛。だから、みりは勝利を確信して心なしかほっとしていた。

「ばらさないで」

案の定、百合は思った通りの反応を試みりは完全に緊張を解いた。もう、友達というもので悩まなくなかった。もう、考えたくもなかった。

「だけど、無理だよ。ほっとくことなんか、できない」

「なっ！」

「だって、好きなんだもん！ 彰もみいちゃんもしおちゃんも！」

全部！ 大好きなんだもん！」

余裕のない声で百合は叫ぶ。無くしたくない存在。失いたくない関係。それが、今日の前にある。

「彰も、みいちゃんも、しおちゃんも、皆…私にとって大事な人で、

かけがえのない存在。だから、失いたくない！」

一つでもなくなれば、絵は完成しない。彼女の思い描くパズルに当てはまるものをまた見つけた。だから、それをなくす訳にはいかない。

「好きだから、知りたくもなるし、好きだから、一緒にいたい。ウザイ時もある、嫌な時もあるかもだけど、でも！それでもいたいから……」

百合は思い切りみりを抱き締めた。温かい彼女の体温に、みりは思わず目を見開く。

「なに、言ってるの？　はな、して」

もがくみを覆うように、薄い影がかかる。顔を上げればそこには紫央里が立っていた。

「ごめん、みい。どうしても、放っておけなかった」

「何で？」

「だって、あまりにも、近くに居過ぎたから。身内よりも、身近にいたから」

学校は半日いる学生の生活場。その中の三分の一は友達と過ごす他愛ない時間。

更に二人は休日もほとんどいた。それがみりが求めた願いでもあるから。

結果、心の底は見せずとも、二人は一番身近で、一番わかりあった存在になった。

「私は、人に本気になるのが怖かった。上辺だけの生活にあまりにも慣れちゃったから。だけど、あの時、みいの噂を聞いた時：助けたいって思った。もちろん、行動なんてできなかった。そんなの、今更変えれはしなかった」

「当たり前でしょ！ 私達は友達であって、友達じゃない！」

「だけど、もう二人じゃないことに気付いたの。私にはみいだけじゃなくて、百合ちゃんがいた。だから、彼女がどんな行動を取るのか試したかった。だから、噂のことを知ってもらおうとした…」

「でも、私は結局それを聞かずにあの事件が起こった」

抱き締めているみりの身体が微かに震える。百合は目をつぶって、溢れる涙をそのまま流した。

「百合ちゃんが知らないでその状況に陥れば、私とみいの関係も変わってしまう。それは嫌だった！ 怖かった！ だから、焦った。」

だけど、結局間に合わなくて、しかも予想とは違う事態が起きた」

「違う？」

「百合ちゃんが、私達を見捨てなかったことだよ。私、びっくりしたと同時に嬉しかった。これで、私も素直になれるって」

「…………、素直に？」

訝るみに怯むことなく紫央里は見つめる。

友達であって、友達じゃない関係。同情で、心を許さない相手。始まりがそんなだった。だから、歯車が狂う。

「始めがいけなかった。だけど、その関係があったから、私は気付いた」

「私は、みいと百合ちゃんとなら特別な関係になりたいって」

今までで一番彼女は身体を震わせる。ぽたぽたと涙が落ちる音が微かに百合の耳に届いた。

少しだけ抱き締める力を強めて百合は更に涙を流す。

「何、それ。今ごろ…困るし」

か細い声でみりは言った。だけど、その言葉とは逆に彼女は百合の身体をきつく、締める。

「そんなこと、言われたら………求めたくなる」

咲いてと羨み

裏切られるのを恐れて友達を作らなかったのみり。

本気になって、自分を捨てて接したことのない紫央里。

いつも、友達を作れずに一人でいた百合。

どれも自分から近寄らない理由があり、確かめることもできなかった。

だから、わからないまま今までいた。わからないまま逃げてきた。それに気付いて、それが素直に嫌だと気付いたのが、百合だった。

「気持ちには、知らぬ間に………咲いてるか」

みりは苦笑して呟く。百合の身体を徐々に放して、顔を伏せたまま息をついた。

同じく彼女から腕を放す百合はそれでもみりの顔から視線を外さない。

「本当、百合ちゃんは一人だったくせに、何でそんなに目敏いかな」

「多分、近いから」

「うん、そうだね。………本当はわかってたんだと思う。自分の気持ち」

諦めたように呟いてみりは顔を上げる。涙でぐちゃぐちゃになった

顔はそれでもちゃんとした形になって、彼女の心情の変化を表している。

ただ、逃げていた。それを認めることが簡単ようで難しい。悟っているのではなく、理解しているのではなく、ただそうである自分を知るのが怖くて、自然と逃げていた。それは彼女だけではない。紫央里も百合も誰にでも言えること。

「あのね、確かに百合ちゃんに話しかけたのは同情からだった」

言いにくそうに切り出す。百合はそれを表情を変えずに黙って聞いた。

「でもね、本当は百合ちゃんが羨ましかった」

「え？」

「一人でいて、先生に齒向かって、不良に絡まれて……。私とは似ているけど全く違う境遇で、ある意味で私より辛い状況なのに……。それなのに人を愛することを諦めなかった。人を憎もうとはしなかったから！」

立ち上がると共に百合の両腕を掴む。眉を寄せて哀願を向けるみりは必死に言葉を繋いだ。

「百合ちゃんは一年の時と全く変わってなかった！ 変わらなかった

た！ 二度も、私のこと助けて……二度も自分だけ責任取って消えた！」

一度は二年の一学期。

もう一度はもっと前。二人は出会っていた。それは一年の冬。

「それじゃ、失礼します」

日誌を届けたみりが紫央里が待っている下駄箱に急いでいる時だった。同じように日誌を届けようとした百合と丁度すれ違った。しかし、よけ方が少なく、互いに肩をぶつける。

ガシャン――

ぶつかってよろけた百合は端に飾られていた花を花瓶ごと倒して割ってしまったのだ。蒼白してみりは近付いた。

「ごめんなさい！ 大丈夫？」

「……………」

茫然と割れた花瓶を見つめている百合に更に不安になった。今ので怒らせたのではないかと。紫央里以外に接点がない彼女は他の人の反応に過敏になっていた。

「どうしたの？」

割れ音を聞いて中にいた先生が様子を伺いにきた。みりは怒っているのかと思い、思わず謝ろうと口を開いた。

「あの、すみま」

「すみません、先生。少し具合が悪くてよろけたら……花瓶が」

そんな彼女の言葉を遮り、百合は口を押さえて答えた。その言葉に何の疑いもせず先生は対応する。

「そう、仕方ないわね。じゃあ、早く帰りなさい。天上さん、途中でまで一緒にいってあげて。ここは先生が片付けるから」

「あ、はい」

みりは歩き出した百合の横に並び、彼女の様子を窺う。先生には姿も声も確認できない場所に来ると百合は突然何でもない表情に戻し

てみりに笑いかける。

「もう大丈夫。あれ嘘だから。ごめんね、付き合わせて」

にっこりと笑って百合は一人で下駄箱に向かう。みりとはちゃんと話しめせずに。

「いつもそう、他人と距離置いてるのに他人のために自分を犠牲にする！ その後不良になったって聞いたけど、何となく気になってた！ 教師に反抗して、金髪になって………だけど、それでも百合ちゃんは私を助けてくれた！ 変らなかった！ それが、羨ましくて………そしたら声かけてた」

肩を震わせてみりは顔を伏せた。

「まっすぐに、純粋で、素直で、優しくて………百合ちゃんなら裏切らない。百合ちゃんならなれるの思ったの」

「本当の友達に——っ！」

親友と謝罪

「みいちゃんは本気になるのが怖かったんだね。そしてしおちゃん
は本気になることを知らなかった。そして、私は…本気になる相手
がいなかった」

泣きじゃくるみりの肩を優しく抱いて百合は小さく呟いていく。既
に一時間もこの場所にいます。すっかり身体は冷えきって、少しだけ
震えてもいた。

「だから、やり直そ。ちゃんと、本気の友達として。嫌なことがあ
るなら言い合って、いいところがあっても言い合って…。友達だから
互いに譲り合うことも必要だけど、友達だから本気で言い合うのも
必要だと思う」

「だから……もう、私と百合ちゃんとみいは、友達だって」

百合の言葉を引き継いで紫央里が締めた。

確かに言いたいことを言った。思っていることを。綺麗事でも偽り
でもない本音を今まさに吐き出し合った。これが、本当の友達。

「友達？ 冗談……私達は……」

百合の腕から離れて涙を拭う。赤くなった目をそのまま二人に向け

てみりは軽く笑んだ。

「これじゃあ、親友だよ」

顔をくしゃくしゃにして彼女は破顔する。勢いよく二人に抱き付いてまた涙を流した。これには対応していなかった百合と紫央里はそのまま尻餅をつく。

やっと繋がった三人の心。

やっと友となった。

それが嬉しくて二人は尻の痛みなど気にしない。

「ごめん、百合ちゃん……ごめん、しお」

「ううん、私こそごめんね」

「これでやっと友達になれた」

長い間隔に追いやられていた本気になる気持ち。それがやっと表に出た。

だけど、それは全員がお互いに希望を持っていなかったこと。

全員がお互いを想っていないとできなかったこと。

「もう、一人にはならない」

「一人になんてさせない」

「親友、だもんね」

全員が同じくらい涙でくしゃくしゃになっていた。それを合わせて、思わず苦笑する。

「にしても、百合ちゃんが既に財津先生の物だとは……」

「夏祭りの時には付き合ってたの？」

「え、あ…違うの。付き合ったのは、」

「文化祭の後だよ」

溜め息混じりの声に三人同時にその方へと顔を向ける。声からして大体の想像はしていたが、やはりそこには彰が立っていた。みりも紫央里もこういう反応を示していいかわからず、硬直する。

「全く、ごめんってこういうこと？」

「うん。そう……。あ、神谷さんは？」

「ちゃんというよ、後ろに」

さり気なく百合の腰を抱き寄せながら会話に対応する。その言葉通り彰の影からおずおずと真司が姿を表した。

「みり……」

「真司、どうして？」

まさかこんな所で会えるとは思わなかった彼女は驚きを隠せない。しかし、そんなことお構いなしに彼は突然走り始める。勢いよく彼女を抱き締めた。

「え！ し、真司？」

「ごめん！ みり、君は心配してくれてただけなんだね！」

困ったように周囲を見渡すと百合は苦笑して頷いた。

「みいちゃん、大切な人と一緒にいるには、内緒にすることも大事だけど、逆に打ち明けることも、必要だよ」

友達でも、恋人でも、それは変わらない。どちらでも他人で、どち

らも原理は一緒なのだ。

大事にしたいなら、その意思を相手に伝えなきゃいけない。

「うん、そうだね」

「……………時条さん」

真司は一度彼女から離れて百合をまっすぐに見つめた。それを不思議そうに見つめ返す。すると、彼はゆっくりと軽く頭を下げた。

「ありがとうございます」

「え、あ、いいですよ！ 気にしないで下さい！」

この行動には流石に驚き、彼女は慌てる。思わず吹き出して、彰と紫央里は笑い出した。それにつられるようにみりも、真司も、そして百合も笑った。そして、長い…長い夜は終わりを告げた。

心と友

「ごめんね、みり」

あの後、皆と別れたみりと真司はまだその公園にいた。真司は慌てて頭を下げて謝る。突然のそれに彼女は多少驚きながらもやんわりと首を振った。

「ううん、私こそごめん」

「僕、わかってなかった。みりが来なくていいって、無理するなっ
てことだったんだね。財津さんと話してやっとわかったよ」

「あ、そうだ！ どうして財津先生と？」

彼は彰と共に現れた。接点がない二人が一緒なのはおかしい。けれど真司は苦笑して説明する。

「時条さんが、紹介してくれたんだ。みりのことを知るには、同じ
状況の人と話すべきだって。あと、もう自分が協力はできないから
って電話で」

真司がみりへの思いに気付くには彼女と同じ立場に話をすることが
一番の近道。

けれど、それではどう考えて、どう気付けばいいのか結局はわからない。それならば、彼と同じ状況の人と話をすれば、少しはどう考えを巡らせればいいかわかるかもしれない。そう彼女は考えた。

「そっか。悪いことしたな、百合ちゃんには」

「そうだね。だけど、みり……いい友達できたな」

「うん」

久しぶりに二人は心地よい空気に、穏やかな会話を交わしたのだった。

一方、百合はというと居心地悪そうに彰の自宅へ連行されていた。ぐしゃぐしゃになったメイクだけ落とさせてもらい今、すっぴんで彰の前を座っている。

「まあったく、何考えてんだか」

「ごめん、だから……先に謝っただろ」

「はあ……まあいいけど。次からは少し落ち着いて行動しろよ」

何だかんだと彼は許してくれる。それが嬉しくて百合は表情を緩ませた。

「あ、そうだ。クリスマスは俺が変装してやるよ!」

「え! やだよ、普通にいてよ!」

「なあんで。昔の族スタイルで」

それはそれで見てみたい気もするけど……。

「とにかく普通にかつこよくデートしたいんだってば!」

「じゃあ、アンパンマン」

「なお悪いわ!」

一体彼のカッコいい基準というのはどういったものなのか疑いたくなってしまう。しかもどうアンパンマンに変装する気なのだろうか。しかし、少し懐かしいこの掛け合いに百合は苦笑して、久し振りに安らかな夜を過ごした。

十二月に入り気温はますます下がる。白い息を吐きながら百合はいつもの時間にいつものペースで歩いた。すっかり不良に絡まれることがなくなり、有意義な学校生活を送っている。

考えてみれば、本当彰って何者なんだか。

彼の昔の地位はかなり強い。族というだけではなく、彰という名前だけで大抵の不良は逃げていく。実際彼女に不良の手が掛からなくなったのも彰のお陰だ。

不良活動してた時ですら彰なんて存在知らなかったのに。

「一体何者……」

「おっはよー！　百合ちゃん」

突然聞こえた声に思い切り肩を震わせて百合は振り向いた。その反応に逆に驚いて声をかけたみりも目を丸くする。

しばらく沈黙が続く。いつしかタイミングを計ったように二人同時に吹き出した。

「おはよう、みいちゃん」

「うん。っつーか驚きすぎしょ！　びっくりしたじゃん」

「あ、百合ちゃん！　みい！　おっはよー！」

今度は少し遠い所からの声に二人は呆れた顔でその主を見やる。朝だというのに無駄に元気な紫央里だ。いつの間にか彼女も次第に登校する時間が早くなっている。

「やあっと三人そろったね」

「うん、お騒がせしました」

「あはは！　でも、このお陰で私はやっと心からの友達ができたから…」

「心から……」

百合の言葉に紫央里は少し考えて、みりに視線を送る。何を言いたいのか彼女は理解したらしく、今度は百合に。流石に理解できず、二人を交互に見つめた。

「心の」

「友達で」

「心友だね」

綺麗なハモりで百合は微笑む。二人の手を握り、冷えた空気の中、暖かい手の温もりを感じながら、学校に向かったのだった。

心と友（後書き）

はい、というわけで第三幕終了しました。次から最終幕に入ります。いつもならここで予告ですが、全部できていない上に一応お楽しみ(?)という事で無しに致します。

次の話は来週の月曜から、同じく週三日のペースで頑張りたいと思います！

クリスマスと遊園地

色とりどりのネオン。ちらほらと降る白いもの。銀色の世界がそこには広がる。

「ホワイト…クリスマス」

冷たい空気も、触れる冷たい水滴も、今だけは…今日だけは嬉しく思う。

百合はいつもより上着を一枚多く羽織り、だけどできる限り可愛らしい服装でアパートの前に立つ。約束の時間にはまだ五分ほど早い。携帯に連絡が来てからでもよかったのだが、待ち切れずに飛び出したのだ。

「プレゼント、持った。財布も持った。携帯、ハンカチ…よし」

バックの中のものを再確認して百合はそわそわと待つ。考えてみれば付き合い始めてからの本格的なデートだ。もしかしたら初デートと言ってもいいかもしれない。

そう考えていくと百合の中でどんどん緊張が高まっていく。

「はー。何話そう……」

白い息が吐き出され、空気中に分散されていくと同時に黒い車がアパートの前に止まる。中には軽くワックスをきかせた髪型をした彰がいた。

「お待たせ、乗って？」

「あ、うん」

いつもよりも若い印象を持つ顔に不覚にも一瞬見とれていた百合は慌てて車に乗り込んだ。意識しないよう前だけを見つめて、肩に力を入れる。

「ぶっ、何緊張してんだよ、いつもの怒声はどうした？」

「い、いつも怒ってねーよ！　ばか！」

急に恥ずかしさが募り、更に顔が赤くなる。丁度赤信号でブレーキを踏んだ彰はじっと百合を見つめて、微笑した。あまりにも余裕で、柔らかいそれに彼女は目を奪われる。

「勿体ない、せっかく可愛いのに、その言葉遣いはなあ」

「う、うるさい。誰のせいだよ」

冬だというのに顔がほてり出す。彰から目を逸らして百合は窓から雪を見やる。
ちらほらと未だに降り続けるそれらは少しずつ彼女の緊張をほぐしていく。

「綺麗…」

「これからいく所はもつと綺麗だよ」

「遊園地が？」

「ああ…」

にっこりとまたあの余裕な笑み。だけど、百合はそれに微笑み返して、また雪に見とれた。

止むことのない雪。積もるそれら。とてもロマンチックで、幻想的な風景。だけど、目の前にある看板はそんな気分を吹き飛ばした。

本日、大雪のため誠に勝手ながら休業させて頂きます。

「ねえ、何か見えるんだけど」

「ごめん、百合……。予定変更だ」

「だぁ！ 楽しみにしてたのに！ ばかぁ！」

思わず力任せに肩を揺らす。そして勢いあまり、手を放した瞬間、彰は雪に埋もれてしまった。友達もいなかった百合は遊園地という場所に行く機会がほとんどなかったため、かなり楽しみにしていたのだ。それなのに、という気持ちが強く、悲しみが広がる。

「はぁ……………」

「百合、また次のデートで連れて来てやるから」

後ろから包み込むように抱き締められる。温かさに頷いて、こういう時に年の差を思い知らされる。八歳差、それは思うよりも遠い存在。

「じゃあ、車に乗って。他の所連れてってあげるから」

促されるまま車に乗り込み、また道路を走る。他に行く場所を考えていなかった百合はどこに向かっているのか検討もつかない。聞くのはタブーな気がして黙って窓の外を見やる。

「でも、どうしてそんなに遊園地がよかったの？」

「……………遊園地は、お父さんとお母さんの三人で行った思い出の場所だから」

今はいない、両親の記憶。楽しい、思い出。だけど、いないからこそ哀しい思い出もある。だから、彰と行くことで哀しみよりも楽しみの方を強めたいと思った。

「そっか。じゃあ、いつか絶対行かなきゃな」

「うん」

気遣ってくれる彼の言葉が嬉しくて、百合は密かに涙を流した。

スキーと一泊？

すっかり雪は止んで、残ったのは積もった雪。白いそれを踏みながら百合は目をみはった。

「うわっ、人いっぱい！」

「それでも少ない方じゃない？ ほら、早く履けよ、スキー板」

そう、二人が来たのはスキー場。丁度遊園地の近くにある冬限定の遊び場だ。スキーなどやったことのない百合は履くのにも滑る板にドキドキしながら足をはめた。

「百合ならすぐできる！」

「その根拠は何！ て、あわわわ！」

軽く動くだけで滑る。少し恐怖を感じて動けなくなると彼女の手を彰が優しく引いた。

「大丈夫、すぐ慣れるさ」

「本当う〜？」

何度か端にある軽い斜面で慣らしながら彰が百合に指導する。元々運動神経はいい方でもあり、飲み込みは早く、それなりに滑れるようになるのにさほど時間はかからなかった。そして、ついにゴンドラに足を伸ばした。

「ああー、緊張するう」

「大丈夫だって、思いっきりいけば」

「……………彰はさ、いつスキーなんかやったの？」

ふとした疑問を口にすれば、彼は何故か眉をひそめて口を閉ざした。珍しい反応に百合は顔を窺う。

「…そうだなあ、不良時代かな」

「そういえば彰の不良時代っていつ頃なの？」

「中学後半から高校二年かな。だから大学もちょっとギリギリだったよ」

「へえ、どうして彰は教師になろうと思ったの？」

また沈黙。次第に百合の表情も曇っていく。不良時代は彰にとってあまりいい思い出がないのだろう。その話を振ってしまったことに

今更後悔しているのだ。

「俺が教師目指したのは、ある奴が学校の先生は楽しいって言うてくれたからだよ」

「ある奴？」

「また、いつか詳しく教えるから。な」

笑って説得される。こんな風に扱われるとやはり自分が子供だと実感してしまう。もっとちゃんとしたい、そう思うようになる。

「いつか、本当に教えてよ」

「ああ、約束だ」

そして一回目の着地ポイントに到着する。上に行けば速度がゆっくりになる。そ

こを見計らって降りるのだが…。

「あれ？ 百合？」

「あああ！ 降りれない！」

降りるタイミングを見事に外した百合は一人淋しくもう一周冷たい風に身を任せたのだった。

やっと地面に足をつけた時は彰が話せないほど腹を抱えて笑っていたため、板をつけたまま蹴り上げた。

「だって……結構ベタなことするから」

「わ、悪かったな！好きでやってるわけじゃない！」

こんな寒さの中でも火照ってしまうほど彼女は顔を赤くして、先に進む。しかし、すぐにそこは坂になり、彼女を阻んだ。初めての下り。これは予想以上に恐怖を煽る。

「大丈夫、まずは斜めに滑ってみよ」

「あ、うゝ。わかった」

できる限り降りる坂を緩やかにするため、斜めに板を向ける。その後を彰はゆっくりとついていく。

そして、数十分後。

ゆっくりと滑れる人達の間を軽やかに通り抜ける者がいた。誰もが目を睜る滑りを維持し、綺麗にターンする。しかし、首だけは妙に忙しなく動き、何かを追っていた。

「たく、飛ばし過ぎだ」

彼、彰は前を走る百合に追いつくことで必死だった。あれから幾度なく坂を下り、とにかく慣れることを努めていた彼女はすっかりと自信までつけて彰よりも早く滑れるようになっていた。しかし、フォームはぎこちなかった。どうしてあれほど固い格好をしているのに早く滑れるのか、彰にもわからない。

「器用なんだか、不器用なんだか……」

そう言いながらも、彰は優しい笑みを向けて、彼女の後についていく。

「はぁ、楽しかった」

「それはよかった。ちょっと雪がまた降り始めたからそろそろ帰るか？」

既に時刻は五時を回っている。辺りは暗さを増し、客もほとんど残っていないかった。百合は異論は特になかったため、笑って頷く。更衣室に入り、レンタルしていた板を返す。最後に小さな喫茶店で身体を暖めてから二人はその場を後にした。

「……………」

「……………っ」

二人は口元を引きつらせた。これは予想にもしていなかった出来事だ。

深々と降り積もる雪はいつの間にか勢いを増し、地面を埋める。それは人の膝上まで達し、車までも埋めている。

「ねえ……どうするの？」

「……、仕方ない。百合、今晚は一緒に過ごそう」

につこりと無邪気に笑んで彰は百合を横抱きにし、来た道を引き返す。奥にあるホテルに向かって。

「え、え！ ええええええ！！」

彼女の声が木霊する。

このままとだめ

六畳程の小さな部屋。そこにしかれる二組の布団。目に毒だと百合は思った。どうしてこんな事態になったのか、わからなくなるほど混乱している。

ただ、いつの間にか部屋を取って、いつの間にか風呂に入って、既に浴衣の姿で座椅子に腰掛けているだけだった。記憶が飛ぶほどの事態は予想してなかったのだ。

「何で、こんなことに？」

いや、仕方ない。車が動かなかったんだし、部屋もここしかあいてなかったし。

そもそも私、そんなにお金持っていないし……。
だけど、だけど……。っ！

「何頭振ってんの？」

「きゃああああ！」

後ろにいた彰に全く気付いていなかった彼女は思わず叫ぶ。その声の大きさに彰はとっさに口を塞いだ。

「ばか！そんなに防音な場所じゃないんだ！他の人に迷惑だろ？」

「い、ごめんなさい」

目が合って息を止める。今、この部屋には二人っきりで、互いに風呂に入り、そして……。

こんな状況になったら誰もが考えてしまう。百合もまたそんなことを頭に浮かべてしまい、顔を赤く染める。

「あ、きら」

明らかに近付いてくる顔に百合は自然と目を閉じる。触れた唇はそのまま角度を変えて、何度も交わる。今までにない濃厚さに百合は眉を寄せる。思わず彼の服を掴み、そして彼も彼女の背中に手を回す。

「好きだよ、百合」

「う、ん」

いつもと、違う。

心臓が痛いほど高鳴る。息は上がり、全身が熱くなる。そんなこと初めてで、これから何が起こるのか考えることもできない。ただ、空気に流されそうになる。

「百合」

彼の声が甘く響く。気付けば布団も敷かれていない畳の上に彼女は寝ていた。見下ろす彰をじっと見つめる。
そしてまたキス。

「ん」

何度も、何度も、重なる唇に目まいを起こす。思考は停止して、自分に降り懸かる快樂に身を委ねてしまう。

「……………っ、あ」

突然頭がはつきりした。感じたことのない感覚に瞳を揺らす。いつの間にか彼女の胸を彰は触っていたのだ。ゆっくりと指を動かす。
突然のことに百合は恥ずかしさで身を固くする。

このまま、いいの？

頭の中で自分に問い掛ける。何がいいのか、何が悪いのか。もう、彼女にはわからない。そんなことを考えている間に彼は浴衣の襟か

ら手を滑り込ませた。

このまま、——だめ！

「あき——」

「失礼します。お食事をお運び致しました」

第三者の声に一瞬二人はフリーズした。そしてやっと現状を把握し、身体を離す。乱れた浴衣を直して荒い息を繰り返す百合に対し、彰は一つ息について襖に向かった。

「ご苦劳様です」

「こちら、二人分のお食事になります。食べ終わりましたらこちらのワゴンに置かれて、ボタンを押しといて下さい」

「わかりました」

食事を受け取り、彰はまた溜め息をつく。

あ、危なかった。

彼は彼女にあんな行為をするつもりは全くなかった。けれど、したくないわけではない。彼も男で、彼女は生徒だとしてももう十六の女性だ。

二人きりで、更にはあんな状況になれば歯止めが利かない。

ヤバいな、恋愛なんて何年もしてなかったから。

もう一度息を大きく吐いて、彰は食事を運ぶ。気恥ずかしさからか百合は目を合わせない。今だけはその行動に安堵する。

「もう八時だ。早く食べよう」

「あ、うん」

気まずい雰囲気で二人は食事にした。値段の割りには結構よい食事ではあったが、二人とも味がよくわからなかった。ただ、互いに盗み見ながら、静かに完食したのだった。

どうしよう、気まずい。

クリスマスの一晩は、まだ始まったばかり。

プレゼントと翌朝

未だ静かに降る雪を窓を通して眺める。既に食事を終えた二人は何もないこの状況に暇を感じ始めた。

先ほどの行為で気まずさを覚えたこともあり、会話が思ったよりも続かない。山奥のこんな場所では行く所もないし、時間は九時近い。

「……………あ！」

「な、何？ いきなり」

百合は突然大きな声を上げると同時に自分の鞆の中から何かを取り出した。綺麗な白い包装紙に包まれたそれはメリークリスマスと書かれている。

平たい長方形の形をしていた。それを迷うことなく彰に差し出す。

「メリークリスマス。楽しい一日をありがとう」

先ほどのぎこちなさを忘れるほど柔らかい笑顔を彼女はした。

本当……女性って何よりも成長が早くて困る。

誤魔化していた感情が表に出てきそうになり、彰はぐっと堪える。

そして同じく穏やかな笑顔で受け取った。

「ありがとう」

面と向かって渡したことが照れくさかったのか、百合はすぐに視線を外して背中を向けた。髪から覗く耳はほんのりと赤く染まっていることに思わず口元を緩ませる。

彼女の小さな肩を優しく抱き寄せると微かに震えた。彰の温もりと同時にひんやりと首元が冷たい何かと触れた。

「————っ、ひゃ」

突然生暖かい感触が首筋に入る。寄せた彼の唇が離れるとちゅ、と小さく音になる。更に追い討ちとばかりに耳元に口を寄せて囁くように…。

「メリークリスマス。君の一日をもらえてよかったよ」

瞬間、彼女の思考はショートして全身真っ赤になって倒れてしまった。もちろん彰が支えたのだが、やり過ぎたかと反省をしながら布団に寝かせる。

彼女の首元に光るそれを眺めながら彰は微笑んだ。

「年が離れていること。教師と生徒だということ。色んなことで迷惑かけるけど……」

それでも――

障子から入る柔らかい光で部屋が明るく照らされる。ぼんやりとその様子を眺めて彼女は瞬きを繰り返した。あの後、気絶したままで彼女は寝てしまったのだ。

顔を動かして時計を覗けば短針はまだ六の数字を差していた。

まだ、普通は起きないよね

隣りを見ると普段よりも緩んだ表情で彼が寝息を立てている。思わず微笑んで百合は洗面室で着替えを済ませる。

目が覚めてしまったため、もう一度寝るのは難しい。だけど、暇でもあるので百合は散歩でもしようと靴を履いて部屋から出た。一応彰が起きた時のために携帯は所持している。

窓から外を見ると一面は綺麗な銀世界だった。見たことのない光景に百合は目を丸くする。あの中を走りたいという子供染みた考えが浮かぶ。けれど、こんな時間に女が一人で雪遊びをしているのはいささか痛いものだ。

「今は……やめよ。彰が起きてきたらで」

必死に考えを打ち消して百合は購買などがある方に歩き出した。微かにだが食器などの物音が聞こえる。既に食事の準備をしているのだろう。

ちよっとした休憩所で百合は温かいコーヒーを買い、一口飲む。肌寒い身体をじんと暖める。

「まだ七時にもならないんだ」

昨日はすぐに時間がたったのに。

ふと自分の首元に違和感を覚えて触れる。そこには宝箱と鍵の飾りが付いた金色のネックレス。夜のことを思い出して微笑む。プレゼントというより、彰との思い出をつくれた記念というものができて、彼女は純粹に嬉しかった。

「今日は二人でデートなの？ 昨日から泊まりで」

突然の声に百合は硬直する。ゆっくりと顔を動かせば視界に入ったものは見覚えのある顔。顔の作りが彰とそっくりな彼。

「ね、時ゆりえさん。いや、時条百合……さんかな？」

そこに立っていたのは彰の兄である章だった。

財津家と不安

暖まった身体は一瞬にして凍り付く。目の前にいるのは紛れもなく彰の兄で、百合が変装して誤魔化した相手。

しかも、すっぴんの顔を見られただけではなく既に相手は自分の名前を知っていた。

「一体何のことだよ？ あんた、誰？」

とりあえず少しでも誤魔化すため百合は声を出した。今とは全く違う、不良時に出していた態度で。だけど、章は恐れる様子も驚く様子もなく、ただそれを笑って流した。

「時条百合十六歳。両親を中学の時失い、親戚内をたらい回しされ、最後には一人暮らし。両親が残してくれた遺産を元に何とか生活を保っている。成績は優秀だったが、一年の終わりから二年の夏にかけて遅刻欠席を繰り返す不良へと変貌……………か」

し、らべ、てる？

何を言われたのか理解ができなかった。淡々と述べられたそれが自分のこれまでの生活内容だと理解すると突然怒りが沸いて来る。

「中々すごいお嬢さんだな。俺も調べなかったら騙される所だったよ。まっさか、あいつが付き合ってる相手が生徒だなんて」

「……………一体何が言いたいのか？」

もう隠す気も失せて、震える声音で問う。瞬間、章の顔つきは一変した。声だけでも出会った時とは別人のようだったが、顔つきまで変えれば流石に百合も息を止める。

「別れてもらわないと困るんだ。財津家としてはね」

「……………？ 私は、財津家と付き合っているわけじゃない。だから、彰とも別れません」

「それがあいつの首を締めることでも？」

「……………」

返す言葉もなく彼女は固まる。強く握った手は既に血の色をなくし、白くなっている。

守るものがなかった彼女はこういう時どう対処していいのかわからない。しかも相手が彰だ。年齢差も抱えているものも全く違う。

「ま、いーけどね」

「え？」

「今は君が付き合ってくれてることが好都合だよ。これであいつを教師という職業から離せるからね」

何を言われたのか彼女は一瞬理解できなかった。ただ、何かがずんと重くのし掛かる。

教師から…………。

つまり、いなくなる？

やめちゃう？

「どうして？」

「財津家にはあいつが必要だからだ」

目線が泳ぐ。一体何を見ていいのか、何を考えればいいのか、わからなかった。

その様子に薄く笑んで章は追い討ちとばかりに口を開く。

「でも、最終的に君がいるから彰は教師をやめなきゃいけない」

「ん……………」

明るい光に彰は眉を寄せる。ぼんやりとした視界には障子が映った。見慣れぬ天井、見慣れぬ部屋。瞬時に昨日のことを思い出し身を起こした。気が付けば隣りに寝ていたはずの百合がない。時間は七時過ぎ。おそらく起きて外にでも散歩しに行っているのだろうと大体の予想を立てて着替える。しばらくして、襖が引かれる音がした。

「百合、どこ行って……………」

言いかけた言葉は止まり、彰は彼女を凝視する。一目でわかるほど顔色が悪かった。身体は震えて焦点が定まっていない。

「百合？ 大丈夫か？」

「……………あ、きら」

やっと彼女は彰の顔を確認して歩き寄る。覚束無い足取りの彼女を両手で支えて彼は彼女が何か言うまで待つ。だけど、何かを言うことはせず、百合は突然涙を流した。

それは止まることなく、静かに服に吸われていく。

「う、……………ふ」

泣く彼女を彰は黙って抱き締めるしかなかった。ただ、微かに感じる不安が、この時次第に増えていることに気にかかりながら。

わかってた。

それは付き合う前から気付いていた。

だけど……多分まだ理解していなかったんだ。

それが本当になり得ることなんだってことを…。

喧嘩と温もり

「……………」

「……………」

みりと紫央里は互いに顔を見合わせる。どうしていいのか、二人は悩んでいるのだ。クリスマスが過ぎて久し振りに会った三人だったが、百合が先ほどこらずと落ち込んでいたのだ。

「百合ちゃん？」

「ど、したの？」

恐る恐る問う。するとゆっくりと視線を二人に向けて暗いトーンで答えた。

「喧嘩した」

「「え？」」

「彰と…」

信じられない言葉にまた二人は顔を見合わせた。百合は何度目にな

るかわからない溜め息について顔を伏せる。もうその日が遠い過去のようにも思える。

「一体何で……あんなに仲良さそうだったのに」

「クリスマスに？」

紫央里の質問に微かに頷いて百合は目を細める。あの日の朝までは、幸せだった。それなのに一気に落ちた。

章に会い、現実を知り、不安になって、泣き付いて。そして…。

「一体どうしたんだよ？」

「ううん、ごめんね。急に……両親のこと思い出して」

今は、まだ言えない。

それらしいことを理由として百合は下手くそに笑った。あまり疑うほど下手な嘘ではなかったが、どこか違和感を覚えた彰は彼女の顔を自分の方に向けさせる。

「本当に？ 何か隠してない？」

意外な攻めに百合は瞳を揺らした。思わず口を開きそうになったが、必死に飲み込んで視線だけ逸らす。

「隠してるのは、お互い様じゃん」

静かに紡がれたそれは部屋に異様に響いた。何を言われたのか一瞬理解できなかった彰はそのままの状態で硬直する。百合はまた泣きそうに顔を歪ませて更に絞り出したような声で続きを言った。

「家のこと、自分のこと、全部…全部、言わずに隠してるのは彰じゃない！ なのに私だけ言わなきゃいけないなんて不公平！ だから、言えない！」

その言葉を発した後、百合は気がついたように顔を上げた。案の定彰は引きつった顔をして、黙る。傷つけた、と百合は自分を責める。言いたくないからと彼を傷つけて、だけど打ち明ければまた彼が傷つく。何を選んでも傷つくことは変わらない。

何やってんだろ、私。

その日まともに口をきくことはなく、時間が過ぎていった。

「はぁあ……………」

「ちょ、元気出してよ！好きな者同士ならよくあることだって！」

「そうそう！仕方ないよ！元々二人は仲良すぎたんじゃないかな？」

必死の慰めに百合は微笑して、頷いた。だけどやはり晴れることのないその表情に二人は顔を見合わせる。みりはちよつと躊躇いながらも隣りに近付き肩に触れる。

「あのさ、やっぱり相手が年上だと、こっちが引け目を感じる人が多いと思う」

「……………うん」

「だけどね、気にしないでいいんだよ！相手は私達の年齢を理解してるんだから、思いっきり自分らしく対応しよう？」

意外な言葉に百合はみりを見上げる。その表情は柔らかいものだが、決して冗談ではない。みりはそのまま百合の手を握って微笑む。

「私達も相手が大人だと知っていながら付き合った。だから、相手に大人の対応や意地を張らせてあげなきゃ！ 恋人だから、そういうのも許し合えないと、ね」

「……………そういう、考えもあるんだね」

思わず笑みを零して百合はみりの肩に頭を乗せた。少しだけ軽くなった心はやはり親友という強い存在が近くにいてくれるから。

「皆、大好き」

感じる温もりは彼とは違うけど、確かに温かくて、胸を満たしてくれるその存在に感謝した。

ピンポーン

家のインターホンに彰は首を回した。来ないとわかっていても期待している自分がいる。そんなことに自嘲しながらモニターで来訪者を見やった。

「何の用だ？」

「だからさあ、兄に対してその態度はないでしょう？」

モニターに映るのはやはり彼女でもなく、彼が今一番会いたくない章だった。

喧嘩と温もり（後書き）

すみません、昨日更新できず。。。。

来週は正月ということでおやすみにさせていただきます。

次回は一月五日に。では！よいお年を！

総一郎と帰宅

足を進める先はもう通い慣れたあの場所。街灯に照らされた道をゆっくりと歩む。あの時からまだ二日しかたっていない。

重い足を前に動かしながら、それでも弾む胸を誤魔化すことはできない。

「家にいるかな？」

思わず眩きを漏らした時、あまり車通りの少ない道にライトが見えた。眩しそうに目を細めてそれを見送る。通り抜ける一瞬、窓から見えた顔に彼女は目を見開く。

「彰？」

と、章さん……………？

「そ、そんなわけないよね」

不安が募る。

必死で見たものを否定して彼女は足を早めた。あとたった数分の道のりが今までにないほど遠く感じる。やっと彼のアパートに着いて、インターホンを押す。だけど、応答はない。更には部屋の明かりも

見えない。

「……………嘘」

彼女はその場所ですばらく立ち尽くした。

「今さら何の用なんだよ」

窓の外を見やりながら彰は呟く。声の低さとダルそうなその態度は明らかに嫌そうだ。章は軽く溜め息をついて、彰を見る。

「わかってるだろ？　まず、お前が教師になることを総一郎様は許してない」

だん、とドアが叩かれる。鋭い睨みが章に向けられた。が、彼は何かを言うのではなく、また窓の方に視線を戻す。

これには流石に章も驚き、目を丸くしたが、また溜め息をついて顔を前に向けた。

「あと、時条百合についてだけど」

「――っ、お前……何で」

「二十五日に会ったんだ。お前、自分で自分の道を絶ってること気付いてるか？」

にやり、と笑みを浮かべる彼に彰は今までにない青い顔をして、息を止めた。

自分のこと、居場所のこと、そして彼女のことを考えて…。

翌日、翌々日、百合は彰の元へ訪れた。だけどやはりいつも留守。

あれは……見間違いじゃない。

否定したくて、けれどできなかったそれをやっと受け入れて百合はその場を後にした。あの時とは違い、今はちゃんとした状態で道を歩く。

しばらくしてたどり着いたその場所で百合はインターホンを押す。しばらくして家の扉が開かれる。

「どうしたの？　百合ちゃん」

「力を、貸してほしいの」

いつもよりかなり真剣な眼差しにみりは黙って頷いた。

「私と彰が生きれる世界を作るために、協力して」

薄暗い和室。長いテーブルの真ん中に座る威厳ある男は入ってきた者を一瞥する。

室内のピリピリした空気は彼一人が醸し出している。それに対抗するように彰も目を細めて重い空気を放つ。

「やっと来たか。彰」

「用があんならテメーから来いよ。親父」

彼は財津総一郎。彰、章の父親であり、社長という地位でもある人だ。

彼の言葉に何の反応も見せることはなく、無表情のまま視線を上げた。何年、二人は会っていなかったのだろうか。そう思えるくらい表情は固く、空気は重い。

「…………そろそろごっこには飽きただろう？戻ってこい」

「何であんたにそんなことを決められなきゃいけないんだよ。ざけんなっ！」

ピリピリとした空気。会って早々つかみ掛かりそうになる彰の肩を押さえて、章はやんわりと言葉を発した。

「今日はもう遅いですから、また明後日にでも」

「……そうだな、明日は用事があるし。逃がすなよ、章」

「わかってますよ」

二人で部屋を出て、長い縁側の廊下を歩く。きしきしという音がこの家の歴史を物語っている。
連れて来られたのは懐かしい自分の部屋。変わらないその姿に少しだけ目を細めて拳を作った。

「またここに戻ってくるなんてな」

「今日はおとなしく寝ろよ。面倒なことはやめて、な」

過ぎ去る章の姿に目もくれず、彰は部屋の襖を締めた。できる限り、縁を絶つように。

総一郎と帰宅（後書き）

明けましておめでとうございます。

結局あまり小説を書きだめできなかった私。更新が遅れたらしくなってしまう。

朱理と彰

早朝、五時。寝室からは離れたその場所で調理の音が響く。

「今日はお客様が来られるから下準備忘れないようにね」

「はい」

おそらく責任者と思える彼女ははきはきと指示を与える。ふと脇で道具を用意している女性に目がいき、首を傾げた。

「貴方、新しい子？」

「あ、はい！ご挨拶が遅れました。かのうあかり狩野朱理と言います。これからよろしく願います」

「はあ、お互い大変ね。ここに入った子すぐにやめちゃうから、新しい子後が尽きないの」

「そんなにですか？」

「給料はいいからね。甘い気持ちで入ってすぐに嫌になっちゃうんじゃないよね。貴方はそんなことないようにね」

「あ、はい。頑張ります」

「失礼します。朝食をお持ちしました」

総一郎は既に着替えを済ましてテーブルについていた。威厳ある彼に多少躊躇しながらも朱理は用意された食事を丁寧に運ぶ。その様子をじっくりと見ながら、突然口を開いた。

「見慣れないな」

「新しく入りました狩野といいます」

「そうか」

会話はたったこれだけだった。朱理は静かに襖を閉めて、もう一つの食事を持って、廊下の奥へと歩む。

すると突き当たりに一つだけ襖が見える。そこをノックして返事を待った。

「お食事をお持ちしました」

「入ってくれ」

静かに襖を開けると総一郎とは違い、二・三個ボタンを外したシャツを着た彰が布団の上に座っていた。あまり彼の方を見ずに彼女は食事をテーブルに並べていく。

「食べ終わった頃に取りにきますので」

「……………あんた、どこかで会ったことある？」

最後の皿を持ったまま彼女は彰を見つめた。少し意外そうに目を開いて、そして優しく微笑んだ。

「覚えて下さったんですか？ 私、彰先輩と同じ高校にいたんですよ」

「えっ!？」

意外な言葉に彰は目を丸くした。確かに何処かで見た気がする。けれどそれが何処なのか見当が全くつかなかった。

朱理はまっすぐに彰に向き直って少し幼い表情を作る。

「私は結構彰先輩のこと見てましたよ。……………好き、でしたから」

「……………俺」

「あ、知ってます！ 彼女いるんでしょう？ 大丈夫です、わかつ

てますから」

慌てて彼女はお盆を抱えて立ち上がる。だが、彰は思わず彼女の手を掴んで止めた。不思議そうに首を傾げるとはつとしたように手を放した。

「ごめん、あのさ……何で好きだったの？ 俺、丁度不良時代だろ？」

「…………でも、真面目になったじゃないですか」

中学から引き続き不良の時代が続いていたあの頃。大体の人が彰を冷たい目で見ていた。それは仕方ないことだし、それでいいとまで当時の彼は思った。

「私、人を見掛けとかで判断しませんよ。あの頃の先輩は確かに怖かったけど、でもどこか…淋しそうでした」

誰にもわかるはずない。誰にも気付かれなく終わると思っていたこと。

だけど、誰か一人でもそう思ってくれる人がいるなら…と儚い夢を抱いていたあの頃。

こんなに、近くにいたんだ。

そんな人が…。

「また話せるか？」

「お昼もまた運びにきますよ。夜も。その時に少しだけ話しましょう？」

無邪気に笑う朱理が残してきた彼女の笑顔と重なる。今、何をしているのだろうか、案じながら少し冷めた料理に手をつけた。薄味の料理は少し物足りないくらい美味しく、だけど彼の淋しさをまぎらわせてはくれなかった。

「くそっ、これも違う」

運ばれた和菓子を順に口にしながら彼、総一郎はぼやく。見た目は食べるのが勿体ないほど綺麗なそれは彼にとってはまだ不完全。

「もっと斬新で…美味しい何かを」

女の子ときっかけ

「え？ 章様ですか？ 今日ちょっとした仕事で一日留守にするらしいですよ」

夜の食事をテーブルに並べながら朱理は答えた。自室にこもったままの彰は周りの状況を理解していなかった。今日入っている仕事の内容すらも知らないのだ。

「そっか…」

「……………淋しいんですか？ 彼女と会えなくて」

「はは、そうだな。微妙な空気のまま別れたからな」

並び終えた朱理はそのまま正座をして彰を見やる。それに気付いた彰は思わず見返した。静かにその時が流れる。

「……………つ、な…何？」

「あ、いえ。彰先輩はどうして教師になろうと思ったのかなって」

女性と二人きりで一緒にいたことは何度かあった。けれど、こんなに落ち着かない雰囲気を出すのは百合との間だけだった。

百合以外と、そう思ったら彰はこれ以上ないくらい心の中で慌てて、話を振った。

「俺が…教師を目指したのは、小さな女の子がきっかけだったな」

「小さな……女の子？」

昔を振り返るように目を細めて彰はゆっくりと話し始めた。

真夜中。

人が眠るその時間に彼は無意味に立つ。自分の拳を見れば血が滲むぼろぼろな手。じんじんと痛むそれが更に虚しくて、苦しかった。冷たい風が自分を追いやるように強く吹き付ける。

「何も………ない」

俺には。

親の言うことを聞くのも、何も目標もなく学校に行くのも、何もかも無意味に思えて。
彼はけれど結局何も意味のない日々を送る。

「お兄ちゃん、いつからここにいるの？」

まだ陽が昇ったばかりの時間、一晩中その場所に座り込んでいた彼に物好きにも声をかけた女の子がいた。

髪の毛の高い位置で二つに縛った彼女はきっちりとコートを着込んでいる。

「寒くないの？」

「関係ねーだろ」

冷たくあしらう。そうすれば離れていくと思って。

だけど、彼女は離れることなく逆に彼の手を取った。温かいそれに思わず目を瞠る。

「つめたあい。だめだよ、こんなに冷やしちゃ」

「な、何して」

「お兄ちゃん何かつまんなそうにしてるね。どうして？」

「聞けよ、人の話！」

少女は構わずポケットに入れといったホッカイロを彼に握らせる。じ

わじわと戻る感覚に顔をしかめた。右手に感じる痛みも同時に戻ったから。

「……………痛いのか？ 大丈夫？」

「ああ」

「でも、苦しそうだよ。そんなに、淋しいのか？」

滴った涙を必死に小さな手で拭う少女に彼は揺れる瞳を向ける。純粹で、まっすぐな存在。普通なら側にいるはずのない存在が、自分の心配をしている。

それが不思議でならなかった。知り合いでもないただの他人が、何故こんなにも親身になれるのか。

「……………あり、がと」

久し振りに感じた温もりと優しさに言ったことのないその言葉を彼女に放つ。

「それがきっかけ？」

「きっかけのきっかけかな？」

すっかり冷めた料理をやっと口に運びながら彰は答えた。

そろそろ仕事に戻らないといけないのだが、彼女が言うにはもうほとんど仕事はないから大丈夫らしい。

「久し振りに感じたものだったけど、結局俺はそのまま無意味な日々を過ごした」

「あ、彰だあ！！」

怯えながらかかってくるガラの悪い連中に彼は容赦なく殴りかかる。何十という数を気にせずにかむしやりに。

「たく、うぜえ」

倒れた人の中心で彼は息を吐く。吸っても、吐いても、生きているという実感がわからない。

ただ辛いだけで。
苦しいだけで。

「お兄ちゃん？」

聞き覚えのある声に彼は振り返る。そこにはランドセルを背負った女の子がいた。

数ヶ月ぶりの、再会。それが夕暮れ時のこの瞬間。

少女と学校

まだ綺麗なランドセルをきちんと背負って少女はじっと曇りない瞳を向ける。

一瞬で我に帰った。それからゆっくりと周囲を見やる。血だらけの手、唸りながらその場に倒れる沢山の人。こんな惨状を少女に見せてしまった。

そう、彼はこれ以上ないくらい後悔した。

「お前……………」

「ケンカ…………してるの？」

うつすらとにじみ出る恐怖の色。目を大きく見開いて震える彼女に何故か彼は言い訳の言葉を探していた。

誤解してほしくない。

そんなことを考えて、すぐに頭を振る。

これのどこが誤解？

見たまんまじゃんか。

何も言えなくなり、口を閉ざす。俯いて黙っている彼に少女はゆっくりと近付いた。

「手、ケガしてる。ひどくなってる！」

「……………え？」

「私、自分を大事にしない人嫌い！」

泣きながら訴える少女がやはり彼には理解できなかった。

何故、彼女は他人のために泣くのだろうか。

何故、さっき自分は彼女に言い訳しようとしたのだろうか。

全てが理解できなくて、訳がわからなくて、彼はただ泣く彼女を見つめていた。

「お前の、妹か？」

いつの間にか回復してた一人の男が彼女の後ろに立っていた。低い、冷たい声音に少女は思わず身体をすくませた。

「もう、この際なんだろうといーや。使えればな」

彼女の腕を乱暴に掴み、男はにやりと気味の悪い笑みを彼に向ける。

「さあ、どうす……………」

けれど、その笑みを向けるはずの相手が既に目の前にいなかった。
驚愕で一瞬動きを止めた男を彼は後ろから横へと蹴り倒した。見事
脇腹へ入った攻撃は猛烈な痛みを与えて、男を地面へと追いやった。

「大丈夫か？」

「う、うん」

座り込んだ少女を立たせてその場から離れる。じつと不思議そうに
彼を見つめて、握られた手にも視線を送る。右手よりは幾分か綺麗
なその手は以前よりも温かい。

「お兄ちゃんは恐くないね。あの人はすごく恐かった」

「……………何で俺は恐くないんだよ？」

「だって、優しいし、逆に淋しそうだし」

明るく、簡単に述べられる言葉に彼はまた瞳を揺らす。

どうして、そんなに簡単に

聞きたかった言葉を言うんだ

「そうだ！ そんなに淋しいなら先生になりなよ！」

「え？」

「私の先生ね、学校にいれば皆がいるから淋しくないんだって言ってたんだ！だからさ、ね？ それに、私お兄ちゃんが先生になったところ見てみたいし」

突拍子のない提案に彼は目が点になる。ゆっくりと息を吐いて、しやがんで彼女の目線に合わせた。

「あのさ、俺…………ケンカしてたどうしようもないお兄ちゃんだよ？」

「そういうの関係ないよ。今から頑張ればいいだけでしょ？」

さらりと彼の言葉を否定して彼女は小指を出す。無邪気に笑んで彼の小指をそこに絡ませた。

「先生になって私の勉強も見てね！ 約束」

「あ、おい！ 勝手に決めんなよ！」

「ぶー。じゃあ、せめて学校は行こうよ。楽しいよ？」

一歩彼女は彼から離れて、空を見上げた。まっすぐに曇りないそれをただ目を細めて彼は見るしかなかった。

「だってさ、学校はいろんなこと教えてくれる。嫌なことや楽しいことがそれをする事で増えるんだよ」

「嫌なこと増えたら嫌だろ」

「うん、でもさ、何が嫌で何が好きなのかわかるじゃん。それがわかって、好きなことをいっぱいやるようになって、それがいつかきつと未来の自分に繋がるんだよ！」

素敵でしょ、と彼女は笑う。考え方も、物事に対して抱く感情も全部彼女は他の人と違う。そしてそれは全部、彼の心を揺らした。

「だから、行こうよ！ ね？」

優しく握られる手。温かく小さなその手を見つめて彼は微笑んだ。

「ああ、そうだな」

少しずつ、溶かされていく心。

少女と学校（後書き）

パソコンが開けなくて、こんな時間になりました（汗）
はい、いいわけですね。

でも、決して話ができていなかったわけじゃないんです！本当です！

約束と指きり

まともに歩いたことのない道。普通なら見慣れた風景のはずなのに、彼は初めて行く時のように落ち着かない。少し重い足を進めてそれでも時間内にその場所にたどり着いた。

学校……か。

大きく、冷たいコンクリート造りの校舎を知らぬ間に睨んで、敷地内に入った。

ざわざわと辺りが騒然とする。視線の中心にすることが嫌で、だれど逃げようとは思わなかった。

約束…

約束。

今まで何を言われても気に止めなかった彼は他人の、しかも小学生の女の子との約束を必死に守ろうとしていた。

「財津！」

「お前今まで…」

「出席日数が」

数々に言われる教師の言葉をスルーして彼は自分の教室に入る。部屋
の一番隅。

廊下側の後ろ。わかりやすい席に苦笑を漏らしながら彼は座った。

見慣れない世界。

落ち着かない風景。

いるだけで気持ち悪くなるくらいそこは人が多く、居心地が悪い。

「どこが……いいんだよ」

人がいても、ヒトリなのは変わらない。

気にかける人も、気にかかる人も、誰もいないから。

泣きそうになりながらも彼はそれでもその場所から逃げ出すことなく、一日理解できない授業を受けた。

懐かしい学校のチャイムを聞きながら彼はカバンを片手に学校を後にする。

夕焼けに赤く染まりながら疲れた頭を振った。

「全く理解できねー」

だけど、理科とかはまだ楽しかったか。

「実験とかになるとやだけどな」

ペアになるものは誰とも組めない。そうなればただ一人で眺めてるしかない。彼の噂で教師もなかなか声を掛けることもない。皆の中に一人でいることは思ったよりも堪える。

「あいつはこういうのがないからあんなこと言えたんだよな」

純粹で、無邪気で、だから。
だから…

「何かムカついてきた」

イライラが膨れて、眉を寄せる。冷たい風が彼を更にみじめにさせた。ふと前からはいしゃいだ声が聞こえた。前を通る小さな存在の中から思わず彼女を探してしまう。
この淋しい世界の中で自分を知っているのが彼女だけのように、必死に。

「ちょっと近付かないでよ！」

「疫病神！」

幼さが残るまっすぐに大きな声が残酷な言葉を放っていた。思わずそちらに顔を向けるとそこには見知った人物が何かを我慢するかのような顔で立っていた。

離れていく同級生を最後まで見つめている。

「…………おい！」

彼の叫びに彼女は肩を震わせて振り返る。見たこともない泣きそうな顔をしている彼女は彼の顔に更に顔を歪ませた。何も言わずに走り出して抱き付く。

勢いのある彼女を思い切り腹で受け止めた彼は少し唸りながらも少女の頭を撫でる。

「お前、友達いなかったんだな」

「…………いるよ、お兄ちゃんが」

か細い声はそれでも少し嬉しさが混じっていて、逆に切なさを覚えた。無邪気で、学校を勧めた小さな女の子は、彼から誰よりも遠く、近い存在。

「どうして、俺に学校を勧めたんだ？」

「……………そしたら、私も学校に頑張って行こうと思ったの。もしお兄ちゃんがいつか教えてくれる日が来るなら絶対にやめないって」

小さな女の子が見つけた、小さな希望。それは遠く、儚い目標。彼が先生にならなければ叶わない、見込みのないもの。

「……………っ、」

思わず涙が出る。

赤の他人。

知り合いですらなかった彼女。

「馬鹿だな」

彼女が小さな、小さな、消え入りそうな希望を抱いたのと同じように、この時彼にも小さな希望が生まれる。

「じゃあ、やめんなよ。絶対、先生になってお前の前に行ってやるからな」

強く、強く彼女の身体を抱き締めて、彼……………彰は言った。彼女は嬉しそうに微笑んで頷く。

道の長い目標。けれど、二人は今にも叶いそうなほど嬉しそうに笑
い、指切りを交わした。

オーナーと跡取り

「……これがきっかけ。理解できないだろ？ たったそれだけなのに何故かなりたくもないはずの先生を目指すなんてさ」

苦笑しながら彰は朱理に言った。不良時代の、ちょっとしたできごと。誰にも話したことがないだろう、その内容に一言も口を出さずに彼女は聞いていた。

彼の言葉にゆっくり首を振って彼女はうつむいた。

「何となく、わかるから」

「俺が先生を目指した理由が？」

「希望を持つことで救われる気持ち……。彰先輩は彼女が自分を必要としてくれることが嬉しかったんですね。純粹に、ただ。だから、思わず彼女の希望に応えたくなった。それは、もう……しょうがないことですよ。それに、その希望に応えるために、彰先輩は救われた。すごいな、その子。尊敬する。私なんて、彰先輩のこと気にしてたのに、何も声をかけられなくて」

暗くなっていく声に彰は目を細める。あの時の状態で誰かが話しかけられるなど、彰自身も思っていない。逆に恐れずに近づいてくる者がいる方が変だ。

だけど、あの少女はその常識を突き破った。見ず知らずの者に希望を抱き、見ず知らずの物と約束を交わした。

「そういえば、今先輩の彼女になっている人はどういう人なんですか？」

「うーん、不良だった」

「え？」

あっさりと答えられた言葉に唾然として、彼女は口を開ける。その表情が面白くて、吹き出しながら、あの時のことを思い出した。

「百合はさ、似てたんだよ。最初は本当同情にも似た気持ちで近づいて、できれば俺のような人にならないようにって、思って。けどさ、俺とは全然違ったんだ」

「どう？」

「学校とか、家とかにもう自分の見方をしてくれる人がいない、気にしてくれる人がいないはずなのに、学校には来るんだよ。変な運だけ悪くてさ、いつつも不良に見つかって喧嘩になってるけど、何故かさ。俺にはそんな気持ち何もなかった。学校行ってもうるさいだけだし、嫌な思いするだけ。勉強なんてしてもって思っても何もなかったのに」

誰よりも淋しくて、誰よりも辛い心境に立っていたはずの彼女は、誰よりも強く生きて、頑張っていた。

「不良期間が短かったのもあってさ、頭いいし、まあ努力もしたんだろうけど、いつの間にかクラスのトップにいるような奴。しかもさ、一番苦手だっている数学が一番いいんだよ。不器用で、子供っぽくて、だけど一番純粋で。俺と同じ状況にいるのに、俺とは全く違う方向にいる彼女を見てたらさ、もう手遅れだった」

「……恋はするんじゃないくて、落ちるもののよってお母さんが言ってたのを思い出します。たぶん、それが、本当の恋なんですよ」

につこりと笑う彼女は、不意に話をしていた百合を思い出させる。何も言わずに出て行った。携帯も取り上げられ、家の中で動くのも監視が入る状態。この状態じゃ連絡もできない。しかも、喧嘩とも言えるそんな状態で別れてしまった。おそらく彼女は章と出会った時に何かよけいな事を言われたのだらうと大体の予想はついている。

「はぁ、早くここから出たいよ」

「彰先輩は何でここに呼ばれたんですか？」

「この家が何をしているか知ってるだろう？」

「んー、菓子屋ですか？」

「そこの跡取りとして呼ばれてんだよ」

和菓子と洋菓子をそれぞれ作り上げている会社。今、不況の時期でもあり、次第に売り上げは右下がりとなっている。それらのストレスもあり、オーナーである総一郎の身体の調子が崩れてきたのだ。

「じゃあ」

「…………俺がここに入ったら、二度と彼女には会えなくなるな」

自嘲にも似た苦笑を浮かべて、彰は小さくため息をついた。

彰と総一郎

「ちょっと！ 今日試作担当の人どこ？」

「あ、今日具合が悪いそうで…」

「え！ 困ったわね、これじゃあ、作れないわ」

朝食準備中、冷や汗をかく彼女を朱理はじっと見やる。毎日、総一郎は新作を作り上げるため、交替でお菓子を試作させていた。その担当者が今日は来ていないらしい。

それらを提供できない事態は、今の総一郎には火に油を注ぐのと同じくらいタブーな状況であり、困るのも無理はない。

だからといって他の者に頼むとしても、誰も案など持っていない。

「あの」

「ん、何？ 狩野さん」

彼女はにっこりと可愛らしい笑みを向けて、持っていた紙切れを彼女に差し出した。

昼を過ぎて、彰は総一郎に呼ばれた。少し気が重い中、部屋に向かう。やはり、背後には章が控えている状態で、より一層張り詰めた空気を醸し出す。

総一郎の前に座った彼はその空気に負けぬようじつと強い瞳で見返す。しかし、それを失笑して、総一郎は低い声を発した。

「従業員の女を部屋に長時間連れ込んだらしいな」

「話し相手が欲しかっただけです」

「ふん、生徒といいお前は女をたらし込むのが上手くなったらしいな。まあ、いい。本題に入ろう」

総一郎は後ろに控える章に視線を投げ掛ける。彼は一度頷くとノート一冊分の厚みがあるプリントを彰の前に差し出した。

それを無造作にめくっていくとそこには彰と百合との関係を証拠付ける写真及び文章がずらりと並んでいた。

「————」

「お前が戻るなら、これはばらさないでいてやる」

「一体……………いつからっ!」

「お前が教師に入った時から俺達は見張ってたんだよ。時条百合の変装にだまされたのも、全部演技だ」

頭に血が上るのが理解できた。誰にも気付かれていない自信があった。相手は生徒で、自分は教師。付き合うという甘えを出した代わりにそれを人に知られないように細心の注意を配ったつもりだった。だけど、実際は。この行為をした章とそれに気づかなかった自分に頭がきた。

「……………っ、卑怯だ」

「それをさせているのはお前だ」

「こんなの、横暴だ！」

「それを可能にさせたのも、お前だ！　生徒と知りながら、何故付き合った！」

たたき付けられた言葉に彰は目を見開く。

『お願いだから、二人の時も……………時条なんて呼ばないで』

触れるつもりなんてなかった。

手に入れるつもりもなかった。

だけど、望みが目の前にあったから…。

『好き。だから、私と付き合って』

彼女自身が同じことを望んだから。

それに、甘えてしまったんだ。

「じゃあ、あんたはどうして結婚したんだよ」

だんと、テーブルを叩いて立ち上がる。総一郎を見下すようにして彰は拳を作った。

「母さんと、どうして結婚したんだよっ！ 家柄に相応しいからか？ 丁度いいからか？」

「……………そうだ」

「————っ、嘘つくなよっ！ たとえそうだとして、その方が間違ってる！ おかしいだろ！」

シンとした空気が流れた。ピリピリとしたそれに彰はじつと耐える。何も言わなくなってしまうた総一郎を章はただ黙って見守る。

「失礼します」

そつと静かに開けられた襖。思わずそちらに顔を向けると朱理がお菓子をお盆に乗せて運んできた。

「今は手が離せない」

「旦那様がこの時間に必ず持つてこいと命令したんですよ？」

やんわりと返した言葉に総一郎は眉を寄せてじつと彼女を見やる。睨みにも動じない彼女はにっこりと笑って有無なく菓子をテーブルに運んだ。

「本日のお菓子はクッキーの中におもちとあんこを入れた和洋菓子です」

聞いたことのないお菓子に彼は更に眉を寄せた。険しい顔をした彼にも怯みはせず、朱理はにっこりと笑みを浮かべ続けた。

お菓子と婚約？

「何だそのふざけた菓子は」

本気で怒っている様子の総一郎に朱理は怯むことなく見返す。やりわりとした優しい笑みを浮かべて、ゆっくりと口を開いた。

「今までこの会社では和菓子、洋菓子の品質を極限にまで上げて、製造していました。それは、昔からの伝統と技術、守るべき味があり、それを好むお客様がいたからです」

落ち着いた様子で述べて、朱理はやはり視線を逸らすことなく、更に言葉を繋げる。

「しかし、利益が伸び悩んでいる今はその考えも少し変えなければいけません。和菓子は和菓子、洋菓子は洋菓子……ではなく、せっかく両方のお菓子を極めているのなら、それぞれの性質を生かした、和洋菓子を提案してみました」

嘘のない、堂々とした様子に総一郎もすぐには反論できず、息をのんだ。しかし、今までのポリシーを曲げた商品をそう簡単に受け入れるわけにはいかない。

眉間にシワを寄せて、しばらく黙る。

「……………これは、誰が？」

「恐れ多くも私が案を持ち、作らせていただきました」

見るからに何の経験もなさそうな彼女。普通なら考えられない行為だ。しかし、歌詞の職人である者達は何も言わずに彼女に貸したのならそれ相応の理由があるからだろう。

そう、半分彼らのことを信賴し、そして半分は目の前にある菓子に興味で総一郎はあえて何も突っ込まず、その菓手に手をつけた。

それには彰はもちろん、章にも予想できない事態で二人共呆然と見つめる。

「いかがでしょうか？」

「……………」

難しい顔をしたまま微動だにしない彼に流石に彼女の顔も次第に曇っていく。職人でもない彼女が勝手に作り上げ、変な理屈とともに彼に得体の知れないものを差し出した。そんな行為はb普通なら許されるはずがない。

この菓子が認められないということは、彼女の身が危ういのと同じなのだ。

「お前、菓子作りの経験はあるのか？」

「——いえ、趣味で少しだけやっていただけです。それ以外は全く」

「そんなものを私に食べさせたのか」

「す、すみません。ですが、ちゃんとこの………」

慌てて頭を下げる彼女を余所に総一郎は残った菓子も全てぺろりと食べきってしまった。一瞬、何が起きたのか理解できなかった彼女は何度か瞬きを繰り返してその様子を見つめた。

「まあ、それでもアイディアは素晴らしかった。この私の意見を押し曲げて出す、菓子。それは一番完成品に近いものだ。才能があると思うぞ」

「——っ、実はそれ……私の父が考え出したものなんです。父はこの店の菓子が大好きで、だからパティシエの職業にも就きました。その時に考えていたものなんです、それを実行する前に亡くなったんです。その案が認められて私は嬉しいです」

「そうか。気に入った。このまま君はこの正社員になりなさい。何なら時期社長の彰の婚約者にもさせてやる」

突拍子もない言葉に彼女は凍りつく。彰もテーブルをだん、と叩き身体を総一郎に近づけた。

「あんたは、何勝手に決めてるんだ！ 俺には恋人がいるし、ここ

を継ぐ気なんてない!!」

「お前の意見など聞いてない。黙ってなさい! どうだ? いい話
だろ? そういえば名前はなんだったか?」

ついに彼の言葉にも耳を貸さなくなった総一郎は固まっている彼女
になるべく優しく声をかける。予想だにしない事態に総一郎以外の
者はついていけない。

彼女は少し微笑んで、やっと気持ちを落ち着かせた。

「そうですね、じゃあお付き合いさせていただきます」

突然、声音が低くなる。ゆっくりと立ち上がった彼女は髪を止めて
いたピンを順に外していく。

「これからは名前を覚えといてくださいね。顔と一緒に」

聞き覚えのある声、見覚えのある姿に彰と章は目をむいた。驚きで
言葉も出ない。

総一郎もどこかで見たことのある顔に口を開ける。

「初めまして、私は時条百合といいます」

にっこりと微笑む彼女は高校生の顔をした、ヒロインだった。

潜入と真実

見覚えのある姿に誰もが言葉を失った。

先ほどこまでここにいたのは、新しく入った：知り合ったばかりの狩野朱理という人物だった。いや、だと思っていた。

人はこうも簡単に変装して誤魔化せるものなのか。彼等には理解できない。しかし、彼女：百合は今それを簡単にこなして、この場にいる。

「百合……………」

「彰を取り返しに来ました。総一郎様」

につこりと朱理口調で微笑んで、百合は彼の前に怯ます佇む。

「お前、何で……………」

「あら、こんにちは：章様。この前はご忠告ありがとうございます。でもね、残念でしたね」

優しさを感じられるが、何処か闇を帯びたその笑みに章は眉を寄せた。

「私は…………諦めが悪いんだよ」

「言いたいことはそれだけか？」

重い声が部屋に響いた。いつの間にか立ち上がっていた彼は百合を見下ろすようにして睨んでいる。
百合も同じくらい険しい顔で彼を睨んだ。

「言いたいことなら山ほどある。あんた、今まで自分の息子の言葉、まともに受け取ったことあるの？ 聞こうと思ったことあるの？」

予想済みの彼女の言葉に総一郎は顔色一つ変えない。今さらそんなことを言っても何も変わらない。それは彰や章だけでなく、言っている百合自身も理解していた。

「私、ずっとすごい人なんだと思ってた」

「……………」

「お父さんが尊敬する、店の社長さん。こんなに美味しいものを作れる人ならちゃんと人の気持ちを理解している人だねって、私のお父さんが言ってたから」

死んでしまった父親。彼がいつもいつも彼女にお土産として買ってきたお菓子。それがここの店の者だった。百合にとって無くしたくないこの味。だから、自分の父親が考えた案をダメ元で実行した。

「この味の優しさとか、美味しさがわかってるのに、どうして貴方は人の気持ちが理解できないの？」

「うるさい！ そんなこと言いに来たのならさっさと帰れ！ これ以上私に何か言うのならお前をあの学校から追い出すぞ！」

「な、何だと！ どんな権利があってこいつの居場所を——」

掴みかかろうとした彰を章より早く百合が静止して、泣きそうな表情をしたまま総一郎に顔を向ける。

「やりたければ、やればいい。私は学校という場所に思い入れはないから」

「何だと？ 我慢するな、お前にとってもう居場所はあるそこだけだろう？」

「学校という場所はどこにでもあるでしょ？ 追放されても怖くない。別に、関係ない。だって、私の居場所は、彰やみいちゃんやおちゃん達の……中にあるから」

百合は隣りに立つ彰の手を握る。震えている彼女のそれをそつと握り返すと、仄かに彼女の緊張がほぐれた。

「ねえ、どうして本当のこと、言わないの？ 彰だってそれ言えばもう少し考え方が変わるのに、それを利用して何とか社長について考えさせれるのに、どうして言わないの？」

「お前、何を知っている！」

「知ってるよ。だって、見てればわかるよ。お父さんと、同じだから」

「ふん、そんなもの脅しに使わなくても、こいつは私のものだ。好きに使うさ」

好き勝手言われ、ついに彰は我慢できなくなる。百合から手を離して、瞬時に総一郎の胸倉を掴んだ。予想できなかった状況に彼女は一瞬反応が遅れた。

腕が振り上げられたその瞬間、弾かれたように甲高い声が響いた。

「総一郎さんは——ガンなの！！」

シンと当たりが静まる。振り上げられたままの腕はその状態で停止し、揺らしている瞳を総一郎に向けたまま、彰の思考は止まった。静かに腕を下ろして、本人ではなく、百合の方を向いて確認する。

「それ、本当か？」

「見間違えるわけないよ。同じなんだ。お父さんと」

同じ薬、同じ咳、同じ症状…、もう一生思い出したくもない、その症状。

総一郎は深いため息をついて、彰の手を振り払った。

「余命、二年だ」

既に決まってしまった命の長さ。
状況が、くるくる変わる。

潜入と真実（後書き）

一週間ぶり………？です。

すみません、本当すみません。予定を大幅に無視してますね。

一応言い訳を…。

あるイベントのために漫画を懸命に描いていたため、文章を考えることもできませんでした。

おかげで入稿完了です！

あと設計の締切りもあって。

はい、言い訳みっともないですね。

では、頑張って早く終わらせたいです。そろそろクライマックスです！

本音と真実

ガンという言葉に彰は瞳を揺らす。父親の存在がなくなる、それは例え忌み嫌っている相手であつても動揺しないわけにはいかない。肉親というのはそういうものだろう。

ずっと、居続ける。

そう錯覚する当たり前な存在。

「二年…」

遠いようで早いその数字にただ絶句するしかない。

「どうした？ 同情して社長にでもなる気になったか？」

「な、そんなこと絶対しない！」

「そんな内容で言い争わないで！」

思わず口を開いた百合に総一郎は一度睨みを効かせてゆっくりと座り込む。一つ、大きな息をついて、疲れた口調で呟いた。

「もう、いい。彰も、お前ももう出て行け」

「嫌です」

やっていることと、言っていることの矛盾。それにそろそろ彼もいらつきを覚えた。それでも、やはり彼女は気にする様子もなくじつと総一郎を見つめる。

まっすぐな、強い瞳。その目に眩しそうに目を細めて苦い表情を作った。

「私はこの店を潰しに来たんじゃない。確かに彰は連れて帰るけど、それでもう関係ないと言えない」

「素人が口出しできる問題じゃない。それはわかっているはずだろう？」

「でも、貴方に足りないことを指摘することはできます」

「部外者が口出しをするんじゃない!!」

「部外者だから口出しできる内容なんです!」

互いに息を切らしながらまた見つめ合う。そろそろ総一郎の身体を心配し始めた章がいつの間にか彼の隣りに控えていた。ゆっくりと百合を睨んで首を振った。これ以上興奮させるなど、訴

えているのだろう。

「そう、貴方ですよ、章さん。貴方がはっきりと自分の気持ちを伝えないから、こんなややこしいことになってるんです」

いきなり話を振られて、彼に目を丸くした。一斉にその場の者は彼を見る。

「一体何の話だ？」

「ずっと話聞いてたし、状況も何となく理解してるけど、でもさ……彰が社長にならないなら、普通に章さんを社長にすればいいんじゃないかって話」

もう面倒くさい、と呟いて百合は頭をかく。考えたこともなかったのか、三人は目を点にしていた。血のつながった親子。それは章も変わらないし、普通に考えれば彼が長男であるのだから彼が社長になるのが当たり前。

けれど、彼等の頭の中にはそれがなかった。

「ふん、それはありえん」

「ねえ、母親の違う息子を作った貴方なら、血のつながりなんて気にしていないでしょ？」

彰と章。互いにいがみ合う理由は、腹違いの兄弟だから。彼が後継ぎを章にしないのもそれが理由で、だけど。

「それなのにどうして貴方が章さんを後継ぎにしなかったのは、彼がその気がないと思っっているからじゃないの？」

誰も考えなかったその理由。思いつかなかったその状況。彼女が現れてから全てが一転します。

「どうせ、この仕事になんか興味ないだろう」

「——いつ、そんなこと言ったんですか！」

「腹違いの状態を好む者なんていない。ずっとお前は私を恨んでいるんじゃないかと」

「確かに、腹違いという状況には満足できません。だけど、だからと言ってこの仕事まで恨んだことはないです」

百合は隣りにいる彰と視線を合わせてため息をついた。

「結局ね、人ってさことばがないとわからないんだよ」

こうして、ぐだぐだなこの争いは、うやむやになりながら終了した。

本音と真実（後書き）

うわああ、悪い癖です。マンネリ＋ネタ切れ。
本当にぐだぐだな話になって申し訳ないです。
次の話から雰囲気を一転させてエンディングに近づきたいと思いま
す。

それからと初詣

色とりどりの振袖をきた女性。その姿を見ながら彼女、時条百合は大きな溜め息をついた。

彰誘拐事件（みり命名）からまだ数日しかたて以内、今日一月一日。彼女は彼氏である彰を待っている最中だ。

何故、元気がないのか。それは彰が遅れている、というわけではなく。気分が悪い、というわけでもなく。ただ、その数日前の出来事が頭の中で整理しきれないからである。

それと、皆さんも理解できないと思いますので、ここで一度整理しましょう。（作者の実力不足故）

和洋菓子店の社長である財津総一郎は、二人の女性と付き合っていた。どちらも総一郎のことを慕い、総一郎も二人を同等に愛していた。ある時、その片方と結婚する。しかし、その直後に結婚していない方の女性の妊娠が発覚。

自分と血のつながった子供をおろす、そんな恐ろしいことは出来なかった彼は正妻との子供と偽って長男、章を授かった。

そして、本当の妻との子供がその数年後に無事誕生する。それが彰だった。

腹違いの子供だと知った二人はその時から自分の心をしまうようになり、その二人を見て、また総一郎も扱いがわからなくなった。

次第に愛し方を忘れ、薄れていく。

こうして不良となった彰と、総一郎の望通りに生きる章と、思うこと、やりたいことが異なる二人ができる。

総一郎は素直すぎる章を見て、思う。正妻との子供じゃないことを気にやみ、側にいてくれるのではないかと。二人とも心から跡継

ぎになりたいとは思っていないのだと。

そのうちに子供から跡継ぎを見つけることは諦め正社員の中から優秀な者を作り出そうという考えが生まれた。しかし、それが生まれる前に総一郎へのガンの発覚。

焦る気持ちから彰への跡継ぎを考え、強行突破をしたのだ。

「だけど、全ては空回り。結局、皆不器用だっただけなんだよね」

不器用な人が一心を込めて作ったお菓子。

だから、すごく優しい甘さがするのかな？

百合は薄く笑って時計を見る。そろそろ約束の五分前となった。ゆっくりと周りを見渡せばあの黒髪が見えた。人ごみにまぎれていても一発で見つけ出してしまう。

「彰！」

声に気づいた彼はまっすぐに彼女の方を向いて微笑んだ。久しぶりに見る心からの笑顔に百合は思わず顔を赤らめる。

「早いな」

「思ったよりも早く着れたから。明けておめでとうございます、今年も勉強と恋、両方の面でよろしく願います」

「はは、よろしく」

彰はじつと下から順に彼女の姿を確認する。赤い振袖に包まれたその姿はいつもよりも大人びていて、綺麗だった。その視線に気づいたのか、彼女は思わず視線をそらす。

「そんなじつと見ないで」

「やだ」

「恥ずかしいじゃん」

「は、何それ、すっげー可愛い」

そんなバカップルなかいわを繰り広げる二人をじつと乾いた目で見
る者が一人。

「ここにもこんなカップルいたよ」

沈んだ声でそう呟いたのは野原柴緒理だった。そんな彼女の後ろに
は彰と百合と同じように頬を染めるみりと真二がいた。

「しおちゃん、みいちゃん…神谷さん」

「あ、百合ちゃん。明けましておめでどう」

「おめでどうございます」

「ちょっとお、一応百合ちゃん達の間係をカモフラージュするため
にわざわざ一緒に行くんだから、少しはそういったオーラ消してよ
ね」

おそらくみりと真二のやり取りをここに来るまでさんざん見せ付け
られたのだろう。うんざりしたように強く念を押した。苦笑をしな
がら百合は頷く。

「あ、そうだ百合ちゃん！ どうして先生の誘拐の時、私の所にも
声掛けてくれなかったの！」

「あー、ごめんね。あの時何か考えまともじゃなくて」

事件が終わった後に事を聞いた柴緒理はこれ以上ないほどショック
を受けて、一日まともに口をきいてくれなかった。

百合が財津家に潜入するために用意した狩野朱理という人物と、設
定はほとんどミリが考えてくれたものだ。

「びっくりしたよ、財津先生のところに潜り込むために名前とキャ
ラクターを考えてだもんね。よく思いつくよね、そんな方法」

「みりちゃんもよくあんな短時間であそこまで考えてくれたよね」

「お陰でこっちはすっかり騙された」

和気藹々と話す彼女達の会話についていけない真二は区切りのいい所でぼそりと提案する。

「あのお、ぼちぼち初詣行きませんか？」

混雑する神社前に立つ人のもっともな意見だった。

進路と過去

初詣は無事に終了し、皆で食事をして、そして陽はあつという間に落ちて行く。

西の空に落ちるそれをただ意味もなく見つめる五人は自然と笑みをこぼした。

「綺麗」

「うん、でもしばらくこうやって落ち着いて空を眺めることできないかもね」

「何で？」

「………来年度何年になるか自覚ないな？ 野原」

「ああー！ そっか、受験だ」

今更ながら思い出したのか紫央里はがくしと肩を落とした。その様子に真二が少し心配そうに首を傾げて呟いた。

「神社に行った時何をお願いしたの？」

「うう、いい思い出ができますよーって」

「あーあ、やっちゃった。しいらない」

皆で賑やかな笑いを上げる。心地よい、安心できる空気に百合はや
っと心から気を緩ませた。

「皆行く先決まってるの？」

「あー、決めてない」

「そりゃあ、受験の自覚ない人はね…」

「じゃあ、天上はどうなんだ？ 前回の調査では未定だったけど」

「あー！ 先生になってる。面倒」

「みり……そういう言い方はないんじゃないか？」

「百合ちゃんは？」

突然話を振られて百合は瞬きを繰り返す。一拍してからゆっくり口
角を上げて微笑んだ。その仕種があまりにも大人びていて誰もが目
を瞠る。

「まだ、内緒」

「て、どういう意味だよ」

二人で彰の家に戻り、それぞれくつろぎ始めた時、思わず彼は口を開いた。普通に考えれば彰は百合の担任で、秘密にされる人物ではない。

「ちゃんと本当に決めたら彰には言うよ。担任だし。だけど、まだ行けるかもわからない所を言いたくないだけ」

先ほどとは違い、自信を持ってない様子で彼女は呟く。親もいない彼女にとって進学か、就職か、それは重大な悩みになるだろう。

進学するにもお金の問題があり、就職には今通っている高校では少し辛いものがある。

「進学したいなら…金くらい」

「だめだよ。そんなの。彰は私の担任で、他人なんだから。たとえば恋人でもそんなの頼れない。それに…私自身けじめをつけたいの」

きっぱりと断られて彰は俯いた。確かに、家族でもなく、夫婦でもないこの関係で、そんな関わり方をしてはいけない、と彼自身も思う。

特に、二人の関係は特別で、教師と生徒。それは卒業しても、過去

というもので残る関係。

「大丈夫、心配しないで。私はできることをちゃんと理解して、行動するから」

にっこりと彼女は笑う。今は、その笑顔と言葉を信じるしか、彰には道はなかった。

「ごめんな、力になれなくて」

「別に気にしないで。彰はいろんなことを教えてくれたし、力になってくれたよ」

落ち込む彼に百合は近付いて、彼の頬を両手で包みこむ。少し冷たい彼女の手を更に彼の手が包んだ。

「ありがとう。子供の時の約束を守って、私の先生になってくれて――」

ゆっくりと落とされたキスと言葉。それに驚愕して、彰は目を見開いたまま彼女を見つめた。

忘れられていた真実。記憶の奥底にしまわれていると思われた過去。ずっと、話したとしても、思い出すことはないだろうと、彼は思っていた。

「覚えて、たんだ？」

「まさか。彰から話聞いて、次第に思い出したんだよ。小学生の時に友達いないとか、同じ状況に私もいたなあって思ってたらさ。でも、ちよつとショックだったなあ」

眩かれた意味を理解し損ねて、彰は変な顔で百合を見る。その様子に内心笑いながらも、大げさに溜め息をついて見せた。

「だって、私より先にまだあった間もない朱理に自分の過去話すんだもん」

「な、それは」

「しかも何か変な雰囲気になってたし」

「——っ！」

口答えできない様子に優越感を覚えて少しだけ口角を上げる。自分が優位になれることなどあまりないことで、普通なら許されること

でもない。こういう時間を過ごせるということは、恋人という実感を持たせてくれる。

ずっと、この時間が続きますように。

ばれてはいけない、秘密の恋は苦しみを感じもせず、甘く彼女を喜ばせる。

少しずつ、その秘密の関係にも終わりに近づきながら。

進路と過去（後書き）

もう、予定なんか無視をしまっている私。すみません。本当すみません。すでに土下座しても頭が高い状況ですね。

っというわけであらすじの予定は削除しておきます。もう出来次第お送りしたいと思いますので、ご了承ください。

できる限り今学期中に…っというか今年度中に。

私の大学は未だに春休みに入っておりません。まだテストすらしてません。ああ、もう死にそうです。

話がまたつまらなくなりますが、できれば最後までお付き合いください。

三年生と覚悟

そして、月日はたって、百合は三年生となる。

春は過ぎて、それぞれは進学のために受験勉強を開始し始めたばかりだ。中にはまだ進路先を決めていない者もいる。

そんな中、百合は彰にも内緒でよく外出を繰り返すようになっていた。

「百合ちゃん、今日も何かあるの？」

「あ、………うん。ちょっとバイトまがいなことしてるから、出来れば彰には内緒にしといて」

必死で頼み込む彼女に紫央理とみりは顔を見合わせて頷いた。あまり言いたくない内容なら今は聞かない方がいいだろうと。軽くお礼を述べて、すぐさま彼女は教室から出て行った。

「何してるんだろ？　こんな大事な時期に」

「ねえ」

「ってか、あんたは進路決まったの？」

「ああ、それを言わないでえ」

陽が落ちて、星が輝く時間。百合は街灯しか明かりがない場所を一人歩いていった。まだ家にも帰っていなかったのか、制服姿のままだ。人通りの少ない道を平然と歩きながら、向かう場所はまた、自分の家ではない。

「もう帰ってるかな？」

外からある特定の部屋の窓を見る。オレンジ色の白熱電球の明かりがもれている。それを確認して、百合は頬を緩ませた。迷わずその建物の中に入り、エレベーターに乗り込んだ。

「えっと、合鍵はあ」

ポケットの中を探すと、自宅の鍵よりもすんなりと見つかる。中に誰がいるのか、など気にすることもなくその扉を開けた。そして、硬直する。

「……………え？」

「貴方は」

目の前にいたのは、彼女の恋人、ではなく学校の学年主任である女性教師。何故、ここにいいのか、互いに疑問が浮かび、言葉が出てこない。それどころか、百合は絶対絶命を迎えている。

制服姿で、素顔のままに、しかも合鍵を使ってこの部屋に入ったのだ。普通ならもう言い逃れはできない。彰も学年主任の後ろで青い顔をしながら頭を抱えている。

「どういことですか？ 財津先生」

「あ、いや、その」

「こんな時間に女性の生徒が、しかも合鍵まで持ってここに入るなんて、普通なら考えられませんかよね？」

もったもた意見に何も言い返せない。彰も、そして百合も。視線を彷徨わせて、俯いた。

それは、何よりも付き合っているということの肯定で、学年主任もそれ以上の言葉をかけなかった。

靴をはいて、ヒールの音を響かせたら、彼女は扉を開けるとともに小さな声でこう述べた。

「このことは校長先生にもご報告させていただきます。詳しい事情はその後伺いますから、覚悟しといてくださいね」

冷たい声音は百合の背中にまわりつき、一瞬で震えが襲ってきた。

「百合？」

「ごめ、なさ……。私が、今日ここに来たから」

「ばか、気にするな！　いつでも来ていいように俺が合鍵を渡したんだから！」

震える彼女の身体を優しく抱きしめて、彰は必死に彼女の非を否定する。それでも、彼女がここに来たからばれたのは間違いなくて、百合もその言葉にすぐれるほどの余裕はなかった。

特別な関係となってから約一年。付き合い始めてから約半年。ずっと隠し通してきた関係がついに他の人にばれてしまった。

どこかで、ばれはしないと気を抜いていたのは事実で、二人ともいつも配っていた注意をおろそかにしてしまったが故に起きた事件。

「ごめんなさ」

「もう、しょうがないことだ。だから、そんなに謝るなよ」

そう、もう元には戻れない。だから、覚悟を決めるしかない。

そう、彰は自分に言い聞かせた。学校に辞める覚悟をしなければ、と。

騒ぎと辞める

どこから広まったのか、百合と彰の関係はいつ間にか学校中に知れ渡り、もちろん親友の二人にもそれは耳に入っていた。かなり動揺した様子でみりと紫央里は顔を見合わせた。

「何で、皆知ってるの？」

「ちょ、やばいよ！百合ちゃんまだだし」

騒ぎの原因はいつもより遅くてまだ顔を見せない。ざわざわと騒ぎは治まらず、生徒の皆は勝手な想像で話を盛り上げている。

「一体……何があったんだろう」

「もう、何で電話にも出ないの！」

焦りばかりが募るみに紫央里は苦い顔をした。こういう時、親友であつても彼女のためにできることは少ない。ただ、今の状況を教えることしかない。

「財津先生も来てないし」

多分、バレたことを知ってるんだ。

明らかに見計らったような現状に確信する。
みりは仕方なく携帯をしまつて教室を出た。思わぬ行動に紫央里は慌ててついていく。

「何処行くの？」

「門で待ってる。話したいし」

今、百合が来ればすぐに先生達に捕まることは目に見えている。その前に少しでも彼女を見たい。

紫央里も頷いて一緒に階段を降りる。しかし、途端に辺りの声が一際大きいものになった。

二人の目の前を堂々と歩くのは黒く髪を染め直した百合と彰だった。二人同時に学校に来たのだろう、噂のはずが、事実と皆の中から考えが塗り替えられる。

「ゆ、りちゃん」

「髪が」

「ごめん、心配かけて」

にっこりとこんな状況でも余裕に微笑む。一体何処からそんな余力

を出しているのか、二人には理解できない。
何か聞こうと口を開こうとしたみを視線で制止して、もう一度呟く。

「ごめん、ね」

「え……………」

先ほどと同じ言葉。だけど明らかに違う理由で述べられた謝罪。瞬時に二人に不安が募る。彰も彰で今までには見せない落ち着いた覚悟を醸し出している。

そのままゆっくりと自らの足で校長室まで歩く。

「百合ちゃん…」

「何する気？」

この状況ですること。そう考えると身体が自然と震えた。

まさか……………。

ソファとテーブル、そして机がセンス良く配置されたそこは、校長室。大体が茶色か黒で構成されている部屋は独特な重苦しさを醸し出している。

そこには彰と百合、校長、そして昨日の女教師がいた。

「さて、昨日のことですが」

「言い繕う気はありません」

「私と財津先生は互いの立場を理解した上で交際をしています」

きっぱりとした対応に少し戸惑う。隠した所であの状況を見られたらもう無理に近い。それならいっそ二人は決意したのだ。

「そうですか、それなら…それ相応の処分を受けてもらいます」

「どちらか一方が学校から消えますか？」

率直の質問に彰さえも目を見開いた。百合は顔色一つ変えずに返事を待っている。そこまで正直に聞かれると、逆に答えづらいのか、校長は表情を曇らせて唸った。

「まあ、……………そういうことにならないとは言えない。PTAにも相談して、それからだけど」

予想通りの言葉に彰は失笑した。この場合考えれば消えるのは彰の方だ。他の学校に飛ばされるか、または最悪教師免許を失うか。どちらにせよ、もうこの学校にはいられない。

逆にいい機会だったのかな？

いつかは、百合も卒業する。いつかは、この学校でも会えなくなる。それが早まるだけだ。
ちよつと違う状況なだけ。早めにちゃんとした恋人になれて、いい機会だと無理やりに納得した。

「なら、私がこの学校を辞めます」

「「「!!」」」

意外なセリフにまた硬直した。至って真剣な彼女の顔に、彰はかける言葉が見つからない。

「私は……中退させてもらいます」

きっぱりとした高い声が広い部屋に虚しく響いた。

無くさないでと茜色

きっぱりと言ったそれは、誰もが予想出来ないこと。声も出せないでいる大人を落ち着いた様子で見やり、百合はまた口を開いた。

「だから、先生をせめて、ここに置いて下さい」

たとえ二人共にいることがなくても、教師である彼が何の責任も取らない訳にはいかない。処分は必ず下るだろう。けれど、せめて、学校を離れる事態だけはやめて欲しいと、彼女は願う。

「何言ってる！　こんな状況なら、普通は大人が責任を」

「普通はでしょ？　だけど、私は生徒だからとか、教師だからとか関係ない！　高校にもなれば、何がいけないことで、何を守らなきゃいけないくらいわかってる！　なら、先生だけが責任を負うことなんて許せない！」

「もちろん貴方にもおそらく停学処分が」

「そうじゃないっ！　そういうんじゃない！」

必死に叫んで、百合は首を振る。そして、ゆっくりと息を吐いた。もう一度校長の顔を見る。そして、またあの大人びた口調できっぱりと言った。

「それに、中退は既に考えていたことです」

「なっ！」

「私は、進学を諦めて就職しようと考えてます。当ても見つけました。けどそこは学業より、実績で評価する場所で、更には入りたければ今から入れとも言われました。だから、考えてました」

一気に説明した彼女はゆっくりと頭を下げる。

「こんな勝手なお願い、する立場じゃないことわかってます。だけど、お願いです。私の居場所であるここを、彰がいる学校の空間を無くさないで下さい」

つまらなくて

くるしくて

いみもなかったあるとき

「彰がいたから、私は元の場所に戻れた。ううん、もっと意味のある生活に戻れた。その、温かい居場所を他の人達から取らないで下さい！」

そんなばしょから

たすけてくれた

たとえば、わたしがさいしょからとくべつであつても

あきららは、ほかのひとたちにも

したしまれて

このまれて

ひつようとされてる

だから……

「お願いです。先生を、生徒の気持ちになれる貴重な人を、これ以上なくさないで」

彼女の必死な声に校長と学年主任は顔を見合わせた。

困ったように眉を寄せる二人に、それでも頭を下げるしかなかった。

すっかり空は茜色で結局授業所でもなく、百合は屋上で溜め息をつく。あれから誰にも会っていない。携帯を覗くと何件か電話とメールが入ってるのがわかる。

ちかちかと定期的に光る携帯に嫌気がさして鞆に放る。

「あーあ、嫌な切っ掛けだな」

本当は、ちゃんと彰に相談して、背中を押してもらうつもりだった。それなのに…。

ふっと苦い笑みを浮かべて、涙を浮かべる。あの時の、彼の表情が忘れられないでいた。勝手に決めて、勝手に押し通した。そんなことすれば誰だって怒るだろう。

「ごめん、ね。彰」

でもわかってほしい。

軽い気持ちで決めたわけじゃないと。

「あ、わかってるか。だから、あの後何も言わなかったんだもんね」

ゆるしてほしい。

わがままを。

「……………だいすき」

「……………知ってるよ」

独り言のように呟いていたそれは実は物陰に座り込んでいた彰に常に向けていたものだった。浮かべていた涙はゆっくりと頬を滑っていく。

「大好き。好き。好きだった！ この場所が」

絶対ありえないと思ってたのに

この学校を離れることを躊躇するのが

「彰がいる、みいちゃんがいる、しおちゃんがいるこの学校が……
…大好き」

「じゃあ、馬鹿なこと言うなよ」

「私、言ったよね？ 私の居場所は学校じゃなくて、皆の所だって」

濡れたままの顔を彰に向ける。強い瞳と寄せた眉と涙はかなりミス
マッチで、けれどそれは彼女の決断の強さの証。

「皆がいてくれるなら、いいの。それに、辞めることは変わらない
よ」

「……………馬鹿」

同じように泣きそうな表情を彼女に向けて彰はゆっくりと百合を抱
き締めた。

茜色に染まりながら。

違う道と思い出

呼び出されたのは、二回目。

それなのに、もう何回もこの部屋を見ている気分になる。

百合は気付かれないように大きく深呼吸する。緊張しているのは、自らの処分が決まるから。ではない。彼女の処分が決まると共に彰自身の処分も決まるからだ。

「よって、二人の処分を決めたいと思います」

ゆっくりとした物言いに若干イラつきながらも、百合は静かに聞く。

「百合ちゃん!!」

鞆を手にとって帰ろうとした百合は後ろからかかった声に振り返る。案の定、二人がいた。少し疲れた笑みを向けて、百合は彼女達の元へ歩く。

「今までありがとう」

そう紡がれた言葉に、二人は聞こうとしていたことが、ある意味で答えられたことに気付く。

「そ、そんな!」

驚愕と衝撃で顔を青ざめる二人に百合は苦笑した。生暖かい風が頬を撫でる。もうすぐ春になることを知らず温度。彼女はそれを軽く感じて目を閉じた。

「私は……………今年度が卒業なんだよ」

「何で! まだ一年あるじゃん!」

「そうだよ! 受験はっ!」

「私は進学しない。就職するよ」

はつきりと、ゆっくりと、強い口調で、百合は二人を突き放す。

「ごめん、いつも……………一人で決めて。ごめん、二人を悲しませて。ごめん」

いつも、彼女は何の相談も無しに自分のことを決めてしまう。何度も二人に怒られた。何度も心配かけた。

些細なことでも、いっぱい。彼女は言うよりも聞くことを優先してしまうから、二人は未だに気付けない。それがもどかしくて、悲しい。

「ばか………」

「本当………ひどいよ」

「私ね、二人と親友になれて……彰と恋人になれて、本当嬉しかった。親が死んでから無意味に流れる時間が憎くて堪らなかったのに、今はこの時間の先に何があるのかすっごい楽しみなんだ！」

子供のようにはしゃいで話す。両親がいなくなってから、彼女の周りには誰もいなかった。だけど、彰がいて、みりがいて、紫央里がいて、誰かが……彼女の周りにいる。それがとても嬉しい。

「ねえ、私ね、皆と違うの。ずっと一人でいた。思わず不良になるくらい高校が嫌いだった」

「それは……」

「仕方ないよ」

「だから、だからね！もうこの際人とは違う道を歩いてみようって決めたんだ！」

誰かと一緒の道を歩くためにここにいるんじゃない。

誰かの真似をするために生きてるんじゃない。

自分のために、自分の意思で、ちゃんとした理由を持って、物事を見つめて行く。

彼女が、この一年で決めたことがそれだった。

「だから、ね？ 応援してよ。私はこれからなりたいものになりに行くから！」

「「————っ」

清々しい笑顔に言葉を失った。彼女からこんなにはっきりと応援して、と嘆願することは今までなかった。それほど、この道を歩むことを望んで、喜んでいるのだ。

たとえば、学校という居場所を無くしても。

「……………ばか！」

「当たり前じゃん！ ばかあ！」

辞めることを責めたいのに、彼女の強い意志を応援したい。そんな葛藤からか二人は投げやりに返事する。

それが堪らなく百合には嬉しかった。

「ありがとう。大好き」

涙を浮かべて百合は微笑んだ。もう、見れないかもしれない、二人と赤く染まる学校の風景を頭に焼き付けながら。

ただ、そこには、
思い出しか残らないことを噛み締めて。

そして、舞台は一年後に移る。

違う道と思い出（後書き）

話をものすごく無理やり進めています。次か、その次くらいで終わる予定です。

最終話と卒業

早すぎるピンク色の花びらに彼女は逆に切なさを覚えた。軽い鞆を片手に見慣れた道を歩む。最後になる制服と、学校にさよならを言うために。

「おはよ、みい」

「おはよ！ 今日はずつくりだったね」

「うん、桜がさ……綺麗だったから」

三月だというのにもう満開近い花びらに苦笑を漏らす。日々暖かくなる地球を証明してくれているのだろう。もう、入学式に綺麗な桜を見れることなんてこちら辺ではない。

紫央里は小さく溜め息をついた。三年に上がって二人は同じクラスとなった。けれど、一人……いつも足りない気がする。

「今日……来ないよね」

「仕事じゃないのかな？」

平日の、しかも昼間に彼女が来れるはずもない。諦めてこれからある式に思考を向かわせた。

今日は、みりと紫央里の学年の卒業式だ。最初からしんみりとした雰囲気二人ものまれていく。

「あ、財津先生だ！」

二人は廊下を通る教師に反応して駆け出した。結局、残ることが出来た彼女の恋人の元に。足音で気付いたのか、声を掛ける前に振り返り向いた彼に足を止める。

「最後の日くらい廊下を落ち着いて歩けないのか？」

「はは、ごめんなさい」

「あのさ、今日百合ちゃんは？」

「……………普通なら仕事じゃないのか？ 何も聞いてないけど」

その言葉に肩を落とした。彼女なら、自分達の卒業を祝ってくれると信じていたからだ。その様子に彼は苦笑して二人の頭を撫でる。

「ほら、しゃんとしろよ！ 今日の主役だろ？」

「「……………はい」」

苦笑して教室に戻り、二人して外に咲く桜を見つめた。一年前のあの時にはなかった、綺麗なピンク色の花。だけど、別れたあの時を思い出す。

「ねえ、しお。思っただけどさ」

「うん、私も」

顔を見合わせると自然に笑みが零れる。そして、二人は同時に口を開いた。

「「私達の卒業は、もう済んでたんだよね？」」

彼女が学校を去った

その日に…。

「時条」

既に聞き慣れた声に彼女は軽やかに振り返る。ぱつさりと首元で切られた髪はその拍子に揺れて、大きな瞳を覗かせた。

「何ですか？ 章さん」

その台詞に彼は苦い表情を作る。呼び方のせいだとすぐに気付いて彼女は改めて言い直す。

「何でしょうか、オーナー」

きつちりとした服装にきつちりとした挨拶を済ませた彼女はそれでも軽く声は張りは緩い。
普通なら失礼にもあたるその対応に彼が叱りもしないのは彼女だからこそだ。

「今日は行かなくてよかったのか？ 卒業だったんだろ？」

「私は、もう行かないと決めた場所ですから」

きっぱりと言い切って彼女は微笑む。そしてこれ以上その会話をし

ないためか、手に持つ書類を彼に差し出した。

「出されていた内容を簡単にまとめておきました。この新商品、結構人気出そうですが、もう少し酒の量を控えて、あと二十円程度下げるとよりいいかと」

「……………はあ、検討しとく」

「……………総一郎さんは、容体安定してますか？」

半年前から入院している彼を気遣って、思わず小声で問う。それには意外にも平然と受け止めて、章は失笑しながら答えた。

「口も減らないうちは死なないよ」

「ああ、心中お察しします」

ふと、彼女は腕にはまった時計を見る。短針は二を差していた。

「すみません、今日はこれで失礼します」

「もう？」

「学校には行かないけど、二人のお祝いはしておきたいんで」

にっこりと微笑む彼女に章もつられて微笑んだ。

「そうか、じゃあ、また明日な」

「はい、お先に失礼します」

最終話とこれから

思い出の日々を絵にした厚い本。最後のページに友達との言葉を残して、もう簡単には会えないことを受け止める。
今日で見納めの制服も、学校も、教師も十分に目に焼き付けて、彼等は名残惜しくも桜の下を歩いて帰って行った。

「そろそろ私達も帰ろうか」

「うん」

「あ、ちょっと待て。今日俺ん家来いよ」

他に誰もいないことを確かめて彰は小さく呟いた。話の意図が理解できなかったのか、二人とも不思議な表情で振り返った。

「百合が待ってるからさ」

その一言で満面に微笑む。今日一日、忘れたくても気になっていた彼女にやっと会えると、心から喜んで、三人も学校を後にした。

入った瞬間に広がる甘い香り。一気に食欲を訴える身体と葛藤しな

がらも、二人はその香りを作り出した本人に駆け寄った。

「久し振り！」

「百合ちゃん！」

元気よく抱き付いて来た二人を受け止めた百合はにっこりと微笑む。

「卒業、おめでとう」

「つて、何このお菓子！」

「うっわー！ すっごー！」

テーブルに並べてあるのは見たこともない上品な作りの菓子。和菓子もあれば、洋菓子もあり、どちらとも言えないものである。

「今まだ試作段階のお菓子達。ま、私なりに工夫してあるけど、流石にパティシエさんのようには上手くできないなあ」

「考案役なんだっけ？」

「うん、作るほどの技術ないからね」

それでも入社して一年の彼女の地位としてはかなり上位の扱いだ。まだ新人に近いはずなのに、新作品の話は全部彼女を通して。ありえないくらいハイスピードの昇進だ。

「にしても、まさかあそこに入るとは」

「お父さんが憧れてた店だし。それに知り合っていることで何とかならないか試してみただけだよ」

さらりと簡単に言ったが、それでも二、三週間は通い詰めて説得したのだ。

「そんなことより早く座って！」

「「うん！」」

散々騒ぎ、食べて、満足した二人が去った後、百合は片付けをしなから彰と会話する。

「やっぱり大変か？」

「もち、貴方のお兄さんは容赦ないしねー」

「仕事は慣れるまで三年かかるって言うしな」

「あー、本当かかりそう」

苦笑する百合に彰は後ろから抱き締めた。食器を洗う手を思わず止めて彼女は首を傾げた。

互いの温もりを感じて、心を落ち着かせる。ずっとこの時間が続けばいいと思うほど、心地よく穏やかな空間。

「本当に、手に入るなんて思わなかった」

「え？」

「俺が素を出せる相手と交わした約束を果たすために先生になったけど……また会えるなんてわからなかったし、会えたとしても教師を相手に好きになるなんて思わなかった」

遠い昔に交わされた約束。少女がそれを覚えてるなど彰は思っていなかった。けれど、それでも約束を果たしたくて、彼女に会いたくて勉強した。その想いが恋と気付かず。

再会したその瞬間にやっと彼は自分の気持ちに気付いた。気付いたけれど、彼女が彰を好きになるとは思えなかった。

「私も……恋人ができるなんて思わなかったよ。友達すらいなかったんだもん」

大切な人が増えた。確実に、それぞれに。
それは、互いに恋をしたから。互いを意識して、互いに変わっていったから。

「大好き…」

心に浮かんだ気持ちを素直に口にする。彰は煽られた気分となり、思わず彼女の首筋に唇をつけた。

「——ひゃ、ちょっと！」

「後、二年。仕事が慣れたらさ」

彼女の抗議を無視して彼は真剣な眼差しで静かに呟いた。聞き逃してはいけない気がして百合は黙る。
互いに目を見つめて、ゆっくりと時間は流れる。

「財津の姓にならないか？」

大きく見開かれた彼女の瞳は次第に潤う。ポロポロと涙する百合に彰はキスをした。

「共働きなら、考えてあげるよ」

「…………可愛くねーの」

笑って、見つめて、触れ合う。

ゆっくりと、自分達のやりたいことを見据えながら、間違えぬように歩いていく。

まだ、彼等の道のりは先が見えない。

全てはこれから、ひらいていくのだから。

最終話とこれから（後書き）

えっと。終わりです。………何かいつもこんな感じですね。すみません。

本当次からはちゃんとした設定を組みか、ある程度終わらせてから投稿したいと思います。

こんな駄作ですが、評価・コメント下さると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4836e/>

ふたつのピース

2011年5月12日08時08分発行